運命なんて信じない

マオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命なんて信じない

【Ｎコード】

Ｎ７１２０Ｄ

【作者名】

マオ

【あらすじ】

魔王によって苦しめられていた世界、アズトリーリア。しかし、立ち上がった少年勇者とその仲間達により世界は救われる。姿を消した勇者を、人々は魔王の呪いに殺された、いや、天に帰ったのだとウワサした。姿を隠した勇者と、その仲間。しかし現れた仲間の一人、聖導師（せいどうし）レナフレアは、勇者によく似た美少女を連れていた……。魔王が滅んで平和になった後のアホ話です。

序・終わりが来て、また始まる

ここでない場所。
そこは遠くて近いのかもしれない。
隣り合っているかもしれなく、とてつもなく遠いかもしれない世界。
世界の名は、アズトリーリア。
世界は美しかった。
緑溢れ、水は澄んでおり、山も海も恵み豊かだった。
人々は穏やかに優しく暮らし、小さな争いはあっても国同士が争うようなことはなく、平和な日々を過ごしていた。
だが、ある日その平穏は破られた。
突然に現れた魔王ディザスターを名乗る存在。それはあっという間に世界を恐怖で覆い尽くした。
圧倒的な力を持ち、異形のものを引きつれ、人の命など物ともしない恐怖の権化。
地底のさらに底から現れたとされる魔属の者に、立ち向かえる者は少なく、人々は見る間に魔王ディザスターの支配下に置かれてしまう。
誰もが怯え、恐怖した。
戦った者もいる。逆らった者もいる。
けれど皆、魔王ディザスターの圧倒的な力に敗れた。
人間に逆らう術などない。
人は支配され、もはや希望などない――真っ黒く塗りつぶされたような絶望の日々。
長く続く支配の生活に、怯え、疲れきった其の時、希望のかけらが現れた。
小国、シンシア。
そこで暮らしていた一人の少年が、人々の希望を生み出す旅に

出たのだ。
彼の名はセーズ。十代の半ばを過ぎたばかりの少年は、たった一人で魔王を倒す旅に出た。
無論、一人でことを為せるとは考えていない。
人間一人の力がとてもちっぽけなことを彼は知っていた。
けれど、人間が力を合わせればどんなことでも不可能はなくなると彼は理解している。
セーズは迷わず進んだ。人々を魔王の支配から解き放つ日を信じて。
やがて彼のもとに人は集い始める。
最初のひとりは、あまりにも世間を、現実を知らない彼を見かねた聖導師レナフレア。
『魔王の力は圧倒的よ、アナタ一人でどうこうなるものじゃない』
とんでもない夢想家だと、レナフレアはそう思っていた。
『一人でどうこうなんて考えていないよ。僕の力ひとつじゃ世界は変わらない。僕はちっぽけで弱いから。でも……一人じゃなかったら？』
このときからすでにセーズが希望の光であることは間違いない。優秀な癒し手であったレナフレアはそれを感じ取った。
彼ならばこの世界を救えるかもしれない。
彼女はセーズと行動を共にすることを決意する。自分にできることがあるのならば、それが世界を好転させるならば、喜んで苦難の道を歩もうと。
次の仲間は魔導師の男。
彼は特筆することもなくセーズの仲間になった。
この頃のセーズはすでに人々に勇者と呼ばれ始めており、彼の魔導師も実際にセーズに会って希望を見出したからだ。
『彼ならば、自分の知識と力を貸すに値する人物だ』
彼が持っていた魔導師としての才覚をこの少年なら、世界を救うために間違いなく活かしてくれるだろう。

最後の仲間は魔法剣士であるエリオス。
生れ落ちたときから魔法が使えた彼は迫害と偏見の中誰も信じられなくなっていた。
世界なんてどうでもいい。消えてしまったって構わない。
セーズよりも年下で、すでに世界に絶望してしまっている彼に、セーズは笑いかけた。
『世界は綺麗だよ。もっといろんなところを見に行ってごらん。たくさんのものを見てみるといい。君が思うよりずっと、世界は綺麗なものだから』
その言葉はエリオスには軽く聞こえた。世界を救おうなんて馬鹿なことを考えているお調子者が何か言っている、そのくらいにしか思えなかった。
けれど――町が魔物に襲われたとき。セーズのことを信用しなかった住民をかばいながら、命を懸けて、セーズもレナフレアも魔導師も戦っているのを見たとき、少年の中で何かが音をたてた。
考える間もなく、エリオスは魔法を使って彼らを助けていた。
『なんでぼくがこんなこと……』
戸惑う彼に町の住民の一人がおずおずと言った。
『ありがとう』
それだけ、それだけだ。その一言のためにセーズたちは戦っている。
馬鹿げたことだと少年は思った。それだけで命を懸けて強大な魔王ディザスターを倒そうと思うなんて。
人の笑顔を取り戻すためだけに自分の命を懸けるなんて、なんて愚かなことだろう。
死ぬ可能性のほうがずっと高いのに。
強大な力を持ち、恐れられていたエリオスに、セーズはためらい無く声をかけた。
『一緒に来てくれるかな？　君がいてくれたらとても心強いから』
差し出されたセーズの手は温かく……馬鹿馬鹿しいと思いなが

らもエリオスはその手を取った。

かくて英雄たちは揃う。

勇者セーズ、聖導師レナフレア、魔法剣士エリオス、魔導師の男……彼らは小さな希望だった。

欠片のようにちっぽけで、光ともならないような小さな火の粉。

それでも、どれだけ小さくとも、それは確実な希望となった。

彼らが進むたび、人々の中にある希望の光が灯っていく。

集っていく。

やがて、それは魔王をもかき消すような大きな希望の光へと成長した。

長い長い旅の果て、セーズが旅に出て二年がたつころ、少年は魔王ディザスターと相対する。

今や彼は世界の希望だった。

小国から現れた少年は、誰もが勇者と認めるような存在に成長し、頼りになる仲間を、世界中の人々の信頼を得て、魔王との最後の決戦に赴いた。

激しい戦いは一昼夜の間続いたと言う。

天を割るような一撃を、地を裂くような一撃を何度も受けながら、セーズは仲間たちと共に立ち上がり、戦い続けた。

そして――倒れ付したのは、魔王ディザスターのほうだった。

長い苦しみの歴史に勇者となった少年が終止符を打った瞬間だ。

魔王ディザスターが倒れたとの報はあっという間に世界中に広がった。

セーズたちが魔王の城から帰還する頃には、世界中が舞い上がっていた。

生きて戻ってきた勇者たちを迎えたのは人々の笑顔。

幸せそうな笑顔が、戦いで疲れたセーズたちには何よりの祝いだ。

それで充分という勇者に、人々は心酔した。

彼こそ真なる勇者だと。
祝宴が開かれ、セーズたちは喜びの中、人々の祝福を受けた。
やっと訪れた平和。
これから国の復興やら何やらと、いろいろ大変だろう。
セーズの生国、シンシアもかなりの被害がある。
彼は一旦国に戻ると言った。国のためにできることもあるだろうと。
仲間たちは皆同行すると言った。
今や彼ら四人は家族も同然で、特にエリオスとレナフレアはセーズの姉弟も同様だったからだ。
セーズは嬉しいと笑った。彼は魔王のせいで親兄弟とはすでに死に別れていたのだ。
これからあちこちの復興のために、また一緒に旅をしよう。
そう約束し、祝宴の夜は更け――朝日が射すころ、人々の前からセーズの姿は忽然（こつぜん）と消えた。
つい昨夜まで笑っていた少年勇者の姿はどこを探しても見つからない。
何が起きたのかもわからない。
何も残さず、忽然と消えたのだ。
人々は噂した。
魔王の呪いではないか。死してなお、恨みの力でセーズ様を連れて行ったのではないか。
いや、セーズ様は天からの使いで、役目を終えて天に還ったのだ。
どれもが単なる噂にしか過ぎず、何一つ分からないまま、時間は過ぎていった。

＊＊＊

「……どうしたらいいと思う？」
とんでもない美少女がほとほと困り果てたと言いたげに息をつく。

年のころは十代後半だろうか。つややかで長い黒髪をひとつにまとめ、闊達そうな瞳は銀と金のオッドアイで不思議な美しさをかもし出している。すらりと身長も高めなので、とても絵になる。
誰もが見惚れそうな彼女の横で、考え込んでいるのはこれまた女性だ。
銀色の長い髪を三つ編みにした、桃色の瞳の女性は可愛らしい幼い顔立ちをしている。背も小さいので十代前半に見えた。
姉妹というには髪や瞳の色が違いすぎる。おおかた旅仲間といったところなのだろうが、魔王が倒されて平和になったとは言え、魔物や野盗が出なくなったわけではない。女だけでの旅など無用心極まりないが、彼女たちは平然と森の中を歩いている。
「……やっぱりバーミリアスを探すしかないわよ。あたしの力でもどうにもならなかったから……アイツ本人に問い質すしかないでしょ」
桃色の瞳の少女がやはり困った様子で言い返す。
「うううう〜〜、バーミリアスはなんでこんなことしたんだろう」
理解できないと、オッドアイの少女は頭を抱えた。
「あたしにも理解できないわ。大体アイツ影薄くて何考えているのか分からなかったし」
元気出しなさいと、オッドアイの少女の肩を叩く。
「とにかく、探すしかない。とんずらしたアイツの足跡を探して追いかけましょう」
「うん」
桃色の瞳の少女のほうが年下に見えるのに、オッドアイの少女を励ます様子は年上の女性を思わせる。
「とりあえずこの森を抜けて、ラジルダルに出て……そこで情報収集かな。前行ったとき冒険者酒場あったから……」
一旦方針を決めたので、あとは進むだけだと少女は今後の予定を考え始め、四、五歩進んだところで隣の少女を背にかばうように移動した。

「なに？」
「ん、魔物みたいだ」
どちらもあわてていない。オッドアイの少女は腰に下げていた双剣を手にした。年頃から見て不釣合いなほどに動作にはよどみがない。剣を持つ姿勢も素人のものではなく、歴戦の戦士を思わせるほど隙がない。剣も身にまとっている鎧も、かなり使い込んだものだ。それは後方の少女が持っている杖も同じだった。容姿の年頃と相反してどちらもかなりの使い手のようだ。
「さがってて」
「了解」
桃色の瞳の少女が背に隠れる頃には、地面から錆びた銀のような色の何かが染み出そうとしていた。一匹ではない。湧き出てくるものは少なく見ても五匹はいる。
「スクリプトか……補助かけるわね、ないとは思うけど剣が錆びたら大変だから、保険に」
桃色の瞳の少女は動じることなく、指先をオッドアイの少女が持つ剣に向けた。細い指先から雷のような光が飛び、剣に宿る。
「いいわよ。片付けちゃって」
「うん」
ひとつ頷いて、少女はためらい無く魔物の群れの中に走りこむ。
一動作だった。
彼女が剣を振るったと思うと、周りを囲もうとしていた魔物の全てが両断されている。
準備運動にもならないようだ。とんでもない腕前である。これほどの腕を持つものは大陸でも稀だろう。トッププクラスであることは間違いない。
これだけの実力があるのならば、女二人で旅をしているのも無用心ではないだろう。
「どう？　前とは違う？」
ぐずぐずと消えていく魔物を放って、後方から桃色の瞳の少女が

声をかける。
「……あんまり変わらないかなぁ……背が縮んだわけじゃないから、リーチも変わってないみたいだし……でもスタミナ無いよね？　長期戦は心もとないなぁ」
「そうね。体力は落ちているかもしれないわね。まぁ、一番大事な戦いは終わったから、そうそう長時間戦うようなことはないでしょ？」
「うん……」
少女は周りの気配を窺ってから剣をおさめた。
森の中だが、魔物の気配は薄い。魔王が滅んだための恩恵だろう。魔物が滅び去ることはないだろうが、それでも以前よりはずっと安全にあちこち移動することができる。
旅人にとってはありがたいことだろうに、少女のため息は重かった。

一章・いろいろと困る人たち・1

商業都市ラジルダルはいつ来てもにぎやかだ。
魔王に虐げられていた過去でも、人々はここを中心として辛抱強く生きていた。
いまやその魔王は滅び、人々の顔は太陽のように明るい。
長い苦難が終わることなど、勇者が現れるまで考えたこともなかったのだから、その喜びはとても大きいものだった。
「さあさ、寄ってっておくれ！　平和が来たんだ、お祝いだよ！　騒がなきゃ損だ！」
あちこちでそんな声が上がっている。魔王が滅んだことで人々は浮かれていた。
都市全体がお祭り騒ぎの中にあり、とんでもない安い値段で品物が売られている。
皆喜び、浮かれているのがよく分かる。自然と人々の顔には笑顔が浮かんでいた。
「そこのお姉ちゃんたち！　うちの店には勇者セーズ様が立ち寄ったよ！　見てくれ！　セーズ様が買っていった薬草だってあるよ！」
道具屋からの呼び込みの声に、オッドアイの少女は苦笑した。
「なんだかすごいね」
手を振って断り、彼女は歩みを進める。幸福の空気があちこちに溢れて、こちらも嬉しくなってくる。
「魔王が滅んだのだもの、みんな浮かれて当然よ。あきらめずにがんばった成果だわ」
桃色の瞳の少女は笑っている。周りを見て、彼女も嬉しそうだった。
少し歩くたびに彼女たちには声がかけられる。美しい少女と可愛らしい少女の二人組はただでさえ目を引いた。そのうえ今は街中が浮かれきっている。

「ねえちゃん！　踊ろうぜ！」
そう言って少女の腕を掴もうとした男がいる。がっしりとした体格の男で、腕は少女の腰周りほどもあるだろうか。掴まれたら少女に逃げることは難しい。
が、男が腕を伸ばすころには少女の身体はそこにない。
「ごめんなさぁい、あたしたち急ぐの」
さりげなく、だが素早く男の腕から身をかわし、少女たちはあっさりとすり抜けていく。
残された男はぽかんと見送った。
「あほがいるわねぇ、浮かれすぎだわ、気持ちは分かるけど」
桃色の瞳の少女が笑いながら呟く。その横でもう一人の少女はなにやら落ち込んでいた。
「……ねえちゃん……」
お姉ちゃん呼ばわりされたのが何故だかショックだったらしい。
「落ち込まないの。仕方ないでしょ」
ぽんぽん肩を叩いて慰める連れの少女に、
「レナ……でも僕」
「わ・た・し」
レナと呼ばれた少女は遮るように言葉を強くする。
「うぅ……わ、私」
泣きそうな表情で復唱するオッドアイの少女だ。
「そう、『私』よ。いい？　悲鳴は『きゃあ』ね。わかった？」
とても楽しそうに言われて少女は困り果てた顔になる。
「……分かりたくないよぅ」
「ナニを言っているの、魔物と戦うよりずっと簡単なことでしょ」
にこやかにそう言うレナに対して、少女のほうは浮かない様子。魔物と戦うほうが楽だとでも考えているのかもしれない。
どうやら少女のほうはかなりの男勝りらしい。双剣を扱うところからも知れよう。
とんでもなく美しい容姿をしているのに、性格は男勝りというギ

ャップがある。
「少しの我慢よ」
なだめるようにレナが言い、少女はあきらめたように頷いた。
人ごみを避けるようにして目指す酒場に向かう。どう見てもどちらも未成年だが、二人とも何の気後れも為しに目的の看板が出ている場所までたどり着いた。
看板には『山積みのお宝亭』とある。
昼間でも開いている冒険者用の酒場兼宿屋で、情報も人材も大概ここに集まる。
大きな町には必ずこんな酒場兼宿屋が一軒はあるものだ。
勇者たちも町を訪れるとまずこういう場所に足を運んだという。冒険の基本の場所なのだ。
とはいえ、魔王消滅に浮かれているのはここも同じようで、中からは楽しそうに笑う声が聞こえてきている。
聞こえてくるのは荒くれ男の声ばかり。女性二人が入っていくにはちょっと心の準備が必要な場所だろうに、彼女たちはためらいもなくドアを開けた。
一瞬、視線が集中する。少女は全く臆することもなく、壁を埋め尽くすように張られた依頼のほうへ行き、レナはまっすぐカウンターのほうへ進んだ。
「こんにちは、ドルスさん。あたしのこと覚えてくれているかしら」
小首をかしげるレナに、酒場のマスターは目を丸くした。
「……そのどう見ても十代前半にしか見えない童顔低身長……そのわりにむちむちばいんばいんの聖導師……ってことはレナフレアさんか！」
「……分かりやすいけど嫌な覚え方ね……」
覚えていてくれて嬉しいとは言えなくなったレナフレアである。
男という生き物は女の顔と身体にしか興味がないのか、と思わず半眼になってしまう。
「だってあんた、二十代でその顔は反則だろう？　初めてあんたた

ちがここに来たときゃ、未成年のペーペーだらけだと思って追い返すところだったし」
「そうよねぇ、懐かしいわ。あの時はほんとにバカ扱いされたし？」
口元だけを笑わせて、レナフレアはマスターを見やる。魔王を倒す旅の最中だと言ったレナたちを、ここの酒場の連中はまじめに相手にしなかった。無理もない反応だと彼女自身も思っているので責めるつもりはない。からかっているのだ。
「い、いや、まさか本気だとは思わなくて……悪いことしたと思ってるよ。あんたたち、本当に魔王を倒しちまったんだから！　びっくりしたさ！」
「そうね、倒せたのはセーズのおかげよ。あの子があきらめなかったから。あたしたちに希望を与え続けてくれたから。彼に感謝してね」
「そりゃもちろん！　っとあの子は？　新しい仲間かい？」
壁際で依頼の紙を覗いている少女にマスターは視線を向ける。その視線はなんだかいぶかしげだ。マスターはどこかであの少女を見たことがあるような気がしているのだが、どこで見たのか思い出せない。職業柄、人の顔や特徴を覚えることは得意なのだが、彼女をどこで見たのかは全く思い出せなかった。
「まぁ、そんなところ」
レナは緩みそうになる口元を必死で押さえてなんとかそう答えた。
「ほかの子たちはどうしたんだ？　セーズ様や……あとエリオスだったか？　あのぼうや」
懐かしそうにマスターは思い出す。勇者セーズ。初めて会ったころは頼りない少年に見えた。なのにどこか他人を包み込むような雰囲気を持つ、不思議な少年だった。
そしてエリオス。意地っ張りで可愛くない少年だった。なにをするにも誰かと張り合って必ず勝ってしまうような有能な少年で、マスターが持った印象は本当に小憎たらしい子供だった。
レナフレアとよく口論していたように思う。誰が割って入っても

止まらないケンカだったが、セーズが入ると必ず止まった。レナもエリオスもセーズに対してはとても意地を張り通せなかったのだ。その関係はなんだかほほえましく、本当の姉弟のようだったことをよく覚えている。
「エリオス……えぇ、今は別。あたしたちはバーミリアスを探しているの」
「バーミリアス？」
マスターは首をひねった。どこかで聞いた名だ。あまりはっきりと覚えていないが。
「魔王を倒した英雄のあんたがわざわざ探しているってことは大罪人かい？　よっぽどの罪を犯したんだろ」
「え」
レナはきょとんとして、それから笑い出した。
「ち、違うわ。バーミリアスはあたしたちの仲間だったでしょ、覚えてないの？　いくらアイツの影が薄いからって大罪人はないじゃない」
「仲間ぁ？　……あんたたち三人パーティーじゃなかったっけ？？」
本気で言っているらしいマスターに、レナは耐え切れず大爆笑した。
確かにバーミリアスは影が薄かった。セーズを始めとする仲間内で一番印象の薄い男だ。外見は十人並み、とにかく目立たない。
身長はかなり高いのに、人の目に入らないらしい。そこまで行くともはや特技の域だとエリオスにいつも冷たく言われていたが、まさかここまでとは。
「ほ、ほんとに覚えてないの？」
収まらない笑いにくすくすと肩を震わせながらマスターに訊いてみる。
「えぇー？　セーズ様だろ、レナフレアさんだろ、エリオス坊やだろ？　バーミリアスなんて奴いたのか？　あ！　この街を出てから仲間になった奴じゃないのか！？」

違う違うとレナは笑いながら首を振った。エリオスが仲間になるころにはすでにバーミリアスは仲間になっていたのである。
どうやらマスターは本当に覚えていないようだ。人の顔を覚えるのが仕事のような冒険者酒場のマスターにさえ忘れられる男、バーミリアス。
やはり特技の域である。すごいわ、バーミリアスと、レナは内心で感心した。
群集の真っ只中で裸になってもバーミリアスなら誰にも気付かれないかもしれない。
「どんな奴だった？　容姿とか特徴は？」
どうしても思い出せないマスター。レナはまだ笑いながら探し人の特徴を言葉にする。
「年は二十二、魔導師で、背は高いほう、髪の色は紫、目は青。特徴は……影が薄いわね。すごく目立たない、それに尽きるわ」
太っているか痩せているかすればまだそれが特徴になったものを、体型はやはりごく普通。あたりさわりもなく、特徴もない。顔が良いわけでもなく、これまたあたりさわりない。
周りにいた仲間たちがまた、顔の造詣の良いものばかりだったのでなおさら目立たなかったのではないだろうか。
セーズは超のつく美形、エリオスはそこまでいかなくともやはり美少年。レナは可愛らしい女性。この中でバーミリアスだけがごく普通。実力的には魔王を倒すパーティーにいただけあって相当強いのだが、とにかく目立たないので知られていないらしい。
現に実際会っただろうここのマスターでさえ、覚えていないのだ。
「バーミリアス、バーミリアス……名前に聞き覚えはあるようなないような……で、何でそいつを探しているんだ？」
「ちょっと用事があって。アイツにしか分からない魔法の話なの。どこ行ったのか分からないのよね、音信不通で」
困っているのよとレナは苦笑いを浮かべる。心底から困っているのは彼女ではないのだが。

「今のところ心当たりはないが……英雄の頼みだ、なんとか調べてみるよ。ここに来る連中で見た奴がいるかもしれないしな」
「お願いするわ。部屋は空いている？　しばらくここに泊めてほしいのだけど」
「あぁ、大丈夫だよ。とっときの部屋をあてがうさ！」

一章・いろいろと困る人たち・1（後書き）

勇者のパーティーは美人ぞろいだったようですが、バーミリアスだけ、別（酷）

一章・いろいろと困る人たち・2

レナは金貨をカウンターに置き、マスターから部屋の鍵を受け取って、壁際で待っている少女の方へ戻ろうと身を翻した。
マスターとの会話を聞いていたらしい店にいた荒くれどもが、レナを尊敬するような目で見つめていた。声をかけたいがどう話しかければいいのか分からないらしい。
魔王を倒してから、こういう扱いをされるようになった。今までこちらを相手にしようとしなかった人たちまでいろいろ話しかけてくる。そういう人に限ってやたらと馴れ馴れしい。いちいち相手にしていてはキリがないのでレナは無視した。
英雄と騒がれるために魔王と戦ったわけではないから。
「お待たせ」
少女の肩をぽんと叩く。
「ずいぶん楽しそうだったね、レナ」
一体なにを話して爆笑していたのかと少女は不思議そうだ。バーミリアスの居場所を訊いているはずなのに、そこまで大笑いするような話があったのだろうか。
「それがね、大笑いよ。マスターはあたしやセーズ、エリオスのことはちゃんと覚えていたのにバーミリアスのことは綺麗に覚えてないの」
「え、そうなの？　ここに来たときバーミリアスいたのに？」
信じられないと言いたげに少女は目を丸くする。少女もバーミリアスの知人のようだ。
印象の薄い彼のこともきちんと覚えているらしい。
「いたことすら覚えてないみたいよ」
レナの返答に少女はふと、笑いをこらえるような表情になった。
「ぼ……私、エリオスの言ってたこと思い出しちゃったよ……」
「あ、『そこまでいけば影の薄いのももう特技の域だよね』でしょ

？」
「うん」
「あたしもソレ思いだして笑っちゃったの。エリオスってば上手いこと言ったわよね」
二人は顔を見合わせて笑いをこぼした。少女はバーミリアスだけでなく、エリオスのことも知っているようだ。レナの話にちゃんとついてきている。
ひとしきり笑ってから少女はふと肩を落とした。
「エリオス……元気かな」
「大丈夫でしょ、あの子なら。しっかりしているもの」
レナは仲間だった小生意気な美少年を思い浮かべる。魔物との戦いでは頼りになるセーズだったが、所詮小国の田舎出身で世間知らず。小さいころから苦労していたエリオスに比べれば、何も知らないのと同じに見えたのだろう。
人が好(よ)いため、ぼったくりにあいそうになったり、客引きに無理やり引き込まれそうになったりしたセーズをよく護っていたのもエリオスだ。頼りないなぁと言いながらセーズを護れるのは嬉しそうだった。ひねくれものでもセーズにはなついていたのだ。
パーティー内でレナの次に金銭感覚がしっかりしていた。あの少年なら一人でも心配要らないだろう。
むしろ心配なのは、研究一辺等でセーズと変わらないほどに世間知らずだったバーミリアスだ。一緒に旅をしたので旅をする前よりは多少マシになったと思うが、焼け石に水とも思う。
「エリオスより心配なのはバーミリアスよ。早く見つけないとどこかで干からびるのは間違いないわ」
「う。で、でもバーミリアスだって大人だよ？」
「あの研究バカのどこが大人？　年を取ってしまえば大人ってわけじゃないの」
ものすごく正論である。レナもしっかりしているようだ。魔王を倒したパーティーにいたのだからそれくらいでなければ為しえなか

ったかもしれない。
「……バーミリアスが干からびる前に見つけなきゃね……」
なにやらいろいろと思い当たることがあるらしく、少女のほうも納得し、早く見つけなければと危機感を覚えたようだ。
十代後半の少女に心配される二十男。情けないことこの上ない。
「この街にいてくれたらいいんだけど」
少女は息をつき、壁に貼られている紙を見る。何か手がかりがあるかと思ったが、あるのは魔物退治とか、薬草を取ってきてほしいとかの依頼ばかりだった。
かなり切羽詰っている依頼もあるので時間があれば引き受けたい。
「ねぇ、レナ。バーミリアスのこと何か分かるのって時間かかるよね？」
「そうね、少なくとも一週間はかかると思う」
「じゃあ、依頼受ける時間あるよね？」
レナは苦笑した。この子が困っている人を放って置けるはずもない。
「アナタがやりたいのなら止めないわ。いつだってそうだったでしょう？」
彼女はもうその依頼を受けようと決めている。確かめているのはレナの意思を気にしてくれているのだ。レナが行きたくないのなら、自分ひとりで行くから休んでいて、と。
一人で行かせるなどと、可愛いこの子にさせられるものか。
「もちろん、あたしも行くから」
「……ありがとう」
彼女は嬉しそうに笑う。曇りないその笑顔に、ノックアウトされた者がいた。
たった今、酒場に入ってきたガタイのいい褐色の肌の男。
彼女の笑みを見て、よろりとよろめいて、それから勢いよく立ち直った。
一見して旅の戦士と分かるその男はダッと走り少女の手を掴もう

として――少女の手のひらに阻まれる。
少女は勢いよく走りよった男の剣幕に危機を感じたのか、男が走り寄るわずかの間にレナを背にかばって、ただ手のひらを男に向けた。それだけで、店内の誰もが抜き身の剣を突きつけられたような感覚を受けた。彼女は腰の剣を抜いてもいない。
寸前までごく普通の女の子と見えた彼女が、達人と知れた一瞬である。
「なんでしょうか？」
手のひらを突きつけたまま、落ち着いた声で少女は言う。
「ぼ……私たちに何か御用ですか？　あなたとは初対面だと思うのですが」
「け」
「け？」
け。
毛？
それとも気か家か卦だろうか。

「結婚してください！！」

男は大絶叫し、店内の時間が瞬間凍結した。
「……はい？」
少女は眉を寄せて、なにを言っているのだこの人は？　と言いたげだ。何を言われたのか理解していない。あまりにも彼女の予想から離れたことなので。
彼女の背後からレナが吹き出すのをこらえながら顔を出した。
「く、くく……っ、ぷ、プロポーズってことかしら、オニイサン？」
今にも笑い出しそうだ。
「はぁ！？」
声を上げたのは少女である。
「レナにプロポーズ！？　ちょっと待ってください！　今会ったば

っかりじゃないですか！」
本気でそんなことを言って、顔を出しているレナをまたかばう。
「ぷぷぷぷーーっ！！」
かばわれているレナは耐え切れず吹き出した。男の視線は間違いなく少女を見ている。プロポーズの相手はレナではなく、少女のほうだ。
自分が求婚されているなどと夢にも思っていない少女は、納得いかないと言いたげに男を睨みつけている。
「ちが、違う、違うのよ」
笑いながら少女の肩を叩くレナ。面白すぎておなかが痛いと身体を折っている。
「違うって、なにが？」
「根本的に、相手が」
「え？」
やっぱり分かっていない少女だ。レナはなんとか息を整えて、男の視線を指で示した。
真っ赤な顔をして立ち尽くしている彼が見ている先――少女本人を。
「えっ！？　何で！！」
やっと男がプロポーズした相手が自分だと理解して、彼女は異形のものを見るような視線で男を見た。本当に変なものを見るような視線だ。理解できないと表情も述べている。
「変態ですかあなた」
真顔だ。背後でレナがまた爆笑した。
「何で変態なんだ！？　俺はまじめに君に結婚して欲しいと思っているんだ！　一目惚れしたんだ！　結婚してくれ！」
男も真剣だ。そして、少女も真剣だった。
「お断りします。変態とお付き合いする趣味はありません」
「何で変態だ！？　しかも即答！？　もう少し考えてくれてもいいだろう！？」

「嫌です」
食い下がる男に、心底から嫌だと拒否する少女。その背後で笑い転げている女性。
「お、面白すぎる……！」
レナだけが状況を明確に把握していた。ひとしきり笑って楽しんでから、トントンとまた少女の肩を叩く。
「ちょっとこっちいらっしゃい。あ、オニイサンはそこで待っていて」
男についてこないように言って、少女の手を引き店内の隅っこに連れて行く。なにやらぼそぼそと小声で少女にささやくことしばらく。
「あ！」
何かに気がついたのか、少女は声をあげ、次いで、
「え、えぇっ！？」
驚いたようだ。その反応が面白かったらしく、レナがまた笑う。彼女は別に笑い上戸と言うわけではないのだが、この店内では予想外のことが起こりすぎているのだ。
「笑ってる場合じゃないよ！　どうするの、どうしたらいいの！？」
青い顔であわてている少女だ。彼女にとっても予想外の出来事が起きているらしい。
「どうって、断るのでしょう？」
「当たり前だよ！」
「じゃあそれでいいじゃない。ね？」
「そ、そうかな」
「でも、これから覚悟しておいたほうがいいわよ？　こんなこと何度も起こるかもしれないから」
「嫌だよぅ……」
などと言う会話を小声で交わして女性二人は戻ってきた。
「この子がイヤがっているからあきらめてね、オニイサン」
レナは少女を護ることを選択している。素性の分からない男なん

ぞに可愛いこの子を渡すわけにはいかない。
「う、で、でも……俺は本気なんだ。お姉さんはきっと幸せにするよ、だから認めてくれ妹さん！」
髪の色などは違うが、その仲良しぶりに彼女たちを姉妹とみなしたらしい男は、必死でレナに頼み込む。
「うふふ、『いもうとさん』ねぇ……ちなみにあたしは二十代よ。アナタとそんなに変わらないと思うけど」
男はどう見ても二十歳前後。レナの外見で思い切り子供だと思っていた男は硬直した。
「おほほほ、可愛い『いもうと』を旅の戦士なんかには上げられないわ、あきらめてね～」
なにやらとても楽しそうにそう言って、レナはひきつった笑顔を浮かべている少女を連れて二階に上がっていった。残された男には、店内にいる野次馬がふられたなと笑いながら声をかけてくる。
「あきらめな！　魔王を倒した英雄が連れている女の子だぜ？　その上、あんなに美人なんだ、高嶺の花もいいところだろ！」
「え、英雄？」
あんなに可愛らしい女性が、魔王を倒した英雄だと知って、男は再び硬直した。

一章・いろいろと困る人たち・２（後書き）

ものすごく楽しそうなレナフレアと、心底から困っている女の子。
そして、暴走した男（笑）

一章・いろいろと困る人たち・3

晩方に、二人は依頼をひとつ受けた。近くの村が魔物に襲われ、子供がさらわれたというもの。できれば次の犠牲者が出ないように魔物を退治して欲しいようだが、貧乏な村のため、報酬はないに等しい。もう子供は助からないだろうから、せめて遺体だけでも回収して欲しいという切実な両親の願いが垣間見える。

聖導師であるレナは子供を慈しんでいるし、少女のほうも心優しい。放ってはおけない。

早朝に出発することにして、その日は休んだ。

晩には何事もなく……次の日、早朝。旅支度を整えた彼女たちの前に、昨日の男が立っている。しかも、彼も旅支度。いつどこにでも行けるような格好だ。

「何か御用？」

嫌な予感を感じつつ、レナが声をかける。男はためらいなく答えた。

「俺を仲間にしてくれ」

「は？」

「あんたたち魔物退治に行くんだろう？　女二人でなんて危ないよ。見たところそっちのお姉さんは聖導師だろう？　戦いには向いていないじゃないか」

どうやら昨夜、依頼を受けたところを見ていたのだろう。女性二人で行くというのが心配なので同行すると言う。

レナと少女は顔を見合わせた。確かにレナは聖導師――すなわち癒し手で、回復魔法と防御魔法の使い手だ。回復と防御に特化しているので、攻撃方法には乏しい。魔物退治には向いていないのは確かである。

「えっと……確かにあたしはそうだけど、この子もいるし、今までも別段困ったことはないわよ？」

レナ一人ではないのだ。双剣を腰に携えた少女が横にいる。一見してあまり強そうには見えないが、少女が本気を出せば達人だということを昨日男も知ったはずだ。
「でも二人では危険だよ。俺なら頑丈だし盾にもなれるから。魔王を倒した英雄がこんなところで危険な目に遭うことはない」
男は頑として意見を曲げない。下心は全くなく、純粋に彼女たちを心配しているようだった。いい人である。だからこそ断りにくい。
「お気持ちはありがたいのですが……大丈夫ですよ？　僕、それなりに強いですから」
何気なくそう言った少女を、レナがつついた。
「わ・た・し」
「……強いので大丈夫です」
トホホと思いながらごまかす少女だ。
「いや、安心できない。君はとても華奢（きゃしゃ）だし、女の子は男より体力もない。うっとおしいだろうけど、ただの盾と思ってくれていいから」
体を盾にして君たちを護るからと男は一生懸命だ。ただ彼女たちを心配してくれている。親切心から言ってくれているのは分かる。けれどこの依頼は魔物が関わっており、村の住人だけでなく、自分たちの命も賭けなくてはならない。昨日会ったばかりのこの男と命をかけた冒険に出るだけの理由が、こちらにはまだ見えてこない。
「同行しても、たいして報酬もらえないわよ？　とても困窮（こんきゅう）している村のようだから」
「かまわない。君たちはそれでも行くんだろ？　子供をさらわれた親のために、不安を抱いている村の人のために」
この男も善人だ。しかもお人好しの善人だ。そしてそれを自分で分かっていて、それでいいと覚悟している。
魔王を倒すと誓って立ち上がった、少年勇者セーズのように。
「人生損するタイプねぇ」
言うと、男は笑った。

「君もだろ？　なにせ魔王を本当に倒した一人なんだから」
レナは少女を見た。少女はくすぐったそうに苦笑している。男が悪い人ではないようだと分かったので、昨日のような警戒は持っていない。
「……それを言われると言い返せないですね」
少女はそう言って、ちょっと首をかしげた。
「今回くらいのなら、ついてきてもらっても構わないと思うんだけど、レナはいい？」
「いいわよ。アナタがそう決めたのならね」
「じゃあ、今回だけよろしくお願いします。えっと……？」
名前が分からない。少女の視線に男はハッと気がついて、あわてて自己紹介をした。
「俺はイズ。二十一だ」
「あたしはレナフレア、二十三歳よ」
「ぼ……私は」
「彼女はセレスティータ、愛称セーナよ、年は十七歳」
少女をさえぎって、レナが言う。少女・セーナは目を丸くした。
「ちょっと待っててくださいね、イズさん」
セーナはレナを引っ張って隅に走っていった。そこでこしょこしょと囁く。
「レナ？　セーナって何？」
少女の本名ではないらしい。レナはこしょこしょ囁き返す。
「だって言っちゃったらばれるけど、いいの？」
「うっ」
「そういうわけでアナタはセーナちゃん。ＯＫ？」
「うぅ……はい」
どうやら『セーナ』にはいろいろ事情があるようで、イズには知られたくないらしい。共犯者だろうレナは満面の笑み。彼女はとても楽しんでいる。
「じゃ、行きましょうか、セーナ」

「レナ……楽しそうだね……」
「とっても楽しいわ」
即答する彼女にセーナは肩を落とした。遊ばれているのは分かるがそれでも彼女しか頼れる人がいないのだ。遊んでいてもレナはいざというときには必ず自分の味方であることもよく分かっている。
「ちゃんと覚えておくのよ、これからはセーナって呼ぶから」
「うん……」
セーナは何度か口の中で付けられた名前を繰り返し、覚えた。これからしばらく自分はセーナだ。そう呼ばれたら返事をしなくてはならない。
「うぅ……嫌だなぁ」
「仕方ないでしょう？　ほら、イズが変な顔しているわ、戻らないと」
つつかれたので仕方なくイズのところへ戻る。
「なんだか分からないけど、話は終わったのかい？」
イズはあまり怪しんでいないようだ。女性同士の話だからと気にしていないフシがある。根掘り葉掘り訊いてこないので、セーナは安心した。訊かれても上手く答えられる自信がないのだ。
「はい。今回はよろしくお願いします、イズさん」
「んー、むずがゆいなぁ、『さん』はいいよ。かゆくなってくる」
苦笑して二の腕を掻くイズに、レナがにこやかに笑いかける。
「だめ。この子のこと呼び捨てにしたいのでしょう？だ・め・よ」
ニコニコとしながら、背後にとても恐ろしい黒い炎を背負っているのがイズには見えた。
「え、いや、そんなことはっ」
何か弁解しようとした男をあっさり無視して、
「セーナ？　『さん』は礼儀だからやめちゃだめよ。アナタは年下なのだから敬語もね。まだ会ったばかりで全然！　親しい仲ではないのだから」
にこやかに、あくまでもにこやかに、レナはイズにぐさぐさと釘

を指した。セーナに言っているのではなく、イズに『この子に手を出したら許さないわよ』と述べているのだ。
「うん」
セーナは素直に頷いてとても可愛らしいのだが、反してイズは冷や汗をかいていた。
レナは攻撃に乏しい聖導師のはずなのに、戦士であり男であり、腕っぷしは彼女よりずっと強いはずのイズは恐怖を覚えた。
保護者の威圧、恐るべし。

こうして、女二人に男が加わり、コンビからパーティーになった三人は依頼をしてきた村に向かうことになった。幸い、街道に近い村なので、近くまでは乗合馬車で行ける。
あまり乗り心地は良くないが、贅沢は言えない。二日かけて馬車を乗り継ぎ、馬車に乗り合わせた老婆に延々と昔話を聞かされたりしながら、目的の村・バルトの近くまで馬車に揺られた。また老婆の話の長いこと長いこと。同じような話を繰り返すその怖ろしさと言ったら、降りるころには一番体力のあるイズがぐったりとしていたほどである。
女の長話に、男は耐えられないという見本がここにある。
ちなみに、お人好しのセーナは延々と続く話にも根気よく付き合い、世慣れしているレナは大半をにこやかに聞き流していた。それでもえらく気に入られ、うちの孫の嫁にならんかとまで言われたときはさすがにやんわりと断っていたが。
「すごいばあさんだったなぁ……よりにもよって英雄に……」
イズは遠ざかる馬車を見送ってしみじみと呟く。魔王を倒した英雄の一人が、あやうく農家の嫁にされるところだった。
なっていたら世界最強の農家の嫁だろう。ちょっと見てみたい気もする。

農具を武器に、畑を荒らす魔物を蹴散らす農家の嫁、レナ。

……とても怖いような気がするのは気のせいだろうか？
「世界中が落ち着いたら、お嫁さんもいいかもね。レナならとても良いお嫁さんになれると思うよ」
イズがそんな想像をしているとは夢にも思わず、セーナは純真にきっと可愛いお嫁さんだよね、などと天使のように微笑んでいる。
「そうねぇ、魔王を倒すようなおっかない女を嫁にしたいと思う奇特な人がいればね」
「おっかなくなんてないよ、レナはとても可愛い人だから」
セーナはきょとんとしている。レナは破顔してセーナの頭を撫でようと背伸びした。
「可愛いのはアナタよ～、もう本当に可愛いことを素で言うのだからこの子はっ」
「えぇ？　何のこと？　ほんとにそう思ってるんだよ？？」
「分からなくていいわ、そのままでいて」
「？？」
なおさら分からないセーナである。時々レナの言っていることが本気で分からなくなるのはどうしたらいいのか。世慣れしていない証拠だと、セーナは気付いていない上に、レナはそのままっすぐでいて欲しいと考えているので、教えない。汚れた大人にはなって欲しくないものだが、あまりにも世間知らずだと生きて行けないような気がするので加減が難しいところだ。
二人のやり取りを見て、イズがうんうんと頷いた。
「あぁ、気持ちよく分かるよ、レナさん」
「うふふ、あまり同意されると困るわ。虫がつくのも嫌なのよ？」
「？？　何の話？　レナ、イズさん」
「「分からなくていい」よ」のよ」
にこやかに二人同時に言ってくるので、セーナは首をかしげて、二人とも会ったばかりなのにずいぶんと気が合うんだなぁなどとトンチンカンに納得している。

水面下どころか露骨に自分をめぐっての争いが起きているとは考えてもいない。

一章・いろいろと困る人たち・3（後書き）

鈍いのです『セーナちゃん』（笑）

一章・いろいろと困る人たち・４

イズはまだセーナをあきらめていないらしく、歩きながら彼女にいろいろと話しかけてくる。
「セーナちゃんは剣士かい？　双剣を使うなんて変わっているね」
彼女の腰にある剣は長剣と短剣の間くらいの長さだ。ちなみにイズは大剣を背負っており、レナは長い杖を携えている。
「そうですか？　ずっと双剣を使っているんで……そう言えばほかの人が使っているところあんまり見たことないかな」
「そうね、言われてみればあまりいないかも」
レナが同意する。魔王を倒す過程であちこち旅をしたが、双剣を使う人は珍しい。普通は一本の剣を使いこなすのがやっとだし、それで充分事足りる。
「あ、でもレナフレアさんは見たことあるだろ？　勇者セーズは双剣使いだって聞いたことあるよ。彼に憧れて双剣使いになろうとする冒険者はこれから増えるだろうし……と、ひょっとしてセーナちゃんもその口かな？」
「違うわよ、この子はもともと。腕前は昨日のアレで分かったでしょ？」
昨日、イズの突進を手のひらを向けただけで止めた少女。あの気迫は達人のものだ。
下手をするとこの華奢な少女は剣技の点で言えばイズより強いかもしれない。
腕力や体力では負けないという自信があるので、イズが自信を喪失することはなかったが。
「アレだけの腕前になるのは相当鍛錬しただろう？　女の子がどうしてそんなに？」
腕利きの冒険者になりたかったのか、それとも他に目的があるのか。

「えっと……どうしてもやりたいことがあって、強くなる必要があったもので」
言い辛そうにセーナはもごもご。あまり答えたくないようだ。
何か辛いことでもあったのかと考え、イズはそれ以上事情を問うのは止めにした。人にはいろいろ事情がある。魔王が人々を虐げていた世の中だったのだからなおさらだ。
――セーナの横でレナが吹き出しそうになるのをこらえていたので、そんなに深刻な事情ではなさそうなのだが気を使ったイズは気がつかない。
「イズさんは大きな剣を使うんですね。戦士と言ってましたけど、魔法のほうは使わないんですか？」
話を逸らし、話題は魔法に移った。訊かれてイズは頭を掻く。はっきり言って、彼は魔法など全く使えない。使う気も無い。
「んー、俺はからきしだね。難しいこと考えるのは苦手だし……魔力も無いようだから。セーナちゃんは使えるのかい？」
「少しは。でも魔導師や聖導師が使うような高位のものは難しくて」
「あー、そうだよね、魔導師が使う呪文とか聞いているだけで頭痛くなってくるよ、俺は」
イズは誤解している。セーナは『使えない』とは言っていないのだ。初級程度のものしか使えないのだろうと勝手に解釈して、それでも使えるのはすごいと褒め始めた。
魔力も無いものからしてみれば、魔法は神の力も同然だ。なにやらいろいろと小難しい理論や法則があるらしいが、普通の人にそんなものは分からない。
なんかすごい力。認識はその程度で、魔法を使えないイズも一般人とあまり変わらない認識をしているようだった。
「たいしたことではないわよ。魔導師は世界の陰の力、聖導師は世界の陽の力、それを呪文で呼び出したり、契約したりして使っているだけ。まぁ呼び出したりする力の強さは本人の魔力容量によるけれど」

「それがもう分からない……」
「そんなに難しいことかしら？　べつに古代の魔法の話とか絡めているわけではないのに」
　基本的なことでしょうとレナフレア。魔法が使える彼女にとっては理解しなければいけないことだ。何も知らずに魔法を使うのは、危険すぎる自爆行為と変わらない。
「古代には文字を使った魔法とか、手で印を組んで使う魔法とかあったらしいわよ。他には冥魔術とか聖魔術とかもあったらしいけど、今は跡形も無いわね」
「森の賢者様なら使えるって話だよね」
「そうね、世界創生から生き続けている彼の賢者様なら行使できるでしょうね、世界にある、ありとあらゆる魔法を使える存在と言われているし」
　実際、勇者セーズは旅の中で森の賢者、通称ジルゼと呼ばれる存在に出会い、魔王を倒す方法と武器を授かったと言われている。
　ほかの仲間は森の中で道に迷い、ジルゼには逢っていない。レナフレアも、だ。
　だが、ジルゼはちゃんと仲間の分の装備もセーズに授けてくれた。レナフレアが受け取ったのは、今も彼女がつけているブレスレットに近い篭手。何で出来ているのかとても軽く、ある程度の攻撃を魔法的な防御結界で防ぎ、そのうえ、魔法の詠唱を極端に縮めてくれる力を持つものだ。ほかの仲間もそれぞれ強力な装備を受け取っている。ジルゼはケチなひとではなかったらしい。
　あまりにも強大な力を持っているが故に、直接世界に干渉しないと言われている賢者。
　その賢者が使う魔法とは、一体どれほど強力で未知のものなのだろう。
　……嬉々としてそんな話を女二人でしていたら、いつの間にかイズがおとなしくなっていると気が付いた。
「！　わ、イズさん！？」

「ちょっと大丈夫！？」
古代の魔法だの、森の賢者だの、難しい会話について来られなくなったらしい彼の頭からは煙が出ている。シャレでもなんでもなく本当に少しでも難しい話は考えられないようだ。これ以上魔法の話を続けると、イズが廃棄品になりそうなので女性二人は苦笑して話を止めた。
話をしている間も足を止めなかったため、目的の村は近付いている。街道は魔物の気配も無く、平穏なものだった。魔王がいたころは街道を歩いていても、運が悪ければ魔物に遭遇した。魔王が滅んだことにより、大手を振って人間を襲っていた魔物たちもこそこそと森や山の奥に引っ込んだらしい。
真昼に街道を歩く限りは安全な旅ができるようになったようだ。夜間はその限りではないが、魔王がいたころよりはずっとマシだろう。
平和をかみ締めつつ歩き、バルト村が視界に入るころに、ぽんこつイズが正気に返った。煙を吹きながらも足を止めなかったのは、セーナとレナを護るという心からか。
いっそアッパレである。
「うお？　もう村が目の前に！」
完全に意識が途切れていたらしく、村を見てびっくりしている。
「……この人面白いわね」
しみじみとレナは思った。セーナは苦笑しているが否定はせず、これだけ難しい話に弱くて、よく今まで冒険者をやっていられたなぁと思っているのは間違いない。
ちょっと魔法の話をしただけで壊れるようでは、ろくにパーティーも組めないのではないだろうか。
これが理由で彼は一人でいたのかもしれない。もといたパーティーを追い出されたとか、そういう話ならありそうだ。哀れでもある。
「……セーナ、なるべく優しくしてあげましょうね。どうせ今回限りだし」

「？　レナ、なに考えたの？　なんかすごく可哀想って言いたげだよ？？」
なにやら痛く同情した目になったレナに、セーナは首をかしげた。お人好しのセーナはレナほど深刻に考えなかったのだ。
「気にしないで、アナタはいつも通りでいいわ。考えてみたら調子に乗りそう……悪い虫が」
「むし？」
「気にしないで」
男勝りのせいなのか、自分が絶世の美少女ということに自覚が無いのか、セーナは首をひねるばかりだ。これだけ美しくスタイルもいい彼女に、自覚が無いというのはそら恐ろしい。レナがついていなければ人買いにでも騙されて売られてしまいそうだ。
魔王のせいで人の心まで荒れ果てた世界の中、こんなに純真な子が育ったのは奇跡だろう。ヒソヒソと交わされた会話を聞いていたイズは心からそう思った。
やっぱり彼女と結婚したい。冒険者なんて風来坊はやめて、まっとうな職に就いたら彼女も考えてくれるだろうか。いや、この際彼女といっしょに冒険をするのもいい。
頼れるところを見せたら、彼女だって少しは気にしてくれるのではないか。
……なにやら一人考え込み始めたイズをレナはにこやかに見つめた。
ただし、笑っているのは口元だけだ。
目が、怖い。
レナにとってのイズは『悪い虫』である。それ以外の何者でもない。可愛い『いもうと』に近付こうとする『男』は阻止しなければならない理由がある。
『セーナ』が望んでいないからだ。それ以上の理由は無い。
なにやら殺気のような気配をかもし出しているレナの隣で、セーナは近付く村を眺めている。遠目では何の変哲も無い村だ。

彼女の思考はすでに依頼に向いていた。人々が困っている。魔物に苦しめられている。子供を連れ去られ、悲しんでいる。村の人の苦しみを、ほんの少しでも軽減することだけを彼女は考えていた。

ほかの二人とはえらい違いである。

「早く行こう。村の人たちを助けなきゃ」

セーナに促され、レナはハッとした。セーナの表情はきりりと鋭い。先ほどまでの可愛らしい様子とは全く違っていた。

「ええ、そうね」

お遊びのような思考を捨て、レナは頷いた。セーナが本気になったとレナには分かる。

イズも思わず少女を見つめてしまう。

本当に同一人物なのか。いまの彼女に何かを命じられたら、そのまま従ってしまいそうだ。惹きつけられる。

先を行くセーナに率いられるように、イズはその背についていくことしかできなかった。

「レナフレアさん」

横を歩く女性に細く声をかける。セーナと旅をしている女性。彼女のことを知る女性。とても仲がよさそうな二人。

「セーナちゃんは一体……何者なんだ？」

あのカリスマ。外見が美しいだけではない。世間知らずの頼りない少女にも見えた彼女が、一瞬で別の顔になった。

「……あたしの、大事な家族よ」

レナは笑ってそう答えた。彼女にとってはそれがいつも真実だ。

それ以上答えるつもりはない。レナは足を速めてセーナと並んでしまったため、イズもそれ以上問うことはできなかった。

そのまま村に入る。入り口近くにいた村人に依頼を受けてきた者だと話し、どこに行けば詳しい話を訊けるのか教えてもらった。村人はどう見ても戦力にはなりそうもない女の子二人に見惚れて、それでも村長宅を教えてくれた。

訪問した村長宅でも、似たような視線で出迎えられた。

「……あんたら、大丈夫なのか本当に」
無骨なイズは別として、華奢な超美少女セーナと外見十代前半少女にしか見えないレナでは説得力が無い。年若いこと、華奢な外見、これらのどこを見て安心しろと言うのか。村長が心配になる気持ちも分かるセーナは苦笑する。
こういう扱いはされ慣れているらしい。さほど悔しいとも思っていないようだった。
「全力は尽くします。詳しいお話を訊かせていただけますか？」
「ん、む……まぁ話だけなら構わんが……そんなことよりあんたら冒険者なんかやめてうちの息子たちの嫁にならんか」
真顔で言う村長だった。思わずイズが腰を浮かせ、レナに足を踏んづけられてまた座る。
「お仕事のお話をさせていただきますね」
きょとんとしたセーナに変わって、にこやかにレナが割って入る。こういう話はセーナでは受け流すのは無理だ。
「いや、そんなべっぴんなのにもったいない！　あんたらのような美人にわしゃ『お義父さん』と呼ばれてみたい！　嫁に来なさい！
幸いうちの息子どもはいい歳して独身のうえ、恋人もおらん甲斐性無しじゃ！　問題ない！」
問題が山積みな発言を、レナは笑顔で受け流す。イズは何か言おうとするのだが、そのたびに彼女に足をえぐるように踏みつけられ、何も言い出せない。
「おほほほ、お仕事のお話ですけれど、お子さんが魔物にさらわれたとのことですが、どなたか目撃した方はいらっしゃいますか？」
「そういうことはそっちの男に任せなさい！　いいからあんたたちは『うん』と言えばええ！　あとはわしが全部お膳立てしちゃるからの！」
だんだん興奮してきた村長だ。魔物が人間をさらったというのに、ずいぶんとのんきなことである。レナは笑顔で村長の横にいた奥さんに話しかけた。

「いろいろと大変そうですので、他にお話を訊ける方はいらっしゃるでしょうか」
嫁になる気など全く無いとの意思表示だ。これ以上のアホ話には付き合っていられない、とも言っている。
村長の奥さんはとても申し訳なさそうに笑って、
「実際子供をさらわれたご夫婦が村の外れに住んでいます。そちらでお話を訊かれたほうがよろしいかもしれません」
「では、そちらのお宅に伺ってみますわ」
「行かんでいい！　挙式はいつがええかのう？　一番近い吉日はいつだったかの？　おお、息子たちが帰ってきたら嫁が来たと話してやらんと！」
一人盛り上げる村長は、よっぽど息子を結婚させたいらしい。彼女たちの意思など綺麗に無視している。レナはにこやかな笑顔を崩さず、さりげなく、村長の話についていけなくて混乱しているセーナの手を引いて、奥さんにさわやかに言って立ち上がる。
「心中お察しいたしますわ」
輝くような笑顔だが、どこか怖い。村長の奥さんも似たような雰囲気をかもし出している。　表現するならば一言、『黒い』。
「ええ……申し訳ありません」
「さ、行きましょう」
「えと、じゃあ失礼します」
セーナもなんだかこのままここにいるのはまずい、と理解したようだ。ぺこりとお辞儀してレナの手を引いて出て行こうとする。イズもレナと奥さんの笑顔に怯えつつその後に続いた。
「！？　どこへ行く、嫁！！」
村長の叫びを背に、三人はドアを閉めた。その瞬間に『馬鹿言ってんじゃないわよアンタ！』どか！　（鈍器のようだ）『あんな美人がうちの不細工の嫁になんて来るもんですか！』ぼこ！　（おそらく音からして拳に変えた）『恥ずかしいったらないわよ！』ばき！　（かなりイイところにヒットしたらしい）『鼻の下伸ばしてみ

っともない！』がし！　（再び鈍器か）『ちょっと若い子見たらすぐデレデレして！』ずごしゃああ！　（なにやら大技が決まった模様）『……た、助けてくれぇ……』等、いろいろ想像させる物音と声がした。

最後の声はなんだか弱々しかったが、イズとレナは聞こえなかった振りをする。

一章・いろいろと困る人たち・４（後書き）

村長の奥さん、ぱわふりゃあ。

一章・いろいろと困る人たち・5

「……ここの村長さん変わってるね……奥さんも」
しみじみとセーナが呟く。まじめに魔物退治に来たというのに、気力が抜けそうだ。
「とりあえず、村の外れにいるご夫婦に話を聞きに行こうよ」
再び村長宅に入る気はない。ほかの場所で話を聞くほうがまだ生産的行動だろう。
村長が死なないように祈りつつ、三人は教えられた家に向かった。
村中の人間があんなノリだったらどうしようという恐れはあったが、ノックした扉を開けて出迎えたのはごく普通の男の人に見えた。
自分たちは依頼を受けて来た者で、村長宅でここの事を聞いてきたと言うと、男性は安心し、中へ入れてくれた。室内はなんだかほこりっぽい。
「すいません、妻は寝込んでしまっていて……今お茶を」
奥さんが寝込んでしまっているので室内が荒れているらしい。子供をさらわれたのなら無理もないことだ。男性もかなりやつれている。
「あ、いえ、お気遣いなく。お話を訊きに来ただけですから……ご心痛でしょうがまずお話を聞かせていただけますか。少しでも早く解決したいので」
セーナが真剣に訴えると、男性は頷いて三人の前に座った。
「うちの娘がさらわれて、もう五日になります……たまたま目撃していた人がいて、それで魔物にさらわれたのだと分かりました……おそらくもう娘は……」
中年を過ぎ、老年にさしかかっている男性だ。おそらく遅くに授かった子供だったのだろう。待ち望んでやっとできた子供が魔物に奪われるなどこれ以上ないほどの悲劇だ。
陳腐な慰めなど意味がない。何も言えずに男性が話を続けるのを

待つ。
「魔物はここからそう遠くない山の中の遺跡に住み着いたようです……今までも山の中で何度か目撃されていて……近付きさえしなければ大丈夫だろうと思っていたのですが……くっ、どうしてこんなことに……！　魔王が滅んで平和になったばかりなのに！！」
今にも泣き出しそうだ。辛くてたまらないと伝わってくる。
「……魔物の外観などは分かりますか？」
沈痛な表情で、それでもイズは訊く。これから魔物退治へと赴くのだ、情報は少しでも多く欲しい。
「……見ていた者の話では、ひどく醜かったそうです。娘を抱えて逃げ去ったとのことですから……かなり力は強いかと……大きさは人間の大人サイズだったと言っていました。実際わたしが見たわけではないので……聞いた話でしかありませんが」
人間の大人サイズで、力はかなり強く、ひどく醜い魔物。思い当たる魔物は多い。角があったとか鱗が生えていたとか、もう少し絞り込めるような話が聞きたい。
「その、目撃した方はどちらに？」
「それが、村の者ではないのです。たまたま滞在していた商人でして……もう村にはおりません」
魔物に関してはこれ以上の詳しい話は聞けそうにない。レナが口を開いた。
「娘さんの特徴などをお聞かせください。髪の色とか……すぐ見て分かるような特徴などございませんか？」
「特徴、ですか……髪の色は茶色です。そちらの男の方のような髪の色で、目は緑です。さらわれた日には青い服を着ていました」
そこまで言って、男性は言葉を詰まらせた。
「……ビオラ……！」
娘の名前だろう。やっとのことでそれだけを口にして、ぼたぼたと大粒の涙を落とす。話を続けるのは無理そうだ。
必ず助けるとは言えない。もう五日も経っている。娘が無事でい

る可能性は限りなく低い。帰ってくることを親がどれだけ望んでいても、だ。
「……魔物は僕たちが必ず退治します」
セーナが言う。悲しみが薄れることはないだろう。それでも、言うべきことだと思った。
「……お願いします……お願いします！」
泣きながら頭を下げる男性に、セーナは力強く頷いた。

一章・いろいろと困る人たち・５（後書き）

ページ数の換算間違えたので、本日は次の章もアップいたします…

…||||〇ガックリ

二章・どうしたらいいのか分からない・1

「わ・た・し・でしょ」
バルト村を出て、魔物が棲むという山に向かう最中で、セーナはレナフレアにまた注意されていた。ついつい『僕』と言ってしまうらしい。突っ込まれてセーナは苦い表情だ。
「それも可愛いと思うよ」
男の子のように振舞いたいのか、それとも男勝りなのか、どちらにしてもセーナなら可愛らしく、ほほえましいと思うイズは素直にそう言ったのだが、女性陣の反応は彼が思ったようなものではなかった。
何故かレナは笑い出しそうになり、セーナは憮然としている。むくれた顔もとても可愛らしいもので、イズはちょっと見惚れてしまい、それどころではないとあわてた。
「俺、変なことでも言っただろうか？」
何か気に障ることを口にしたのかと焦るイズに、
「いえ、別に」
なにやらとても不機嫌にセーナが言ってくる。やはりなにか気に障ることを言ったらしい。凄腕の剣士としては女の子扱いされるのが嫌なのだろうか。これほどの美少女なのにもったいないことだと思う。
イズはこそこそとレナに話しかけた。
「何か変なこと言ったかな？」
「おほほほ、そうね、言ったかもね」
レナはとても楽しそうに笑っている。イズは頭を抱えたくなった。彼女は自分の味方ではないと痛感する。むしろ、最強の敵だ。彼女の頑強な防御をかいくぐり、やり過ごさないとセーナとの距離を縮めるのは不可能だろう。
背後を歩くレナとイズの会話は、前を歩くセーナに聞こえないよ

うに小声で交わされたものだったが、全体的に感覚の鋭いセーナには丸聞こえだった。
イズは心底困っていて、レナは心底楽しんでいる。セーナこそ頭を抱えたい気分だった。
可愛らしい女の子と言われたことは何度かあった。こんな顔をしているのだから仕方ないとある程度は覚悟もしていた。
が、まんま可愛い女の子と言われるのはさすがに困った。どうしたらいいのか分からなくなる。不快と言うのは言い方がきつくて相手が可哀想にも思えるし、
「……あまり女の子扱いしないでもらえますか」
振り返らずにとりあえずそう言った。他にどう言えばいいのか分からない。
「え、あ、分かった！　ごめん！」
イズは理由が分かって安心したのかホッとしたように謝ってきた。謝られてもまた困る。
イズが悪いことを言ったわけではない。それはセーナにもよく分かっている。彼は何の悪意も無く、褒めてくれただけだろう。セーナの気を重くしているのがその褒め言葉だとは考え付きもしておらず、また、思いつくことも無いという予想はつく。
なおさら気が重くなるセーナである。
早くなんとかしたい。イズには悪いがプロポーズも迫られるのも心底ごめんだ。
いい人というのはよく分かっているし、外見も美男ではないが悪くはない。
でも、ごめんだ。
「あ、セーナちゃん。そろそろ山に入るから俺が前を歩くよ。君はレナフレアさんと後ろを頼む」
「え」
不思議そうにセーナはイズへ振り返る。
「俺は君たちの盾になるために来たんだ、前を歩くのは当然だろう

？」
悪意なく言って、イズはセーナの前に出た。大剣を背負った広い背中が力強く歩いていく。たくましく、頼りがいのありそうな背中だ。普通の少女なら自分をかばうその背を眺めているだけで意識してしまうかもしれない。
「……いい人なんだよね」
「……いい人ね」
「いい人なんだけどなぁ……」
なにやら遠い目になるセーナに、レナは苦笑した。何もかも承知している身としては苦笑するしかない。
「ま、親切で言ってくれているのだし、今は甘えておきなさい。これも『女の武器』のひとつよ」
「……教えてもらっても全然嬉しくないよ、レナ……」
セーナがイズを意識している様子はちっともなかった。前を歩くイズに仕方なくついていく。レナは慰めるように少女の肩を優しく叩いた。
しばらくそうして歩き、山の中に入った。かなり深い森になっている。魔物が住み着いたという遺跡は、武器の心得のない村人が知っているくらい山の下腹部、すぐ近くにあるらしい。迷うことはないくらい近いと聞いていた。
山菜や木の実を取りに来た村人が目撃するくらいだ、相当近くにあるのだろう。
油断なく、いつでも武器を抜けるように体勢を整えながら三人は進んでいく。
注意深く見てみると、何かが通ったような跡が地面に残されている。人間大の何かの足跡や、何かを引きずったような跡だ。獲物を捕らえて引きずった跡ではないかと予想はできる。日にちが経っているようでそれ以上細かくは分からないが、どちらの方角に向かったかくらいは判別できた。
「これを追って行こう」

セーナの判断に、反論するものはいなかった。慎重に跡を追い、少しずつ進んでいく。幸い、途中で跡が消えていることもなく、追跡はかなり容易だった。

「……結構な数がいるわね」

進むごとに足跡が増えている。住処に近付いている証拠だ。最初は四、五匹程度かと思われた数が、近付くにつれて十は越えているのではないかと思われるくらいになった。

魔物の種類によっては三人では苦戦するかもしれない――イズはそう思っていた。

もし危険なようなら、自分が盾になって何が何でも彼女たちは逃がそう。そんな悲壮な覚悟まで心に決めている。

緊張を背負うイズの背を見て、レナは横のセーナをつついた。小声で囁きかける。先ほどセーナが前にいたときイズと交わした会話は前を行くセーナに丸聞こえだったと分かっているが、今前を行くイズに彼女たちの会話は聞き取れないだろうと確信している。

イズとセーナではそれだけ感覚の差があるのだ。年若いセーナのほうが遥かにイズより鋭いとレナは知っている。

「あのひと、異常に緊張しているように見えるのだけれど、あたしの気のせいかしら？」

「ううん、ぼ……私にもそう見えるよ」

「まさか実戦初めてじゃないわよね」

「それは無いと思う。背中の大剣なかなか使い込んであるから」

「じゃあどうしてあれだけ緊張しているのかしら……？」

「うーん……魔物の数が多そうだからビックリしているのかな？」

前に立つ男の心意気を、後ろの彼女たちは全く理解していなかった。レナフレアのほうは勇者と共に魔王と戦った女性である。そこらの魔物が多少の数で攻めてきたとて彼女が怯えるわけがない。

セーナのほうも魔物の数が多いからと困った様子はなかった。自分の腕前にかなりの自信があるのだろう。そこらあたりがイズとは違う。彼女にはレナやイズを護って生き抜く自信があるのだ。三人

で生きて帰る自信がある。
悲壮な覚悟など彼女には無縁なもの。だからイズが何に緊張しているかが分からない。
「イズさん、魔物の数が心配なら僕が前に出ますよ」
「セーナ、わ・た・し」
にこやかにレナに突っ込まれ、セーナは複雑な表情で言い直した。
「……前歩きますよ」
「いや！　そんなことはさせられない！！」
華奢な少女に、何が出てくるか分からない森の中で前を歩かせるなど恐ろしくてさせられない。なにより少女の後ろにでかい図体の男が隠れるようでプライドが許さない。
「えーと、でも、ぼ……私、慣れてますから大丈夫です」

二章・どうしたらいいのか分からない・1（後書き）

気負うイズ。分からないセーナ（笑）

二章・どうしたらいいのか分からない・2

むしろ前を行かせて欲しいとセーナは思う。イズのあの緊張の強さでは魔物に遭遇する前に疲れきってしまいそうに感じたからだ。
いざというときに役に立たないのでは、盾になると言ってついてきたイズだって嫌だろう。
「いや！　このまま俺が行く！　心配しなくていいよ！」
イズは頑として聞き入れなかった。
「……ならもう少し肩の力抜いてくれる？　見ていてとても不安になるの。そんなに緊張していたら、いざ戦闘のときにぐったりしてしまうわよ」
「う、いや、大丈夫！　俺は頑丈だから！」
レナの突っ込みにちょっとぐらついたようだが、聞かない。
「……頑固ね。ねぇセーナ、頭の固い男は嫌よねぇ？」
にこやかに話を振るレナは、イズに見えないところでセーナに頷きなさいとジェスチャーで指示している。
「え？　う、うん」
よく分からないがとりあえず頷くセーナである。前を行くイズの頭がぐらついた。
「くっ……い、いや！　俺は君たちを護るためにいるんだ！ゆずれない！」
「じゃあいいです」
あっさりそう言って、セーナは前に出た。イズに並んで歩き出す。
「せ、セーナちゃん？」
「僕、勝手にこの辺を進みますからイズさんもご自由に」
背後でレナが笑い出した。こういう風に出られてはイズも文句は言えまい。
だいたい、セーナは人の背中に護られるような性格ではないのだ。誰かを護るために人より前を往く、そんな少女なのだから。

セーナが横に来たため、あわてるあまりイズの体からは変な緊張が解けている。これならまぁ安心だろうとレナは苦笑した。
「セーナ、また『僕』になっていたわよ」
苦笑そのままに注意する。
「あう」
しまったと言いたげな呻きが聞こえた。セーナはいつも通りで、変に緊張していない。その様子に、レナはとても安心した。セーナが前を歩いていてくれる、その事実だけでとても安心できる。前を歩くその背中は華奢だが、何よりも誰よりも頼りになることをレナは知っていた。
「いや、セーナちゃん、危ないから後ろに」
食い下がるイズに、セーナはシィッと鋭く黙るように指示する。彼女の鋭い感覚には何かがいる場所に近付いていることが感じられた。
魔物がいるという遺跡が近いのかもしれない。
「近いのね。数は分かる？」
察したレナが訊いてくる。イズは目を丸くしていた。彼には何が起きているのか分からないのだ。
「まだそこまでは。でも二、三ではないのは分かる」
正確な数はまだ遠いので把握できない。けれど少なくないのは感じられる。なるべく物音を立てないように気をつけて先を急ぎ、ある程度近付いたところで一旦足を止め、セーナは呪文を唱えた。
「賢しき眼（まなこ）、賢しき耳（さか）、見られることなく聞かせることなく我が一部と成れ」
偵察用の先見の魔法である。ある程度の魔法の知識がないとできないもので、もちろん初級の魔法ではない。イズにはそれすら分からなかったが。
セーナが作り出した透明な球『魔法の眼』は、彼女の意思に従って音もなく空を飛び、先の情報を彼女に伝えてくる。
茂る木々を抜けた先、古ぼけて半ば山の地表に埋もれている建物

がある。これが村人の言っていた遺跡だろうか。入り口には木製の扉がつけられているが、壁はどう見ても石材で材質が違う。出来もあまり良くなく、遺跡に住む際に急ごしらえで造ったもののようだ。扉の前には見張りなのだろう影がふたつ立っている。

棲み付いたという魔物か。何という魔物か判別するために特徴を見ようとして、セーナは眉をひそめた。

「……えーと……？」

なんというか、これは。

大人の人間サイズ。確かにそうだ。

ひどく醜い。ひどくというのはちょっと可哀想だが、並んでいる二つの影はあまり顔のいいほうではない。

立っているものは魔法には全く気付かずに何か話し合っていた。話している内容もちゃんと彼女には聞こえている。

「どうしたの？」

遺跡前の光景が見えているのはセーナだけなので、彼女の表情で判断するしかないレナとイズである。

「うーん……ま、魔物？？」

困ったように呟きながら、詳細を確かめるためにセーナは『魔法の眼』をなんとか遺跡の中に送り込めないかと試みる。上級の魔導師なら物体をも通り抜けるように作り出せるのだが、セーナにはまだそこまでの技術はない。どこか隙間を見つけなければ送り込むことは出来ないのだ。

かしいでいるような急作りの扉とはいえ、さすがに隙間はあまりないように作られている。周りをめぐらせて窓か隙間がないかと探ってみたが、半ば地面に埋もれているような遺跡だ。埋まっていない場所に時折窓のようなものも見受けられたが、どこも閉まっていた。あきらめて魔法の維持を打ち切る。

「なんか、魔物が棲んでいるって言う印象ではないよ」

偵察してみて、セーナが出した結論は、あの遺跡にいるものは魔物ではない。

「どういうこと？」
「いるのは人だよ。見張りに立っている二人はどう見ても人間だし……人間が遺跡を改造して住み着いているっていう感じを受けた」
彼女が『目撃』したのは人相の悪い人間の男が二人。確かに『人間の大人サイズ』で『ひどく醜い（人相が悪い）』という事前に聞いた情報と似てはいる。
根本的に魔物と人間という差はあるが。人間によく似た魔物ではないことは話していた言葉と内容から判別できた。
「……場所間違えたかな？」
自信がなさそうにセーナは言う。山の中にある遺跡。迷うことはないくらい近くという話だが、どこかで間違えたのだろうか。三人ともこのあたりの地形には詳しくないので迷った可能性がないとも言えない。しかしこんな遺跡がそうごろごろしているとも思えなかった。
「なんだか山賊とか盗賊とかそういう感じだった。見た目の印象でしかないから本当にそうとは限らないけれど……」
「……でも魔物ではないのよね……」
「他にも遺跡があるんだろうか？」
「うーん……とにかく行ってみよう。他に遺跡があるならあの人たちが知っているかもしれないし、もし山賊なんかだったら放っておくわけにはいかない」
この山は人が住む村に近い。万が一にも村の人が襲われたら大変だ。依頼されたことではないけれど、お人好しのセーナに見過ごすことはできない。
「ほかにいい方法があればそっちを優先するけど、なにかある？」
セーナに訊かれ、真っ先に考えることが苦手なイズは首を振った。レナは少し考えて一番手っ取り早そうなのでそれでいいと答えた。
「じゃあ、行こう」

二章・どうしたらいいのか分からない・２（後書き）

今回はあまり動きはないです。面白い文章書きたいなぁ。

二章・どうしたらいいのか分からない・3

いつの間にかセーナに率いられている。先頭も彼女だ。イズは彼女のすぐ後ろをついていこうとして、我に返った。

「ちょ、ちょっとセーナちゃん？」

「何をしているの？　早く行くわよ」

危うくレナにまで追い越されそうになり、あわててイズは足を速めた。気を抜くとすぐにセーナに率いられてしまうのは何故なのだろう？

そしてそれがとても自然に感じられるのは一体どうしてなのだろう？

男としてそれは情けない。イズは一念発起して急いでセーナの前に出た。

「あれ、イズさん？」

「……オトコのイジってやつかしらねぇ……意味がないのに」

レナはくだらないわねと言いながらも楽しそうに笑っている。彼一人で突っ込みそうな勢いだ。仕方なくセーナが彼の後ろについていく。彼女の本意ではないのは後ろから見ていても分かるほどだ。

「いつ気付くかしらね」

レナは一人呟いた。イズは人を率いるほどの人間ではない。輪を繋ぐことは出来るだろうが、人を引き付けることと繋ぐことは別のことだ。

引き付けることが出来る魅力的な人間など、わずかしかいない。

そう、世界の希望となった勇者セーズのような人間はごくわずかにしかいない。

レナは苦笑した。勇者セーズ。世界を救い、突然姿を消した彼。

――今はどこにもいない彼。

「……言えないわよね」

世界中に秘密にしている事柄。誰にも話せない。

秘密を抱えたまま、世界を救った英雄の一人は足を速めた。歩くセーナに追いついて隣を行く。
「そろそろですよ、イズさん」
「分かった」
視界に森の切れ間が入る。あそこに遺跡があるのだろう。まだ武器は抜かない。相手が盗賊の類と決まったわけではないからだ。
油断なく、いつでも武器を抜けるようにしておきながら、木々の間を抜けた。開けた視界に山肌とそこに埋もれるような遺跡と、立っている二人の人間の姿。
「……人間ね」
「でしょ？」
セーナが言ったとおり、見張りらしき二人は人間だ。ただ、どう見ても真人間とは思えない。大半の人がイメージするだろう『盗賊』とか『山賊』そのもののような格好をしている。
「……まんまだな」
らしすぎる、とイズ。
「……格好から判断するのは早いと思うけど、でもそのもののような気がしてきた」
セーナは複雑な表情だ。どう見ても普通の村人には見えない見張りらしい連中は、いきなり出てきた三人に驚いたようだ。あわてて武器を構え、こちらに向けてくる。
「なんだてめえら！」
「冒険者です。ふもとの村で魔物退治を依頼されたので、魔物が棲むという遺跡を探しているんですが、あなたたちはここで何を？」
さらりと述べたセーナに、見張り二人は目を見張った。
「なんだぁ？　冒険者？　こんな美人が？　はっ、世間を舐めきってるぜ」
「いいねぇ、にーちゃん両手に華かぁ？　おれたちにもわけてくれよ」
こちらを舐めきっている言葉である。さらに、下品だ。どうみて

もイズと女性たちをいかがわしい目で見ている。
「殲滅決定」
レナはにこやかに言い放った。イズとどうにかなる仲などと思われるのは心外極まりない。　人間くらいなら撲殺するには最適だろう杖を構える。
背後でかなりシャレにならない気配を発しているので、ごまかすようにセーナは苦笑しながら声を出す。
「この山にここのほかに遺跡はないんですか？」
美人に話しかけられて、男たちは鼻の下を伸ばして嬉々として答えてくれる。
「ねぇな。魔物なんかいねぇよ。いるのは俺たちだけだぜ、ねーちゃん」
ねーちゃん呼ばわりされたのはセーナにもとても心外だが、彼女はこらえて続けた。魔物が生息していないのなら、さらわれたという娘はどこへ行ったのか。彼女の安否を確かめる必要がある。
「村で娘さんがひとり魔物にさらわれたという話なんですが、何かご存知ありませんか？」
「娘ぇ？　さらわれた？　知らねぇな」
そっけなく言う様子は、本当に知らないし興味もないという感じだった。嘘をついているようにはちょっと見えない。
「ビオラさんという名前なんですけど」
「ビオラぁ？　そりゃアネサンの名前じゃねえか」
「え、ご存知なんですか」
「ご存知も何も、うちの兄貴のとこの嫁さんだよ」
「「「はい？」」」
口を揃えて訊き返す三人である。ビオラという娘は確か魔物にさらわれたという話ではなかったか。魔物が抱えて逃げていったと村の人間からは聞いている。
「お、お嫁さん？　結婚しているんですか？？」
「……あんたたち無理やりさらっていったのか？」

イズが訊くと、男たちはなにやら乾いた笑みを浮かべた。
「ははは、無理矢理？　ははははは、無理矢理……」
「何が無理矢理なんだか……へへへへ」
見張りは二人揃ってなんでか虚ろだ。訊いてはいけないようなことだったらしい。
「ええと……こちらにいらっしゃるんですか？」
「いるいる……兄貴と『らぶらぶ』だからな」
どこか違う世界を見ているように視線を泳がせている見張り二人である。現実逃避しているようにも見えて、一体何が起きているのか訊くのが怖くなってくるような様子だ。
しかし、魔物にさらわれたという娘が何故にここで兄貴とやらと結婚しているのか。
そもそも山の中で何度か目撃されている魔物はどこにいるのだろう。
何か話が食い違ってきている。セーナは眉をひそめ、とりあえずここにいるというビオラという娘が、村からさらわれた人なのかどうかを確認しようと思った。
「会わせていただけませんか？　村からさらわれた方かどうか確認したいんです。親御さんがとても心配していたので」
「……会う？　会うか。まぁ……かまわんぜ」
「でもな、ねーちゃん、覚悟しておいたほうがいいぜ。これはおれからのせめてもの忠告だ……」
ナニをどう覚悟しろというのだろう。セーナは首をかしげ、レナはなにか寒気を感じ、イズは何も分からず眉を寄せている。見張りの片方が遺跡の中に入っていった。アネサンことビオラを呼びに行ったのだろう。
残ったもう片方は、何故かレナを見て拝み始めた。さすがに身を退くレナである。
「な、なに？」
「ねーちゃん、聖導師サマだろう？　聖天（せいてん）の王をあがめてる偉い人

なんだよな？　せめておがませてくれ……」
「拝むなら聖天の王様を拝んでちょうだい。あたしを拝んでもご利益はないわよ」
「それでも！　おがむなら美人のねーちゃんがいい……っ！」
力一杯力んで今にも泣きそうな見張りに、三人は顔を見合わせた。予想していた展開とは大分違うことになってきているのは気のせいではあるまい。そもそも魔物がいるという話ではなかったのか。
疑問に思っていると、どこからか音が聞こえてきた。腹に響くような重低音だ。一定のリズムでこちらに近付いてくる。
「……足音？」
いぶかしげにイズが呟く。人間の足音にしては重量すぎる。何かとんでもないものが出てくるのではないかと警戒して見張りに目をやると……見張りは死んだ魚のような目をしていた。

どんより。

一体何が来るんだと、一気に怖くなったイズである。思わず背の武器に手をやった。いつでも抜けるようにしておく。
どしん。ずしん。音が近付いてきて、開けっ放しの扉から『それ』は現れた。

二章・どうしたらいいのか分からない・３（後書き）

何が出るのか。いえ、アホ話なのであんまりまっとうな期待されるとガッカリさせてしまう可能性が高いです、ええ。

二章・どうしたらいいのか分からない・４

――時間が凍る瞬間というのは確かにあるのだ、と、そこにいた誰もが感じただろう。

少なくとも、イズは何の反応も出来なかった。

セーナは身軽に動き、レナを背にかばい双剣を抜いており、レナは凍りついたようにセーナの背にすがりついた。

「ナニ、アレ！？　なに、アレ！！　何、あれぇ！？」

悲鳴のように繰り返すレナを、見張りの男が沈痛に眺めている。心から共感している表情だった。

無理もない、と。

「うるさい女ねぇ」

けだるげに口を開いたのは、オーガとゴブリンを足して三を掛けてさらにふやかして体積を増やしたような容姿の、多分声からして女性。髪や目の色、着ている服などは聞いてきた特徴と一致する。そして、その『女性』を腕に抱いて得意げに立っているのが、トロルとサイクロプスとをぐちゃぐちゃに混ぜて隠し味にコボルトを足したような、多分男性。

「なんなのよ一体。アタシに何の用なの？　迷惑よねぇ、だーりん♪」

「せっかく二人の時間を過ごしていたのになぁ、はにー♪」

種族的にも人間かどうかすら怪しい二人が、べたべた、いちゃいちゃ、とろとろ、ぎゅうううっと抱き合っているのは、視覚に大ダメージな光景だった。

レナはセーナにしがみつくのがやっとで、イズは声にならない声を上げて身体をかきむしっている。見張り二人は即死効果アリの光景からは目を逸らしていた。

「仲いいんですね。あなたがビオラさんでしょうか？」

人間とみなしたのか、セーナは剣を納め、けろりと話しかけた。

それだけでその場の一同（人外の生物以外）彼女を尊敬できると痛感する。
「そうよ、アタシがビオラだけど、あんた何？」
「冒険者です。バルト村の方ですか？」
「そうよ。それが？」
「えっと、ぼ……私たちはバルト村の人に魔物退治を頼まれたんですが、ご両親があなたがさらわれたととても心配していらしたんです。でも、魔物にさらわれたんじゃなかったんですね？」
　というか、この容姿ではビオラ自身が魔物と思われても仕方がないような気がする。レナとイズは同時にそう思った。
「違うわよ、アタシはだーりん♪と運命的に出会ってここで結ばれたの」
「はにー♪」
「だーりん♪」
　以下、エンドレス。お互いしか目に入っていないらしい二人は、延々と繰り返していちゃつき始めた。それはもう、未成年お断りな展開になりそうな勢いで。
「うおおおおっ！　セーナちゃん！　見ちゃダメだ！！」
「いやぁあああっ！　セーナ！　こっち来て！」
　瞬間的に全身鳥肌まみれになったレナとイズがあわててセーナを引き寄せる。中に入ってしてください！！　と見張りの二人が悲鳴を上げていた。もはや視覚汚染物体と言える存在のさらに『邪悪な』行動を純真なセーナに見せるわけにいかない。その場にいる全員で視覚（以下略）から目を逸らす。視覚（略）はいちゃこきながら遺跡の中に戻っていった。安堵のあまり全員で肩を落とす。
「……だから言っただろ？　覚悟しておけよってサ……」
「おれが美人のねーちゃんをおがみたい気持ち……分かってくれるだろ？」
　見張り二人はすっかり憔悴（しょうすい）している。アレにつき合わされるのが嫌で外の見張りを買って出ていたらしい。その行動は正解だ。アレ

に付き合ったら十分もしないうちに脳が破壊されそうな気がする。
　五分耐えられたら勇者と称えられてもおかしくない。
「ふもとの村にさ……とんでもない（ピー）がいるって噂で聞いてさ……うちの兄貴より不細工らしいって言うんで笑ってやろうかって見に行ったんだよ……」
「そしたらよ……兄貴もついてきちゃってよ……何が悪いってその（ピー）に兄貴が一目惚れしちまって……その（ピー）も兄貴に一目惚れでそのまま駆け落ちって……それでこんなことに……うううう」
　自分たちの好奇心を心底から後悔しているようだった。
　どうやら、ビオラは魔物にさらわれたのではなく、兄貴とやらに自分からついていったようだ。兄貴の容姿がアレなため、目撃した人が魔物と間違えたらしい。
　ビオラの容姿は村の外で噂になるほど有名だったので、彼女は魔物と間違えられなかったのだろう。村長がいまいち娘のことに乗り気でなかったのもビオラの容姿が関係していそうだ。
「……でもなんで親御さんに何も言わないで出て行っちゃったんだろう？　普通に結婚しますって言えば親御さんも心配させなくて済んだのに」
　アレでも娘は娘、寝込むほど心配していた両親の姿を思い返して不思議そうなセーナに、ほほえましいと言いたげに見張りはほんやり笑った。アレに比べればセーナは天使、いや聖天の王のように清らかで美しい。
「いや、そりゃおれたち山賊だったから」
「あ、やっぱり山賊かお前ら」
「まぁな」
　冒険者と山賊。本来ならば争い、捕まえなければならない相手だが、ある意味での苦境を乗り越えた仲間としてすでに連帯感が出来てしまっている。
「人さらって売ったり、荷物奪ったりいろいろやったけどさぁ……山賊と村娘ってだけでどっかの姫様と王子様みたいな気分でかけお

ちされてさ……おれ、足洗いたいんだ……真人間になろうって心底思ってるんだよ……」
「おれもだ……仲間はどんどん減っていくし、兄貴はああだし……頼む、おれたちを捕まえてくれないか？　兄貴とアネサンはあのままでいいから……頼むっ！！」
　アレと行動を共にするよりは衛兵や自警団に突き出されたほうがずっといいらしい。気持ちは分からなくもない。むしろレナとイズは同情さえしている。
「今も山賊を続けているんですか？」
「いや、今は全く。なにせアレだろ？　仲間も、いまは十人程度だし」
　ほとんど足を洗ったと変わらない状態らしい。悪いことをする元気もないようだ。
「魔王も滅んだって言うしさ、平和になったんならここらで真面目になろうかなと」
　魔王さえ現れなければ、山賊などやらなかったと彼らは言った。世が荒れたせいで、山賊でもやらなければ生きていけなかったのだと。
「……とりあえず、ビオラさんの無事を知らせにふもとの村に戻りますけど、まともに働きたいのなら口利きくらいはしますよ。若い男手は貴重でしょうし、村の人もかえって喜ぶと思います」
　魔王との長い争いで若い男手は減っている。どこの村や町でも働き手は喉から手が出るほど欲しいだろう。バルト村でもそれは同じだ。
　あの村長の様子では、ビオラが戻ってくるより働き手が増えるほうが喜びそうだ。
「ありがとう、ありがとうねーちゃん！　あんたほんとに天使みたいだなぁ、アレを見ても平気な顔してるし……ある意味勇者だぜ」
　今にも彼女を拝みだしそうな勢いで、見張りの二人は感謝の意をあらわにする。

セーナは苦笑して――その笑みが固まった。彼女の視線は見張りの背後、遺跡の入り口のすぐ脇の森の茂みから今まさに出てきた人物に向けられている。
「？」
イズが視線を向けるより早く、その人物が声を上げた。
「セーズ！！」
茂みから出てきたのはセーナより年下に見える少年だ。金色の髪にハシバミ色の瞳の、結構な美少年で、彼はほかには目もくれずにセーナに駆け寄った。咄嗟に動けない彼女の両腕を掴んですがりつくように叫ぶ。
「探したんだ！　どうしていきなり姿を消した！？　ぼくたちと一緒にシンシアに戻って復興を手伝うって約束しただろう！？」
「あ、う、え、う」
しどろもどろに何か言おうとする彼女と、すがりつくような視線で彼女を見つめる少年。
一体何が起こっているのか、この少年は誰なのか。なにやら親しいようだが彼女とどういう仲なのか。混乱するイズの前をレナが横切って、少年の肩を叩く。
「落ち着きなさい、エリオス。大体アナタどうしてここにいるの？」
エリオスと呼ばれた少年は、それでもセーナから手は離さず、視線だけをレナに向けた。
「！　レナ！？　なんでセーズと一緒にいる！？　もしかして……やっぱりセーズに手を出したのか！？　この変態ショタコン！」
「失礼なこと言わないでよ！　あたしとセーズは姉弟のようなものだっていつも言っているでしょう！？　それより何故こんなところにいるのか答えなさい！」
「セーズを探していたからに決まっているだろう！！」
「だからどうして都合良くここにいるのよ！？」
「ふもとの村で人攫いの話を聞いたんだ！　セーズならお人好しだからこういう話には絶対首を突っ込むと思って来てみたら本当にい

た！」
勢い良く口論を始めたエリオスとレナに、イズはようやく我に返った。どこかで聞いた名前だと思ったら、このエリオスという少年は魔王を倒した英雄の一人、勇者の仲間だった人物だ。レナと親しげなのはかつての仲間だからで、その仲間はセーナの腕をいまだに掴んだままだ。そして、彼は少女のことを『セーズ』と呼んだ。
それは魔王を倒した少年勇者の名だ。
勇者の仲間だった少年が、すがるように腕を掴んでいるのは、イズがプロポーズした少女で、彼女はどう見ても女の子で、でも勇者セーズは男のはずだ。
「え、ええと、セーナちゃん？これはどういうことデスカ？」
「？　セーナ？」
そこで初めてエリオスがセーナの全身を視界に入れた。顔から下へ行くにしたがって、徐々に少年の表情が強張っていき、見られているセーナの表情もひきつる笑顔にかわっていく。
「な、なんで胸があるんだセーズ！？」
「気付くのが遅いわよ、エリオス」
レナがため息をついて少年の腕を少女からはがす。
「この子はセレスティータ。愛称セーナで、セーズじゃないの」
「！？　そんなわけ無いだろ！　顔がまるきり一緒じゃないか！眼の色も髪の色も何もかもセーズそのものだ！」
セーナは勇者セーズにそっくりらしい。
「セーズに胸は無いでしょう」
違うのは性別だけのようだ。
「う」
呻きながらもまだ納得がいかないエリオスはじろじろとセーナを見つめる。
「いや、おかしい。武器までセーズと一緒だ。ジルゼから授かった『星砕く刃』……魔王を倒したあの剣と同じものがあるわけがない」
少女の腰にある双剣。使い込まれたその武器は、確かに他にはな

いような力を感じさせるものだ。さぞかし名のある名工が造ったものなのだろうと思っていたイズは、心底から驚いた。
「え！　そうなのかセーナちゃん！？」
「えと、あの」
おろおろ。セーナはどうしていいのか分からないらしい。
「あー、ばれちゃ仕方ないわね……」
「れ、レナ！？」
泣きそうな顔になるセーナの肩をぽんぽん叩いて、レナは言い切った。
「この子はセーズの双子の妹よ」
爆弾発言。

どかん。

……レナ以外の全員が沈黙した。
「生き別れた妹さんなの。だからそっくりなのよ。あたしも最初は驚いたわ、行方不明のセーズとうりふたつなのですもの。驚かないわけがないでしょう？」
一息ついて、レナは続ける。
「彼女がセーズの妹だと知れたらいろいろ大変なことになるから、なるべく知らせないようにしていたのよ。セーズ本人を捜し当てるまではあまり騒ぎにしたくないの」
沈痛に言う彼女にイズは頷いた。
「なるほど！　それなら納得がいく！」
「いくか！！　あんた馬鹿だろう！？」
即座にエリオスが突っ込む。
「生き別れの妹がどうしてセーズと同じ武器を持っているんだ！？
あれはジルゼがセーズに与えて、この世界にひとつしかない物なんだぞ！！」
レナは顔色も変えずに言い切る。

「セーズが消えた晩にあたしが持ってきたのよ。今は彼女に貸しているの。幸い彼女も双剣使いだったから……あたしがただ持っているより妹さんが使ってくれるほうがセーズだって嬉しいと思って」
「なるほど……！　それも納得がいく！」
「あんたちょっと黙ってろ」
　このわずかなやり取りの間に、イズが役に立たないとみなしたエリオスは、冷たく言ってイズを黙らせ、セーナを見つめた。彼女のオッドアイを、まっすぐにひたすらに見つめ――ようとして、レナが間に入ってしまい邪魔される。
「邪魔だ、レナ。どけ」
「だめ。アナタ今、目が怖いからセーナが怯えてしまうわ。可哀想でしょう」
「どけ」
「だめ」
　エリオスは怒りをにじませ、レナはにこやかだが怖い例の笑顔だ。さすが魔王を倒した英雄と言おうか、その迫力はかなりのもので、この間に入るには命を失う覚悟が必要なのではないかと思われるほどだ。
　割って入るくらいなら魔物の群れに突っ込んだほうがマシかもしれない。イズはそう思った。とてもではないが彼に止められる雰囲気ではない。見張りの二人はすくんでしまって役には立たないと一目で分かる。こんな中にか弱い少女のセーナを送り込むわけにはいかない、自分が止めなければとイズは思うのだが、足が動いてくれないし、声も出なかった。
　はぁ、とため息が聞こえ、何気なくセーナが動いたのはその瞬間だ。
「話は後。今はとにかく娘さんの無事を親御さんに教えに行くほうが先！返事は！？」
　険悪な雰囲気を一瞬で塗り替えてしまう声だった。
「「「「「はい！」」」」」

全員揃って返事を返してしまう。レナやエリオスだけでなく、見張りのふたりまでもが背筋を伸ばして返事をした。

「じゃ、行こうね」

にこやかに天使のような笑顔で促され、誰も反対できなかった。

二章・どうしたらいいのか分からない・４（後書き）

えーっと、娘さんとのらぶらぶはともかく（オイ）勇者の仲間の美少年登場ー。波乱の予感。

二章・どうしたらいいのか分からない・5

見張りの二人と、遺跡内で死に掛けていた（いちゃつきを間近で目撃してしまったらしい）ほかの部下の人たちを連れ、いまだ納得していない様子のエリオスもついてきて、十人以上に増えた一行がバルト村に帰りついたのは夜半になってからだった。小さな村のため、宿屋などは当然ない。こういう場合は一番大きい家である村長宅に泊めてもらうのが一般的だが、あの村長宅にもう一度顔を出すのはかなりの覚悟がいる。

仕方ないのでとりあえず娘をさらわれた村人宅に報告だけでもとドアを叩いた。

やはり顔を出したのは父親の男性のみ。母親はふせったままらしい。

「あなたがたは……もう戻られたのですか？」

「夜分遅くすみません。一刻も早くご報告したほうが良いと思いまして」

あれだけ心配していたのだ。娘の無事を早く告げたい。

「娘さん……ビオラさんはご無事でしたよ」

「！　本当ですか！？」

目を丸くする父親。娘はとうに死んだものとあきらめていたのだろう。

「ええ。こちらの方が事情を良くご存知なので、聞いていただけますか」

セーナは見張りの二人を示す。二人は父親に苦笑しながらぺこりと頭を下げた。

これがあのアネサンの父親なのかと思っているのは間違いない。このどこを見ても普通の男性から、どうしたらあの娘が生まれるのか。セーナ達が見たことのない、ふせっているという母親に似たのだろうか。

精神的に死に掛けている部下の人たちを一旦外で休ませて、一行は家の中に通され一息ついた。その間に見張り二人から兄貴とアネサンのなれそめ話を聞いた父親は、血相を変えて隣室に駆け込んでいく。

「エレータ！　ビオラは無事だよ！　そのうえお婿さんまでもらって山の遺跡で幸せに暮らしているそうだ！」

とても嬉しそうにそう言って、ふせっているらしい母親に報告している声が聞こえてくる。

「あなた……本当？　本当なの？　ビオラが……あの子にお婿さんなんて……そんなわけがないわ……わたしを喜ばせようとしてくれているのは嬉しいけど……」

弱々しい声。これが奥さん、ビオラの母親なのだろう。

「嘘なんてついていないよ！　起きられるかい？　この話をしてくれたのはビオラのお婿さんの部下だった人だよ。今そこに来てくれているんだ！」

「本当？」

などとやり取りが聞こえ、しばらくして隣室から男性に抱き上げられて姿を見せたのは、はかなげな女性だった。吹けば飛びそうな印象だ。『ビオラの身内』という単語から連想される人物とは百八十度違う。

「……ビオラねえさんのお母さんですかい？」

目が点になっている見張り二人である。

「はい……ビオラは、あの子は本当に無事でいるんですか？」

外見だけでなく、声まで弱々しい女性だ。娘を産んだときに、生命力の全てを娘に奪われたのではないかと思われる。

見張りは父親にした説明を、もう一度母親にした。兄貴とビオラはお互いに一目惚れして、いまは山の遺跡内でイチャイチャ幸せにやっている、と。

「ああ……本当なんですね。良かった……あの子がさらわれてから心配で心配で……」

ぐす、と鼻をすすり上げる。目元には涙がにじんでいた。母親は嬉しそうに続けた。

「あの子がいつ魔物と一緒に暴れ始めるかとても心配だったんです……」

……室内に沈黙が満ちた。どう対処していいのか分からないセーナたちだ。確かにビオラの見た目からして魔物と間違えられる可能性はある。

現に彼女たちと対面したとき、セーナたちは思わず武器を構えてしまった。

そう言えば、依頼は娘の安否の確認ではなく魔物退治で、村長もこの両親も娘の命が危ういとは一言も言っていなかった。子供の命が助からないと思っていたのはセーナたちだけの判断だ。

「……分かります、分かりますよその気持ち！」

うんうんと共感しているのは見張りの二人だった。そこから母親と盛り上がり始める。ビオラが山の中ほどに巣を作っていたゴブリンと目を合わせただけで追い払った話とか、兄貴と二人で自分たちのベッドを作るために巨木を素手で殴り倒した話とか、クマと出会いがしらに殴り合い、一撃でクマを戦闘不能に追い込んで担いで帰ってきてくま鍋にした話とか。

「……すいません、人間の話デスカソレハ」

イズがおそるおそる訊くと、ビオラの両親は沈痛な表情で言った。

「わたしたちが訊きたいです。何の変哲もないわたしたちからどうしてあんなに元気な子が生まれたのか……妻は身体も丈夫でなく、わたしはこの通り武術なんてまるきりダメな男ですから」

納得がいっていないのは何より両親らしい。

「いや、『元気な子』で済ますような話じゃないだろう。いいのかそんな危険人物野放しにしておいて」

エリオスはいぶかしげだ。彼はビオラたちが遺跡に引っ込んでか

ら現れたので、あの精神破壊力抜群カップルを目撃してはいない。ある意味幸せなタイミングで現れた。
「あの子が幸せならそれでいいです」
母親は言い切り、父親は頷いた。
「お婿さんまで見つけたのならなおよろしい。あの子が幸せならわたしたちはそれでいいんです。魔王も倒れたことだし、山の中でも暮らしていけるでしょう」
相手が山賊とか、容姿の点では娘と変わりないとか、そういうことも両親にとっては些細なことらしい。
「……ようは自然に帰す、と、そういうことか？」
「言い換えればそういうことになるかもしれませんが」
野生動物扱いである。魔物扱いとどっちが酷いだろう。不毛の荒野のような話になってきた。
「えーと、とにかく、あの山には魔物はそれほど生息していないようですから、あまり心配することもないと思います」
会話を穏便に終わらせようとレナがそう言う。もっとも、どれだけ凶悪な魔物が棲み付いていようとビオラと兄貴なら『ふたりのあいのちから』で難なく撃退してしまいそうだ。
「そうですか、安心しました。本当に……あの子がいつ第二の魔王になるかと思うと怖かったんですが」
「おほほほほほ」
母親の言葉にレナは乾いた笑い声を上げた。冗談で済ませたいという心境がありありと出ている。兄貴とビオラのカップル魔王と戦うくらいなら、再び魔王ディザスターと戦うほうがまだ気持ちが楽だ。
あのカップルと天秤にかけられる魔王も可哀想だろう。
「とりあえず、朝になったら村長さんに魔物はいないと報告します。さらわれた娘さんも無事でしたし、ありのままにお話しますんで……娘さんが無事で良かったですね」
レナの心境が分かるのか、苦笑しているセーナが場を納め、その

話は終わった。
まず何よりも、外で呻いている部下十人をなんとかしなくてはならない。依頼は単なる魔物退治だったはずなのに、ふたを開けてみれば路頭に迷った山賊の全うな職への橋渡しだ。
お人好しにも程があるが、セーナは嫌な顔ひとつしなかった。空いている小屋がいくつかあるという話を聞き、そこを借りて今夜は休み、翌朝村長に話すということでその日は落ち着いたのだった。
――山賊たちは、だが。
「ちょっと待て、セーズ、ぼくとちゃんと話をするんだ」
山賊たちを小屋に案内したあと、自分たちも休もうと別の小屋に行こうとしたセーナを落ち着いていないエリオスが詰め寄った。
「だから、この子はセーナだって言っているでしょう？　はっ！　まさかエリオス、アナタ……セーナと一緒に寝たいとか下心を抱いているのではないでしょうね！？」
小屋割りは当然、男女別である。割り振りを決めたのはレナだ。
「違う！！　話をしようと言ってたのが聞こえなかったのか！？」
エリオスは真っ赤になった。言うことは大人びているが、根っこは純情らしい。
「さっきしたでしょう」
「ぼくは納得していない！」
「何故よ？　筋の通った話でしょ」
「本人から聞いていないからだ。口の良く廻るレナばっかり喋っていたじゃないか」
「……失礼なところは全然変わっていないわね、アナタ」
睨み合う二人は今にも武器を抜きそうだ。怯えるイズである。英雄ふたりが争ったら、こんな小さな村など跡形もなく無くなるのではないか。
「夜中だよ、ふたりとも。村の人に迷惑だからやめておとなしく寝よう」
セーナはそう言って怯えもせずレナの腕を引いた。

「セーズ！　話を」
食い下がるエリオスは、セーナが眠そうにあくびを噛み殺すのを見て言葉を飲み込んだ。
「……疲れているのか？」
ぶっきらぼうにそう訊いて、彼女が頷くのを見るとあっさりと身を翻して小屋に入っていってしまった。
「？　あれ、おとなしく退いたな」
噛み付きそうな勢いだったのに、とイズは不思議そうだ。
「イズも休んだら？」
「おやすみなさい、イズさん」
「あ？　あぁ、おやすみ」
セーナの笑顔に押されるようにして、イズも小屋に入る。
扉が閉まるのを見送って、セーナはため息をついた。
話さなくてはならないだろうか。できればエリオスには話したくないことだった。
彼を巻き込むことはセーナの本意ではない。勇者セーズの可愛い弟分。素直でない寂しがりや。セーズがいきなり姿を消して、エリオスはとても心配したのだろう。必死で探してくれたのだろう。セーナを見て、やっと会えたと思ったに違いない。
どうしてセーズが姿を消したのか問い詰めたくて仕方ないに違いない。
なのに、セーナが疲れているのを見て、自分の感情を押し殺して休ませようとしてくれた。とても優しい少年だ。
家族、兄弟のようだったセーズの仲間たち。硬い信頼で結ばれた絆。
絆がほどけることは無いと思っていた。魔王を倒してもずっと続くと思っていた。
かけがえのない仲間たち。
「……何故なんだ、バーミリアス……」
呟く声には信じられないとの思いがある。どうしてもどうしても、

彼女には信じられない。どうしてこんなことが起こったのか、何度考えても納得できない。
「……寝ましょう？　ずっと歩き通しで疲れたわ」
レナが優しく背を押してくれた。納得がいかないのは彼女も同じだろう。セーズが消えた理由を知るのはセーナとレナフレアだけだ。理由を知るがゆえに、彼女たちはたった二人で旅をすることを決めた。
鍵を握るのはかつての仲間バーミリアス。優秀な魔導師である彼が、セーズが消えた理由の鍵を握っている。それはある意味とても危険で、特にエリオスのような少年には厳しい内容のものだ。
だからセーナはエリオスを巻き込みたくない。できれば遠く離れたところにいて欲しい。
勇者セーズが弟のように可愛がっていた少年だと知っているから。
セーナとレナは小屋に入った。敷かれたワラの上に装備を外して横になる。
目を閉じて、セーナは思った。
明日、エリオスになんて言おう。どう言えば彼は納得してくれるだろうか。
本当のことは言いたくない。愕然とするエリオスを見たくない。
知れば彼はひとりででもバーミリアスを追うだろう。あまり仲のよくなかった彼らだ、話し合いにもならずに戦いになる可能性のほうが大きい。ふたりの実力は拮抗している。
エリオスは魔法剣士だ。剣技も魔法も扱える。近距離ではエリオスが必ず勝つ。だが、魔法の腕ではバーミリアスのほうが上。
戦いになったら、どちらもただでは済まない。最悪どちらも命を失う可能性がある。
「……レナ、エリオスはついてこようとするだろうね……」
「間違いないわね。あの子のセーズ馬鹿は治ってないもの。戦力になるのも間違いないわよ？　でも……連れて行きたくないのよね？」
「……同じ思いをさせたくない」

明かりの消えた小屋内に、セーナの声は苦しげに響く。エリオスが二度と離れたくないと考えているのはすぐに分かった。置いていかれてどれだけショックだったのか想像もつかない。

だが、少年勇者であるセーズはもういないのだ……。

二章・どうしたらいいのか分からない・5（後書き）

なんかいろいろと酷い話だ（笑）

三章・真実って残酷だ・1

バルト村で迎えた朝は早かった。近くで鳴きわめくニワトリの声で目が覚めたイズは、昨晩同じ小屋で眠ったはずのあの可愛くない少年がいないことに気がついた。

昨日、あまりしつこくセーナに近寄るなと話しかけたら、キレイにこちらを無視したあの少年。本当に勇者の仲間だったとは思えないくらい性格が悪い。

レナフレアがエリオスと呼ぶ以上、彼が仲間だったのは真実のことだろうが、夢を持って想像していた勇者の仲間があんな少年だったと考えると、なんだかガックリきてしまう。もっと英雄的な存在を勝手に期待していた。

レナもとても顔の可愛らしい女性ではあるが、性格がたくましいというか、かなり強い。そしてエリオスもある意味でかなりいい性格をしているようだ。彼女たちを率いていた勇者セーズもこの分ではどんな人物やら。

あまり期待しないほうがよさそうだ。イズは起き上がり、小屋の中を見回した。エリオスの姿は小屋の中にはない。イズがいるほうとは真逆の壁際に横になった跡があった。エリオスはイズに近寄ろうともせず、これでもかと言わんばかりに離れて横になったのを覚えている。

バイ菌扱いされたような気がして腹は立ったが、疲れていたのでどうでもよくなって昨夜は結局そのまま眠った。

「……もう起きたのか」

呟いて伸びをする。ワラが敷かれていたので直接地面に寝るより身体はずいぶんラクだ。

セーナとレナも疲れは取れただろうか。脇に置いておいた剣を手に取り小屋を出る。

多分エリオスは彼女たちの小屋へ向かったのだろう。昨夜の様子

だとレナの話には全く納得していないようだったから、朝一番に問い詰めようとしているのかもしれない。
女性の眠っている場所に強引に入っているようだったら、なんとしても止めようと思った。そんなうらやましい……失礼なことはしてはいけない。
セーナの寝顔は可愛いだろうなぁという想像に、にやけそうになりつつ、何とか顔を引き締めてイズは女性に割り当てられた小屋に足を向ける。
小屋はすぐそこで、扉の前には華奢な人影があった。さすがに女性の眠る中には入っていかないくらいの分別はあるらしい。
金髪の美少年、エリオスである。彼はとても不機嫌そうに立っていた。
「よう。早いな」
片手を上げて挨拶するイズを、少年はあっさりと無視した。昨夜と態度が変わらない。人見知りするたちなのか、単に無礼な少年なのか。まともに話もしていない状況ではなんとも判別しがたい。
「二人はまだみたいだな。いつからそこに立ってるんだ？」
エリオスは無言。イズと会話する気はないらしい。ひどく不機嫌そうだ。
「……あー、人見知り？　それとも低血圧？　朝の挨拶くらいは返してもらいたいもんだな」
「うるさい」
ひとことだ。しかも心底うっとおしいと言いたげである。
「……性格悪いのか？　そんなんでよく勇者の仲間になれたな」
さすがにカチンと来たのでそう言ってやる。
「それとも勇者セーズってのは同じくらい性格悪かったのか？」
瞬間だ。銀光がひらめいたかと思ったときには刃が喉もとに押し当てられていた。
イズの喉に鋭い剣先を押し当て、それ以上に鋭い眼光で睨みつけているエリオスは、低く言い切った。

「セーズを悪く言うのは許さん」
本気である。そのままイズの喉を掻っ切るのも辞さないだろう。イズはゆっくりと両手を上げた。年下の少年に情けないことだが、完全に迫力負けしている。彼が剣を抜く動作もイズには見えなかったのだ。気がついたら冷たい刃の感触が喉にあった。
さすが魔王を倒した英雄、一冒険者が張り合える少年ではないと痛感する。
イズが降参を示したので一応納得したのか少年は剣を収めた。腰に下げているのは細身の長剣だ。かなり切れ味はよさそうである。体つきが華奢なため力はないのだろう。その分切れ味の良い剣を使っているようだ。エリオスが下げている剣も、やはり使い込まれている。ひょっとしてこれもジルゼが与えたものなのだろうか。そうであっても不思議はない雰囲気を持った剣だ。
セーナが持っている双剣やレナが持っている杖のように、激戦を潜り抜けてきた愛用の武器なのだろう。セーナが持っている双剣……勇者セーズの持ち物。ジルゼが彼に与えた、世界にただひとつの品。それを腰に下げている少女。
「……セーナちゃん、そんなに勇者セーズに似てるのか？」
セーナ――セレスティータ。彼女は勇者セーズの妹だとレナは言った。エリオスは彼女の顔を見て、勇者セーズと間違った。どう見ても女の子のセーナを見ても勘違いするくらい似ているのか。
「……似ているんじゃない。そのものだ」
ぶっきらぼうに、そっくりを通り越しているとエリオスは言った。あれほど美しい少女と同じ顔をしている男が存在するのか。イズにははっきり言って疑わしく思える。
「あの子と同じ顔した男なんているのか？　というか、それ、男か？」
「あの顔でも……僕よりたくましかったぞ、セーズは。身体は華奢でも心は勇ましい。だから魔王も倒せた」
だからこそ、彼は勇者と人に呼ばれているのだ。

「……セーナちゃんが勇者の妹……」
そう言われてみれば確かに彼女も勇者の資質を持っているかもしれない。困っている人たちを見捨てられない優しく強い心。人々を導く輝き。山賊ですら彼女の指示に従ってしまったではないか。
「そんなわけがない」
エリオスはまたも言い切った。
「セーズには家族はいないんだ。彼がいた町ひとつ全てが魔王に滅ぼされている。彼の血族も一緒に」
それは有名な話だったのでイズも知っていた。勇者セーズの生まれて育った町は魔王によって滅ぼされてしまっている。セーズはたまたま隣の村に使いに出ており、彼が戻ったときには町は魔物が闊歩する荒野に変わっていたという。
変わり果てた町を見て、勇者は復讐を誓ったとか、魔王を必ず倒す決意をしたとか、吟遊詩人は見てきたようにその時の勇者の悲哀を唄っているが、本当のところどうだったかは本人しか分からないことだろう。
「でも、生きていたのかもしれないだろう？　それなら勇者だって喜ぶだろうし」
「……妹がいたとは聞いていない。両親と姉と兄と弟の話は聞いているが」
勇者は六人家族、四人兄弟だったらしい。
「え、でもセーナちゃんは？　双子の妹だってレナフレアさんは言っただろ」
「だからおかしいと言っている」
勇者セーズと同じ顔をした少女。生き別れた双子の妹とレナは言った。勇者と同じ武器を持つ、れっきとした女の子。だが、勇者の家族は死に絶えてしまっているはずで、双子の妹の話など彼はひとつもしていなかったらしい。
「？　？　じゃあ、彼女は一体何者なんだ？」
「それを確かめようとしているんだ」

少年が朝も早くから小屋の前に待機しているのは、女性二人に逃げられないようにするためらしい。レナフレアの性格を熟知しているエリオスは、彼女がセーナを連れて逃げ出すのではないかと危惧しているのだ。
一歩間違うと怪しい人物だろうが、エリオスのほうも切羽詰っている。やっと見つけたセーズの手がかりだ。いきなり消えた彼をどれだけ心配したか分からない。
あまり外には出さないが、エリオスはセーズにとてもなついている。本当の兄とも思っているのだ。レナフレアだって嫌いではない。彼女とじゃれあい、セーズにたしなめられるのをお互いに楽しんでいたのだから、本当の家族よりも近い大切な仲間と思っている。
置いていかれるのはもうゴメンだ。魔王を倒す辛い旅でさえ貫き通した仲間なのに、どうして置いていかれたのか分からない。
何故、彼はいきなり自分たちの前から消えたのか。
性別以外、どう見てもセーズとそっくりなセーナと名乗る少女は、何が目的でレナと行動を共にしているのか。
そこらあたりが判明するまで、エリオスは追及を止めるつもりはない。
「謎だなぁ……でもセーナちゃんには謎も似合うなぁ」
鼻の下を伸ばすイズに、何を感じたのかエリオスは殺気立つ視線を向けた。
「変な目で見るな！」
「なんでだよ？　セーナちゃんは可愛い女の子だろ、見ていたいと思って何が悪い？」
「本当にセーズの妹だったら悪い虫を近づけるわけにはいかない！　妹でなくてもセーズと同じ顔だ、変な虫をつける気にはなれない！！」
保護者気分になっているようだ。そこら辺りの反応はレナと同じである。
「なんだよ、俺は変な虫じゃないぞ！　彼女のことだって真剣に考

えているんだ！！」
「……斬る！」
真剣に武器に手をかけるエリオス。腕前では到底かなわないと分かっているのでイズは逃げようかどうしようか迷った。
ばたんとドアが開いたのはそのときである。
中から目の据わったレナが顔を出し、ひとこと。
「……うるさい」
イズとエリオスには地の底から響くような恐ろしい声音に聞こえた。
「なんなのよ、朝も早くからぎゃあぎゃあと！　ニワトリが静かになったと思ったら次はアナタたち！？　あたしたちは疲れているのよ、休ませたいという労わりはないの！？」
「ハイ、スミマセン、ゴユックリ、オ休ミクダサイ、れなふれあサン」
かくかくと答えるイズは、完全に迫力負けしている。エリオスは見てみぬフリ。寝起きのレナは機嫌が悪いので、触らぬほうがいいと彼はよく理解している。
「レナ、いいよ、もう起きよう。村長さんに話をしないといけないし」
苦い笑いを浮かべて、セーナが顔を出した。あちこちにまだワラがくっついているところを見ると、彼女も今さっき目が覚めたばかりなのだろう。さすがにセーナに八つ当たりすることはできず、レナは強く息を吐いた。
「ああ、もう！　もう少し眠りたかったのに！」
「いや、ごめんなさい、すいません。こいつが暴れようとしたもんだから」
イズはエリオスを指した。間違いではない。間違ってはいないのだが、発端を造ったのはイズだろう。なすりつけられてエリオスは柳眉を逆立てた。
「？　エリオスが？　なにかあったの？」

まだ眠そうにセーナが問いかけてきたので、イズを斬り倒すのは止めた。
「べつになにも……君はぼくの名前を気安く呼ぶんだな。まるでセーズみたいだ」
彼女をじいっと見つめて言ってやる。見れば見るほどセーズにそっくりだとエリオスは思った。こんなに似ていて他人であるわけがない。でも、セーズの身内であるわけがない。
「う、え、あ、う」
あわあわ。セーナは言葉を失った。つい、親しげに呼びかけて話しかけてしまうが、初対面ということになっているのだ。そう考えると失礼である。
「ご、ごめんっ、えっとエリオス君」
うわぁ、凄い違和感。
そう思ったのは誰だったか。

三章・真実って残酷だ・1（後書き）

謎が謎を呼ぶ（大げさ・紛らわしい）過大広告と訴えないでください（土下座）

三章・真実って残酷だ・2

「いいわよ、呼び捨てで。そんなに上等な人間じゃないものね？エリオス」

苦笑するレナがかなり失礼なことを言っているというのに、ひねくれ少年エリオスは反論もせずに頷いた。

「……構わない」

「あら珍しい。素直ね」

「……うるさい」

ぶっきらぼうに言って、エリオスは目を逸らした。ひそかに彼は確信していた。

寝ぼけたところ、話し方、立ち居振る舞い、何よりもその雰囲気。彼女は確かにセーズとなんらかの関係がある人物だ。

確信したからには離れるわけにはいかない。わずかな確率でも、セーズと関係があるのならば、行方不明の彼の居場所が少しでもつかめるのなら、なんだってする。

「村長に話をしにいくんだろう。早く身支度を整えろ、セーナ」

「お、やっとセーナって呼んだな」

イズの茶々入れにエリオスは無言。そして、セーナとレナは顔を見合わせた。

とてもまずい状態になっているような気がすると直感したのはどちらのほうだったか。

レナはこんなにあっさりエリオスが納得するわけがないと思った。詳しい話をしたわけでもないのにあのエリオスが素直に引き下がるなんてありえない。

セーナは……内心で頭を抱えた。エリオスがどういうつもりなのか大体読めたからだ。

彼はついてくるつもりなのだろう。昨夜予想したとおりだ。おそらくはどう言っても考えを変えるつもりはない。変なところで頑固

なので確実についてくるだろう。
何か勘付かれたかもしれない。エリオスは勘もいい。迂闊に話しかけたのは失敗だったと痛感する。
痛感しながらも……どうすればエリオスをやり過ごせるのか思いつかない。
黙って置いていくという手も考えたが、一度それをやられているエリオスは警戒して早朝からドアの前に居座っていた。同じ方法は使えない。
何か考えなければ。セーナは頭を抱えたい気分だった。
パタパタとワラを落とし、簡単に身繕いをして、村長宅へ向かう。当然のようにエリオスはついてきた。もはや彼もパーティーの一員だとでも言いたげだ。
村長宅のドアをノックする。出てきたのは奥さんだった。これ幸いと奥さんに事情を話す。あの話の通じない村長と話すよりはマシだ。
魔物は山にいないこと。遺跡に住み着いているのは罪のない恋人同士で（ビオラと兄貴と言うと奥さんは笑顔のまま無言になった）害がないこと。足を洗ってまじめになりたいという働き手がいるので、村で使ってあげてくれないかと話もした。奥さんはとりあえず納得してくれたらしく、山の遺跡には近寄らないことにすると言い、働き手は村としても願ったりかなったりだと喜んだ。
依頼のほうは魔物がいなかったうえに、さらわれた娘というのも誤解で済み、両親も納得しているので前金だけでいいとセーナは笑った。何せここまで移動するのに馬車を使ったので、セーナとレナはともかく、お金をあまり持っていなかったイズは前金の分を多少使ってしまっている。
村が困窮しているため、なによりもありがたいと奥さんは喜んだ。あんな村長ならなおさら苦労しているだろう。
話は万事良いほうで終わり、セーナたちは村長宅を後にした。あとはもと山賊たちがまじめに働いてくれればいい。

「……村長さん、出てこなかったね」
「そうね、朝が早いからでしょうね」
「そうかなぁ……」
「そういうことにしておきなさい」
昨日のいろんな物音を思い出してセーナは密かに村長の無事を祈った。多分、死んではいないだろうとは思うが。
村を出る前に、もと山賊たちにもあいさつしていった。彼らはいたくセーナに感謝して、拝み倒す勢いだ。あの即死効果つきのカップルから開放してくれた上に、働き口まで見つけてくれてありがとうと泣き出す者までいる始末。ビオラと兄貴のカップルは、そうとう彼らの精神を圧迫していたらしい。
「気持ちは分かる……」
アレを見たものとして共感を示すレナとイズだった。
今後なるべくこの近くには立ち寄らないようにしようと、固く心に誓う。再びアレと遭遇するのは本心から遠慮したい。
「さ、ラジルダルに戻ろう」
また馬車に揺られなければならない。今度は話好きの老婆が乗っていなければいいと思いながら乗り場を目指す。率いているのはすっかりセーナだ。当然のようにレナとエリオスはついていく。
「セーナちゃんはリーダーシップあるなぁ。気がついたら君が前に立ってるんだよね」
何気なく言ったイズに、
「セーズみたいだな。彼も自分自身は意識せずに皆を率いてくれていた」
エリオスが何気なく反応を見ようとする。
「そ、そうですか？　あまり考えたことないですけど」
うろたえないようにしようと思ってはいるものの、いきなり言われると動揺してしまうセーナだ。彼女の態度でエリオスはやはり怪しいと彼女の背を見つめる。何か少しでも怪しいところがあったなら、すぐさま突っ込んでわけを聞こうと意気込んでいるのがよく分

かる。
「あ、ほら、馬車が来たわよ」
咄嗟にそう言って助けは出したものの、レナは息をついた。ラジルダルにつくまでの間こんな雰囲気で馬車に揺られて、もともと素直で嘘のつけないセーナがボロを出さない可能性は低い。どうやってエリオスの追求を切り抜けるか。
セーナもそこのところは考えていた。自分が嘘をつけない性格だということはよく分かっている。
「ぼ……私、疲れているので寝ます！　話しかけないでくださいねっ」
なので、馬車に座るなり宣言した。追求されれば話してしまいそうなら、話しかけられないようにすればいいのだ。
「起きたばかりで疲れるわけがないだろう、まだ朝だぞ」
冷静にエリオスが突っ込むが、レナが勝ち誇ったようにまくしたてる。
「誰かさんたちがうるさくて起こされちゃったものね？　前の晩わけの分からないことといわれて混乱しちゃってあまり眠れなかったのに。セーナったらかわいそう。寝なさい寝なさい。おねえさんが番をしてあげるから」
そう言われては反論できないエリオスと、ついでにイズである。黙り込んだ彼らが何か言ってこないうちにと、セーナは急いで目を閉じた。いっそ本当に眠ってしまおう。昨晩考え事をしていてあまり眠れなかったのは事実なのだ。
問題はエリオスのことだけではない。ラジルダルに戻ったら、バーミリアスの情報がなにか掴めているかもしれない。彼のことが分かったらすぐにでも出発する気でいる。
その場合、イズはどうするか。彼とは今回限りのつもりでいるが、なにやらついていきたそうな様子。いい人ではあるのだが、出会いがしらにいきなりプロポーズしてきたような男だ、あまり付き合いたくない。なによりも彼といると、思い出したくない悪夢を思い出

す。
突然の裏切り。考えたこともなかった現実。
バーミリアスに出会ったら、何度でも問い詰めたいことがある。
『どうしてなんだ？　何故こんなことをした？』
答えを知っているのは行方の知れないバーミリアス本人だけだ。
何よりも考えなくてはいけないことがあるのに、イズといい、エリオスといい、更なる問題が山となって積み重なっていく。
巻き込みたくないのに。
そう思いながら、セーナは眠りに落ちていった。

三章・真実って残酷だ・２（後書き）

ちょっとシリアスっぽくつくろってみました（オイ）

三章・真実って残酷だ・3

ラジルダルにつくまでの二日間、実にぎすぎすした空気に包まれながら過ごした。時間があればエリオスはセーナに話しかけて探ろうとするし、そうするとイズが変に対抗心を起こして割って入る。おかげで言い訳もせずに済み、ボロが出ることもなかったのでセーナとレナはかえって安心したのだが、男二人の仲は最悪を通り越して険悪になった。

イズとしては気のある少女にエリオスが変に因縁をつけて付きまとっているとしか思えず、エリオスにとってイズはセーズの情報を得るためにセーナに話しかけようとしているのを邪魔している鬱陶しい男としか思えない。

はたから見ると美しい少女を取り合う男の争いだろうが、争われる当の少女は苦笑い。

けっこうな美少年エリオスと、たくましい男イズに争われても全くその気はないようだ。むしろ怖がってレナにくっついている。ラジルダルに到着してもそうだった。

「セーナ、どこへ行くんだ？　酒場か？　そういうのはレナとそこの大木に任せて、ぼくら子供はどこか食堂ででも待っていよう」

「おい、セーナちゃんをナンパするな。悪い虫がどうとか言っといてお前が悪い虫になりそうな勢いじゃねぇか」

「一緒にするな。ぼくはセーズの話をしたいんだ。生き別れたというなら彼女もセーズの話を聞きたいだろうと思ってな、親切心だ」

「それならレナフレアさんでもいいだろう！」

「レナは他にやることがある。ぼくにはない」

「……レナ、行こうか」

「そうね、アホ二人は放っておきましょう」

いっそのこと、ここで撒いてしまおうかと思うが、男二人ともそれを警戒しているらしくそう簡単には撒かれてはくれない。

結局、二人を連れたまま、何日か前に訪れた酒場『山積みのお宝亭』についてしまった。
中に入ると、マスターはすぐにレナたちに気がつき、笑いかけてくる。
「何か分かった？」
まっすぐにカウンターに行って何よりも知りたいことを訊く。
「いやぁ、悪いけどバーミリアスって奴の話は全然だね」
「そう……」
五日ほどではたいした情報は入らなかったらしい。この近辺ではラジルダルが一番大きな街だ。商業都市のために情報も他より集まりやすい。そこを見越して来たのだが、ラジルダルでもダメとなるとバーミリアスの情報を得るのはかなり厳しいだろう。
「バーミリアス？　奴を探しているのか？　どうして」
事情を知らないエリオスはなんであんな影の薄い奴をと不思議そうだ。探すのならばセーナの兄、セーズではないのか。何気ない少年の問いに、女性二人はぎくりとした。
「お、エリオス坊やじゃないか。合流したのか、元気そうだな」
「坊や扱いするな。相変わらず不快なところだな、酒場というのは」
不機嫌そうに言ってから、エリオスはセーナに向き直る。
「何故バーミリアスを探している？　君たちはセーズを探しているんじゃなかったのか」
行方不明のセーズ。
同じく行方不明のバーミリアス。
魔王を倒した英雄で、居場所が分かっているのは今現在レナフレアとエリオスだけだ。そして、レナフレアはセーズの妹という少女と、セーズではなくてバーミリアスを探している。
ここにきて初めてその事実に思い当たり、エリオスは愕然とする。バーミリアスの影が薄いため考えもしていなかったが、もしかして。
「……セーズの行方不明に、バーミリアスが関わっているのか！？」
言った瞬間セーナが身を硬くしたのがエリオスには分かった。

かつての仲間。だが影が薄くて彼の性格などはよく覚えていない。そもそも興味も無かった。エリオスにとって大事なのは一にセーズ、二に自分、三番がレナフレアで、あとはその他大勢だったからだ。

エリオスだけではない。

世間一般の反応でも、勇者セーズ、その仲間の聖導師レナフレアと魔法剣士エリオス……あと確か魔導師がいたよね、え、いたっけ？　くらいのもので、バーミリアスの影がいかに薄かったかよく分かるだろう。彼はほかの仲間と違って、名前すら世間に知られてはいないのだ。パーティー内で孤立していたわけでもないし、いじめられていたわけでもない。ごく普通に仲間として存在していたのに、コレである。

「え、いやいやいや、セーズがバーミリアスと一緒にいるんじゃないかなぁって」

エリオスの指摘にレナはあわてて言い訳した。

「嘘をつけ！　ならなんでバーミリアスを名指しなんだ？　あんなに目立たない奴よりセーズを名指しして探したほうが遥かに早いだろう！　セーズのほうがずっと目立つ容姿をしているんだから！」

至極まっとうな意見である。外見からしても特に特徴の無いバーミリアスより、超のつく美形であるセーズを探したほうが早い。服装を考えてもそこらにごろごろしている魔導師より、圧倒的に使う者の少ない双剣使いを探したほうが見つかりやすいではないか。

「どうなんだ！？　バーミリアスが関係しているのか！？」

「エリオス！」

声を荒げたエリオスを、セーナが鋭く止めた。

「声が大きい。ほかの人が驚いている。静かにしなさい」

「っ……分かった」

エリオスはおとなしく引いた。セーナが本当にセーズに思えたのだ。女性の彼女が、セーズであるわけが無いのに。

妹というのは本当の話かもしれない。彼女はあまりにもセーズに似ている……。

「静かにはする。でも理由を話してくれ。何故バーミリアスを探しているんだ」
「それは……」
口ごもる彼女の様子は深刻で、さすがにイズも口を挟めない。もしや、とエリオスもしているであろう最悪の想像をしてしまう。
もしや、勇者は、かつての仲間に――殺されたのか。
行方不明ではなく、彼はもう、この世にはいないのではないか。
バーミリアスという男は、勇者を裏切ったのだろうか。
魔王を倒した英雄は死んでしまっており、その妹であるセーナが敵を討つためにレナフレアと共にバーミリアスを探しているのではないのか？
だとしたらバーミリアスという男は最悪の裏切り者だ。
「答えてくれ、セーナ！」
真っ青な顔色でエリオスが問う。考えたくない想像が頭を駆け巡っているのだろう。
手に汗握る展開だ。店内は静まり返っている。店にいる全員がセーナの言葉を待っていた。彼女のひとことで世界が変わるかもしれないのだ。勇者がかつての仲間に殺されていたなどという話は、希望が溢れ始めている世界に絶望を落とすだろう。魔王がいなくなって、勇者の存在は光り輝く希望そのものとなったというのに。
世界の人々のために戦った少年の行く末にしてはあまりにもひどい結末ではないか。
イズは眉を寄せた。言葉が出てこない。
「……ここでは話せない」
苦しげにセーナはそう呟いた。
「話せない？　ならどこでなら話せる？」
「……」
セーナは迷っているようだった。話したくないことだというのは言われなくても彼女の様子から分かる。口に出したくないこと――口に出せないことなのか。

知られてはまずいことなのか。やはり、バーミリアスという男が勇者セーズの行方不明に関わっているのか。
「……ドルスさん、部屋を用意してくれる？　二部屋お願い」
不意にレナが酒場のマスターに話しかけた。ただならぬ様子を固唾を呑んで見守っていたマスターがあわてて頷き、彼女に二階の部屋の鍵を渡す。
「セーナが落ち着いたら話すわ。今はダメ。エリオスも落ち着いて」
彼女はそっとセーナの背を押した。確かにセーナは思いつめたような表情をしている。
「……いつ、話してくれる？　ぼくはいつまで待てばいい？　セーズが消えた時だって……ぼくは……っ！」
血を吐くようなエリオスの声に、セーナは苦痛を浮かべた。
彼の言葉が胸に痛い。でも、話したくない。
「とにかく今はダメ。エリオス、セーナを追い詰めないで。アナタも何も分からないのは辛いでしょうけど、セーナだって辛いのよ」
なだめるようにそう言って、レナはイズに鍵を片方渡してからセーナと二階に上がった。男性二人はさすがについてこない。彼女たちのかもし出す雰囲気がそれを許してくれなかった。

女性二人は素早く部屋に入り、鍵をかけた。
はーっと息をつき、セーナが体から力を抜く。
「……まいったわね」
言いながら、レナは先ほどまでの深刻な雰囲気を一変させ、今にも笑い出しそうだ。
「笑ってる場合じゃないよ！　エリオスものすごく深刻な顔してたじゃないか！　きっとすごく悪い方向に考えてるよ！？」
あせるセーナに、レナはちょっと考え、苦笑した。
「たとえば、バーミリオスがセーズを殺したとか？」
「うわ、絶対考えてるよそれ！　どうしよう！？」
セーナは頭を抱えた。彼女がバーミリアスを探している理由はそ

こまで深刻なものではないらしい。その割に、彼女の表情は深刻なものだったのだが。
「エリオスとバーミリアスはあまり仲良くなかったものねえ……多分あの子、最悪の結果としてそれを考えているのではないかしら」
「うわあ……どうしよう。関係あるか訊かれたとき反応しちゃったのはまずかった……エリオス変に勘がいいからあれで感付いちゃったよなぁ」
バーミリアスがセーズ失踪に関係あるのか。そう訊かれて思わずセーナは硬直してしまった。いいところを突かれたからだ。
その上、セーナは隠し事が上手でない。根っから素直な彼女が上手く隠しとおせるわけもなく。
「ま、エリオスは確信したでしょうね。セーズの件にバーミリアスが関わっているって」
セーナは呻くしかない。
結果、こうならなければいいと一番恐れていた事態に陥ってしまった。
どうにかごまかしてエリオスとここで別れるつもりであったセーナだが、こんな状況で彼が自分たちから離れるわけがないだろう。
「あたしの言い訳もまずかったわね……咄嗟に上手い言葉が出てこなくて。なによりエリオスの前でバーミリアスのこと訊くべきじゃなかったわ。失敗、失敗」
怪しまれて当然だ。セーナをセーズの妹と言ってしまっている以上、バーミリアスを探しているのは何か理由があると思われるのもまた当然。さらに悪いことにセーナが持っているのはセーズが使用していた『星砕く刃』で、まるでセーズの形見のような扱いをしてしまった。
普通、これだけの条件が揃ってしまったら、最悪のことを考えてしまって不思議はない。
「もしあたしがエリオスの立場だったら、まず間違いなく姿の見えないバーミリアスがセーズを殺したと考えるわねぇ」

「……レナ、楽しそうだね」
「おほほほ、いっそのこと話してしまったら？」
にんまり笑ってレナは言う。
「少なくとも気は楽になるわよ～？」
頭痛を感じながらセーナは言い返した。
「ならないよ！　エリオスを巻き込みたくなくて置いて行ったのに、これじゃあ意味がないじゃないか！」
「そうね、でもかまわないのではない？　話しても態度が変わることはないわよ、エリオスなら」
「……僕がかまうよ……」
クスクス笑ってレナが突っ込む。
「わ・た・し、でしょう？」
「……もういい……」
ぐったりとセーナは答えた。

三章・真実って残酷だ・3（後書き）

扱いの酷いバーミリアスさん（二十二歳）。
そんでもって、これはアホ話なので、深刻な流れになってどうしようと思う作者（笑）。エリオスは真面目だなぁ（大笑）

三章・真実って残酷だ・４

一方、下の酒場では。

「……」

無言、その上これでもかといわんばかりに思いつめた表情で、エリオスが果汁の入ったグラスを睨んでいた。果汁が親の仇とでもいいたげな人相だ。

気持ちが分からなくもないので、横に座っているイズは黙って麦酒の入ったコップを傾けている。

かつての仲間。勇者のパーティー。この世界で最強の四人組……。

女性二人の様子から予想して、勇者セーズが無事である可能性は限りなく低く思える。

そして、その原因であるらしいバーミリアスもエリオスのかつての仲間だ。

まず考えられるのは……裏切り。

魔王が滅びたあと、戻ってきた彼らの間に何があったのかは分からないが、何らかの要因で魔導師は勇者を裏切ったのではないか。

平和になったばかりだというのに、一体何があったのか。

苦労して、それこそ死線を潜り抜け、協力し合い、魔王を倒しただろう彼ら。

心の結びつきは何より誰より強かっただろう。

なのに。

「……セーズ……！」

今にも泣き出しそうなエリオスの様子から、彼らが何よりも強く信頼しあっていたのだろうとすぐに分かるのに。

一体、何故。

「……何があったんだろうな……」

イズは呟いた。

「勇者セーズが行方不明になったのは、戻ってきてすぐだったって

聞いてる。すごく噂になったからな。天に帰ったとか、魔王の残した呪いにやられたとか、どこかの王女と駆け落ちしたとか、ずいぶん無責任なものも聞いたよ。でも、どれも違うんだろ？」
「……ああ。セーズは人間だ。天の使いなんかじゃない、ちっぽけで、でも勇気あるただの人間だ。魔王の呪いなんかにやられるほど弱くないし、王女と駆け落ちするようなロマンスなんて、魔王と戦っている旅の最中にそんな余裕があるわけないだろ」
　ぼそぼそとエリオスは答えた。考えたくないからだろう。少しでもよぎる嫌な考えを頭の中に置いておきたくなくて、イズの話に付き合う。
「なかったのか。セーナちゃんのお兄さんなら、さぞモテただろうに……可哀想だな」
「あちこちできゃあきゃあ言われてはいたが、セーズは鈍いから気がついてなかった」
「それも可哀想だな、いろんな意味で。年頃なのに」
「おまけにそばにいた女がレナだからな。可哀想だろう」
「え、レナフレアさん可愛い人じゃないか」
「じゃあ、お前レナを恋人にしたいと思うか？」
「……それは、ちょっと怖いな」
　短い時間で、彼女がいろいろと『黒い』人物だと知ってしまっている。味方ならば何より頼りになる人だろう。ひとたび敵に回れば……どうなるかは考えたくない、そんな女性だ。
「レナフレアさんと付き合うと、幼女趣味とか言われそうだし」
　なにより、その外見。可愛らしい少女にしか見えない。セーナより年下に見えるのだ。イズの外見は年相応。並ぶとどう見ても犯罪的な絵面にしかならない。
「そういうのしか傍にいなかったんだ。ロマンスが生まれるわけがないだろう」
　無責任な吟遊詩人が、好き勝手に歌っているだけだとエリオスは自嘲する。

「それでも……そういう話なら良かった。駆け落ちでもなんでも、セーズが幸せなら応援したし、協力したのに」
少年剣士は視線を落とした。兄のように思っていた。誰も手を差し伸べてくれなかった自分に、初めてなんの恐れも企みもなく手を差し出してくれた人。
信じあうという温かさを教えてくれた。
人々のために、命を懸けて魔王と戦った、このアズトリーリア最大級のお人好し。
平和になった世界を、何よりも誰よりも味わっていい権利を持った人なのに。
「セーズ……どうして、バーミリアスなんかに……」
呟くものの、エリオスには分かっている。セーズは仲間を疑ったりしない。たとえバーミリアスが短剣を持って構えていても、彼は怯えず、怯まず、語りかけるだろうことを知っている。それがエリオスやレナでも同じだ。
刺されるその瞬間でも、疑いはしないだろう。
仲間に殺されても、恨んだりはしないだろう。
だからこそ、もしもバーミリアスがセーズを害したのなら、許せない。
「……そのバーミリアスっていうのはどういう奴なんだ？　魔導師なんだろう？　その……人を裏切るような奴なのか？」
勇者の仲間だった人物。彼のことはほとんど人々の噂には上っていない。かろうじて四人パーティーというのは伝わっているが、それもうろ覚えの怪しいもので、三人組だよと言い出す者もいるくらいだ。
「……アイツのことはあまり気にかけていなかったから、どういう奴かもよく知らない。ぼくが入ったときにはもういたが……ヤツの存在に気がつくまで二日かかった、それくらい影の薄い男だ」
それはいくらなんでもあんまりだろう、とイズは思った。強い友情と信頼で繋がっている仲間ではないのか。

「ヤツのことを気にかけたのはセーズくらいだ。レナもあまり気にしていなかったくらいだし……魔法はぼくとセーズで事足りたから、戦闘でもあまり活躍しなかったような気がする」
ひどい扱いである。エリオスは好き嫌いがはっきりしすぎているようだ。
「……それでグレたんじゃないのか？」
「恨むならぼくとレナだろう。セーズはぼくらと違ってヤツのこともちゃんと仲間として大事にしてたんだ。彼がヤツに恨まれる要素は何一つとしてない」
セーズがバーミリアスに恨まれる要素は何もない。エリオスは確信している。自分と違ってセーズは人にとても好かれる人物だ。旅の中でセーズと接した人たちは、皆彼のことを好きになった。エリオスからしてみればセーズは奇跡のような人物なのだ。
そして、そんな彼と一緒に旅を出来ることがとても誇らしかった。レナもそうだろう。バーミリアスだってそうだと思っていた。
セーズと一緒に旅に出て、辛いこと厳しいことは山ほどあったが、後悔するようなことは何もなかった。いつだって、悔いのないようにセーズが導いてくれたからだ。
かけがえのない光。それがセーズだ。
「じゃあ、なんでだろうな……何が理由なんだろう？」
バーミリアスがセーズを裏切る理由。かつての仲間が彼を殺すような理由……思い当たらない。
「なあ、性格はよく分からないのなら、外見は？　どんなヤツだ？　魔導師ってごろごろしているけど、何か特徴はないのか？」
外見から何か連想できることはないか。そう思ってイズは訊いたのだが。
「特徴……強いて言えば、何の特徴もないところが特徴だな……とにかく影が薄いんだ。セーズと一緒に立っていても、セーズ以外にはその場にいることすら全く気がつかれない、そんな男だった」
「……それはそれでなんかすごいな」

セーズが超のつく美形であるということを差し引いても、バーミリアスは目立たない男だったらしい。勇者のパーティー内にいて、そこまで目立たないという存在もある意味希少だ。
「すれ違っても気付かないかもしれない……くそっ、こんなことになるのなら、ちゃんとバーミリアスの顔を覚えておくんだった……！」
長く旅をしていて仲間にも顔を覚えてもらえていないバーミリアス。
哀れだ。いろんな意味で。
イズは見たこともないだろう男に心の中で同情した。
おそらくバーミリアスは見つかれば命はないだろう。エリオスは即座に、しかも躊躇なく抹殺する気満々だ。エリオスでなくても、セーズの命を奪ったということがアチコチに知れたら、裏切り者として即座に賞金首に認定されるのではないかと予想できる。
世界中が彼の敵になるだろう。
そこまでのリスクを覚悟して、バーミリアスという男は勇者を手にかけたのだろうか？
自分の命などどうでもいい。それでも勇者を殺す理由とは？
イズは考えた。考えて考えて、煙を吹いた。
「おい」
うんうんうなって突然動かなくなったので、驚いたエリオスがいぶかしげにイズをつついたが、やはり反応は無い。
「……なんなんだ、この男は」
一瞬レナフレアを呼ぼうかとも考えたが、先ほどの様子ではレナの力が必要なのはこの色ボケ男ではなく、セーナだろう。セーズの妹だという少女。
セーズがバーミリアスに害されたというなら、一番ショックを受けているのは妹である彼女だ。
エリオスはイズを見た。頑丈そうな男だ。多少殴ったところでびくともしないだろう。しばらく考えて、決心がついた。

……放っておこう。

三章・真実って残酷だ・４（後書き）

いろいろと酷いなエリオス（笑）

三章・真実って残酷だ・5

「ねえ――ちょっと、イズ？」
肩をゆすられて、イズは我に返った。目の前には銀髪をお下げにした幼い少女……にしか見えない女性。
「あ、レナフレアさん？　お、あれ？」
「エリオスは？」
訊かれてさっきまで少年剣士が座っていただろう席を見る。空だった。
テーブルには果汁の入っていたグラスもない。かなり前に少年は立ち去ったらしい。鍵がないところを見ると二階に借りた部屋に行ったのか。
「あー、部屋に行ったみたいだ」
「そう。何か言っていた？」
「いろいろと。バーミリアスってヤツのことを」
レナはため息をついた。しょうがない子とでも言いたげだ。
「……セーナちゃんはどうしてます？」
ここにいるのはレナだけだ。セーナは部屋なのだろう。まだ、話す覚悟がつかないのかもしれない。重大な話だ。そう簡単に決断は出来なくても無理はない。
「先に休んでいるように言ってきたわ。あたしも寝る前にエリオスの様子だけは見ておこうと思ったのだけれど」
「あれ、もうそんな時間か」
窓を見るとすでに日が暮れて、外は真っ暗。イズはかなり長い間壊れていたらしい。もう眠っていてもおかしくない時間だ。そんな時間になるまで煙の出たイズは放っておかれたようである。
「もう寝てしまっているかもしれないわね。部屋に行くのもかえって刺激してしまいそうだから、やめておくわ」
下手につついて藪から蛇を出すのはまずい。そう判断し、部屋に

戻ろうとしたレナを、イズが止めた。
「バーミリアスというのは、どんな男だったんだ？　教えてほしい」
エリオスにも訊いたことだが、レナは違う見方をしているかもしれない。
「？　エリオスから聞いたのではないの？」
「や、なんかよく覚えていないとか言ってた。とにかく目立たない男だって」
「その通りよ。他に特徴はないわね」
レナまで断言している。バーミリアスという男、筋金入りだ。
「レナフレアさんもそいつの顔覚えてないのか？」
「まさか。長く旅していた仲間よ？　覚えていないわけないでしょう」
きょとんとする彼女に、エリオスは覚えていないようだと説明すると、苦笑した。
「あの子はセーズ馬鹿だからね。セーズが幸せならそれで自分も幸せになってしまうくらいセーズになついていたから。バーミリアスと仲が悪かったし」
興味がない相手は即座に記憶から消すらしい。やはり好き嫌いがはっきりしすぎている。
そんな少年になつかれていたセーズはたいした人物だと思う。
「で、どんなヤツなんだ」
「性格？　容姿？　性格はあたしにも答えられないわね。はっきり言って、あたしもアイツはどうでもよかったから」
彼女もひどい、とイズはひきつり笑った。憧れていた勇者のパーティーは、案外ギスギスした人間関係だったようだ。
セーズが中心にいなかったら成り立たない信頼関係の気がする。
そんな人たちをまとめていたセーズは、やはり勇者と呼ばれるにふさわしい人物なのかもしれない……そんなことをぼんやり考えたイズである。
「とりあえず、容姿は答えられるわよ。背たけはアナタとセーナの

ちょうど中間くらいの高さで、髪は紫の長髪。目は青。年齢は二十二歳。体型は太っても痩せてもいない。顔は崩れてもいないけれど整ってもいない」
どこにでもいそうな特徴だ。おまけにクラスは魔導師。
「ね？　特徴が薄いのよ」
「ふーん、実力は？　エリオスはあまり強くないようなことを言ってたが」
「強いわよ」
けろりとレナは言い切った。
「え」
「当然でしょう。生半可な実力じゃ魔王に敵うわけがないもの。高いレベルの魔法をがんがん使える男よ。エリオスはセーズの背を見て前線で戦っていたから、あまり印象に残っていないのね」
「そんなに高レベルの魔導師なのに、覚えられていないのか……」
聞けば聞くほど彼が哀れになってきたイズだ。考えてみれば魔王に対抗するようなパーティーに入っているのに、弱いわけがない。そこまで高レベルの魔導師なのに、世間に認識されてもいない。しかも、仲間にもどうでもいいとまで言われる始末。
哀れすぎる。
「ひどいなぁ、俺の知っている魔導師も結構高レベルだったけど……そこまでは影が薄くなかったような、気が……する？」
いいながらイズは首をひねった。
高レベルの魔導師。
年はイズとそう変わらず、背丈はイズより低くセーナより高い。
紫の長髪。
青い目。
太っても痩せてもおらず、崩れても整ってもいない顔。
そして何より、目立たない。
「あれ？」
なんだか心当たりがあるような、ないような。

「どうかした？」
「いや、あれ？　そんな奴を知っているような」
「え！？」
名前は知らない。だが、今言っていた特徴のない特徴に一致する男をイズは知っていた。
この町に来てセーナたちに会う前に、少し滞在していた町、ノセナールの近くで塔を建てて住んでいた男だ。近くに怪しげな塔を建てているにもかかわらず、町の住人の間でも気にされていなかった。何やらいろいろ実験をしていて、魔法の材料を取りに行ってくれと町の酒場に依頼を出したりしていて、その依頼を受けたのだ。
材料からして高レベルの魔法を扱えるのは間違いないと、そのときパーティーを組んでいた魔導師が言っていたので覚えている。
「どこで！？」
「や、えっと……でも本人かどうかは分からない。名前も知らない男だ、大体そんなに都合のいい事あるわけないだろうし」
大体あんなに怪しげな男が、かつての勇者の仲間なのだろうか。
「分からないわよ。聖天の王様かジルゼ様のお導きかもしれないわ！なんたってこっちにはセー」
言いかけてレナは一度口ごもり、言い直した。
「……ナがいるのだから。セーズの妹の」
「？　ああ、そうかな、そうかもしれないな」
ジルゼの導きを受けた勇者の妹がいるのならば、これは偶然ではないのかもしれない。
必然、あるいは――運命か。
「どのみち何の手がかりもないの。似ている『かも』でかまわないわ。行って確かめれば分かるでしょう」
レナはすでに行く気である。言われてみれば何の手がかりもないのは確かなのだ。少しでもそれらしい情報があるのならば行くしかないのだろう。
ワラにもすがるというやつだ。

「わかった。案内するよ」
「……情報だけでいいのよ？」
にっこりと、レナは笑う。
「いやいやいや、案内するよ。俺も気になるし」
これから先もセーナと行動できる理由が出来たので、イズとしては万々歳。それが嫌だったレナとしてはなんとかして別行動をとりたかったのだが、情報をつかんでいるのがイズだけでは、抵抗も出来ない。
穏やかに、そしてにこやかにプレッシャーをかけるだけだ。
「もしバーミリアスだったら、セーナはきっと喜ぶわね。うふふ」
「そ、ソウデスネ。喜ンデイタダケレバ何ヨリデス」
怖い。

＊＊＊

ノセナールまでは平穏無事な旅だった。エリオスもセーズのことで頭がいっぱいらしく、あれ以上セーナを問い詰める真似もしてこない。途中幾度か魔物に遭遇することはあったが、そこは魔王を倒したパーティーのうちの二人と勇者の妹である。単語で表すならばひとこと、『瞬殺』だ。ほとんどがエリオスの魔法ひとつで一掃された。
イズなど剣を抜く機会もなかった。すっかりただの案内役だ。
旅の途中でセーナにいいところを見せたくとも、全てエリオスに奪われ、レナには威嚇され……なによりも、セーナ自身がイズを意識していなかった。
「あの男、かなり馬鹿だろう」
旅の途中でエリオスはレナに言ったものだ。
「そうね、その上お人好しよ」
レナはあっさりと肯定し、聞いていたセーナは苦笑するしかない。
イズが案内してくれるのは助かるが、できれば直前で別れたかった。

もし、目的の場所にいるのがバーミリアス本人なら、イズは間違いなく足手まといなのである。イズ本人はセーナの盾になるとかっこよく宣言したつもりだが、盾にすらならない可能性がある。高位の魔導師にかかれば、人の身体など紙っぺらも同然だ。
「邪魔よね」
塔が見えてきたころ、男の純情をバッキリと蹴っ飛ばす発言をしたのはレナフレアだった。
「そうだな。邪魔だ」
ねじねじとねじ潰すようにエリオスが畳み掛ける。
「まぁ、あたしがついているから死ぬことはないけれど、はっきり言って、邪魔だわ」
「う、うう、俺はそれでもセーナちゃんの盾になりたい！」
「セーナ、ここでいりませんって言えばいいのよ。トドメを刺してあげなさい」
「そうだ、セーナ。要らないと言え」
「え、ええっと、えっと」
どういえば角が立たないだろうかとセーナはおろおろ。もっとも彼女のフォローひとつではどうにもならないくらい、レナとエリオスが角を立てまくっているのだが。
「足手まといなのよね？」
「無駄死にだ。そんな命をセーナに背負わせるな」
「ひでぇ！　あんたたちほんとに勇者の一行だったのか！？」
「おほほほ、知りたい？」
「ふっ、ぼくの実力をその身を持って知りたいというのなら思い知らせてやるぞ」
「いえ、結構です。目ガ本気デスヨ？　オ二人トモ」
本気で武器を抜きそうな勢いを、セーナがため息混じりに止めた。
「いいよ、ここまで案内してくれたんだし、イズさんだって気になるだろうし」
「……本当に、いいの？セーナ」

レナが最後の確認をする。セーナは彼らに背を向けて塔を眺め、頷いた。
「……いいんだ、もう」
ここまでエリオスがついてきた時点でいろいろとあきらめた彼女である。イズ一人増えたところでたいして差はない。防御に長けたレナフレアがいるので死人が出ることはないだろう。
そして、エリオスに『自分と同じ思い』をさせないという決心もしている。
……『ひらきなおった』とも、言う。
「アナタがいいなら、いいわ」
「？　どういう意味だ、レナ」
「あそこにバーミリアスがいれば分かることよ、エリオス」
背中の会話を聞きながら、セーナは足を踏み出した。進むたび、塔が近付く。
それほど高い塔ではない。だが一日二日で出来るようなものでもない。ノセナールの住民はいつの間にかこの塔が出来ていたといった。住民に気が付かれないような速さか、あるいは――主と同じように塔まで影が薄かったのか。
四人は扉の前に立った。ぴりぴりと肌を刺す魔力を感じる。かなり高位の魔導師がいるのだろう。
「ここにいるのか、バーミリアス」
呟いたセーナに、応える声があった。
［久しぶりだ、三人とも。よく来てくれた］
響く声にイズ以外の三人がハッとする。間違いない。
「バーミリアス！」
顔も覚えていなかったエリオスも、一応声は覚えていたようだ。確信を持ってその名を呼ぶ。魔法で塔の中からこちらを見ているだろうバーミリアスに向かって。
「答えろ。どうしてセーズを殺した！！」
［は？］

返ってきた声は間が抜けていた。
「『は』ってなんだ、『は』って。お前がセーズを殺したんだろう！？」
［なにいってんだエリオス？］
本気で何を言われているのか分かっていないような声だ。勢いを殺されてエリオスが眉を寄せる。その前でセーナが肩を震わせており、横ではレナが苦笑している。
「なにって……？　セーズの行方不明にお前が関わっているんだろ、だからレナとセーナは」
［セーズが行方不明ぃ？　いるだろ、そこに］
「は？」
［セーズ。いるだろうが］
誰のことを指してそう言っているのか。分からないエリオスの横でレナが笑いをこらえている。ふるふると身体を震わせていたセーナがようやく声を出した。
「……バーミリアス……！」
［はっはっは、可愛いよセーズ。女にした甲斐があったなぁ。おれのハーレムに入る気になったかい？］
「そんなわけあるかッ！　僕を男に戻せーーーッ！！」
心から絶叫した彼女――セーナ改め、勇者セーズ。
エリオスとイズの目が、点になった。

三章・真実って残酷だ・５（後書き）

はい、そういうわけでセーナ＝セーズです。
どうしてこうなったのかは、最終章であきらかに！（注・これはアホ話です）

四章・往生際の悪いヒトたち・1

魔王を倒した達成感。それを為しえたのはひとえに仲間たちのおかげだ。

魔王の城から戻ってきたその晩、セーズはベッドに座り、一人これからのことを考えていた。生国シンシアに戻って、復興を手伝おうと思っている。仲間たちにはそれぞれの道を歩んで欲しいと伝えたが、レナフレアとエリオスは一緒に行くといってくれた。家族を失ってしまったセーズに、もう一度家族のぬくもりをくれた彼女たち。これからも一緒にいられる。それはとても嬉しい。

バーミリアスはどうするのだろう。彼はいろいろと考え込んでいるようだった。あれだけの魔導師だ、魔導師ギルド、魔導師養成学校、どこから声がかかってもおかしくない。

どの道を選んでも、つながりが途切れることはない、そう信じているから彼がどの道を選んでも応援するつもりでいた。

大切な仲間だから。

――ドアがノックされた。セーズは何の疑いもなくドアを開ける。今、この宿に泊まっているのは自分と仲間たちだけだと知っている。

「あ、バーミリアス。どうしたんだい？」

どこか思いつめた様子の彼の表情に、セーズは首をかしげた。何か悩んでいるのか。

「セーズ、ちょっといいか」

「うん。どうぞ」

彼を招きいれようとした瞬間だった。バーミリアスが呪文を唱えたのは。

「！？　バーミリアス？」

攻撃の呪文ではない。聞いた事がないものだった。驚きはしたものの、さほど警戒していなかったセーズは溢れる光に思わず目を閉じて、問いかける。

「？　また新しい呪文の実験？」
「いや、違う」
「？　？　じゃあ、なに？」
「おれ、ハーレムを作りたいんだ」
「は？」
「手始めに、超美形のセーズが欲しくて」
「はい？」
「でも、お前男だろ。おれ、ホモじゃないし」
バーミリアスが何を言っているのか分からない。
「何言ってるんだ？？」
光が収まり、そこでセーズは自分の体の異変に気がついた。
「というわけで、おれのハーレムに入ってくれ、セーズ！」
がばっと抱きついてきたバーミリアスを、セーズは咄嗟にはたき倒した。そのあたりは魔王を倒した世界最強の勇者である。どれだけ加減していようと、ひ弱な魔導師であるバーミリアスは為すすべなく床に倒れた。
「何考えてんだ！？　僕、お、女になってるじゃないか！？」
「は、ハーレム……」
「バーミリアス！！　なんでこんなこと！」
がくりとバーミリアスは気を失った。それ以上問い詰めることが出来なくて、しかたなくセーズは解呪のできるレナフレアのところに行き――彼女にひとしきり大笑いされ、あげく解呪できなくて青くなり、あわてて部屋に戻ったが、バーミリアスは置手紙を残して姿を消していた。
『でっかいハーレムをつくるから、その気になったら来てくれ』などというふざけた手紙を。
頭を抱えたセーズである。おそらくこの魔法はバーミリアスにしか解呪できないものなのだ。彼を捜すしか元に戻る方法はない。だが、どこに行ったのか分からない。
捜すのはいいが、エリオスをどうするか。この姿を見られたくな

いし、下手をするとエリオスまで女に変えられる可能性があるのではないかと言うレナフレアの指摘に、セーズはハッとした。エリオスも美少年だからだ。
弟のような彼にまでこんな思いはさせられない。可哀想だが、元に戻ったら必ず弁明するから、と、涙を呑んで置いていき――その晩、『少年』勇者セーズの姿は消え、今に至るのだった。

＊＊＊

得意げに説明するバーミリアスの声に、
「よし、分かった。理解した」
和やかに朗らかにエリオスが塔を見上げる。
「分かってくれるだろ？　ハーレムは男のロマンだよな！　エリオスもやっとおれを理解してくれたか」
「そこを動くなよバーミリアス。ぼくがたたっ斬ってやる」
殺気を通り越して殺意を発するエリオスだ。こんなくだらない理由でセーズを女にされ、そのせいで自分だけ置いていかれた。心配してくれたセーズとレナの気持ちはありがたいが、バーミリアスには腹が立つ。
「こうなるだろうからアナタを置いてきたのだけれど」
意味なかったわねとレナは苦笑した。
「ええ！？　なんでだ？　いいじゃん、ハーレム」
本気で分かっていないらしいバーミリアスの声に、セーズが可愛らしい声を張り上げた。
「僕は男だっ！」
「だから女にしたんだろー？　大変だったんだぞ、その魔法練り上げるの！」
いらん苦労をする男である。だが、その実力は本物だ。男の身体を女に変化させるなど、生半可な魔力と知識で出来るわけがないのだから。

「アホでしょ、アナタ」
レナがあきれる背後で、イズが真っ白になっていた。
セーナ＝セーズ。
つまり、男。
しかも、世界を救った勇者で、勇者の妹、セーナという少女は最初から存在しておらず、レナが咄嗟にエリオスをごまかすためについた嘘。
初対面でプロポーズしたイズを変態扱いするわけである。彼に自分が女の身体であるという自覚は薄いのだ。
［エリオスもおれのハーレムに入るか？　女にしてやるぞ。お前美形だし、はべらすのも楽しそうだ。あ、レナフレアも可愛いし、入れてやるぞ］
懲りてないバーミリアス。エリオスが低く唸る。
「……セーズ、レナ、止めるなよ。ヤツはぼくが斬る」
うふふ、とレナフレアも笑った。
「ねえ、セーズ？　エリオスを止めないほうがいい気がしてきたわ、あたしも」
「だ、だめだよ！　バーミリアス！　何でこんなことしたんだ！？」
［だから、ハーレム作るためだって。まだ女の子一人もいないけどなー。やっと塔の内装も完成したし、そろそろ集めようと思って――］
バーミリアスの声が終わらないうちに、エリオスが塔の扉を斬り裂いた。
［あ！　なにすんだエリオス！？］
バーミリアスの抗議の声を聞き流し、
「セーズ、残念だがあきらめろ。ぼくらの知るバーミリアスはもういない」
ぽんとセーズの肩を叩いて、エリオスはにこやかに言ってのけた。もともとよく知らない（興味のなかった）仲間を、あっさりばっさりと切り捨てる覚悟が瞬間で完成したらしい。

本気だ。それが分かってセーズはゲンナリした。
「バーミリアス……ほんとになんでこんなことしたんだよ……僕を元に戻してくれ」
［えー、やだー］
「……エリオス、殴るくらいならしてもいいよ。僕も殴るから」
「いっそ止めを刺そう、セーズ。ヤツは悪だ」
少年二人（片方は外見少女）は顔を見合わせて言い合った。セーズは苦笑、エリオスは真顔なところが違うが。
「ま、殴るくらいはしてもいいでしょうね。悪ふざけが過ぎるわ」
［なにをぅ？　おれは本気だぞ、レナフレア！］
「なお悪いわよ……」
こんな男だったっけとレナは眉を寄せた。あまりよく覚えてはいないが、ここまでアホだっただろうか？ある意味、こんなに目立つような性格ではなかったような気がする。こんなにアホなら覚えていそうなものだが。
セーズを見ると、彼（彼女？）もなんだか納得がいかないような表情だ。一番バーミリアスの性格を把握しているはずの彼がそんな様子なのだから、やはりどこかおかしいのだろう。
「許せん……」
そのときだ。壊れていたイズがポツリと呟いたのは。
呟きを耳にしたほかの三人が振り返ると、イズはわなわなと震えていた。
「俺の純情を返せぇぇぇぇぇぇぇっ！！！」
叫んで彼は塔の中に駆け込んで行く。セーナがセーズだったということがよほどショックだったらしい。プロポーズまでしたのだから無理もないことだが……。
「……アホがもう一人いたわね……」
「ああ、そうだな」
「……行こうか」
それぞれに呟いて、三人も塔の中に入った。バーミリアスがイズ

に対して、お前はいらん！　帰れ！　とか叫んでいたが、どうでもいい。

とりあえず、これ以上バーミリアスがアホなことをしないように止めなくては。

セーズは息をついた。魔王を倒してやっと平和が来たというのに、自分たちは一体何をしているのか。ハーレムを作ると叫んでいる仲間を止める旅……考えるとちょっと悲しくなった。

それでも、自分のように姿を変えられるような人が出ては大変なので、バーミリアスを止めるつもりだ。

四章・往生際の悪いヒトたち・1（後書き）

そんなわけでした。アホです。気苦労の耐えない少年勇者セーズ君に同情（作者が言う）

四章・往生際の悪いヒトたち・2

塔の中は極彩色だった。目がチカチカするような内装だ。あちこちから薄く透き通った布が垂れており、雰囲気がすでにいかがわしい。これで何かの香でも焚かれていたら、まさしくハーレムのイメージそのものだろう。

あいにくとバーミリアスが言っていた通り、女の子はおらず、男が十人近くたむろしていた。見た感じではとてもガラが悪い。飛び込んでいったイズと睨み合っている。

「誰だ？　バーミリアスの知り合いか」

エリオスが言うと、男たちは口々に言った。

「ダンナの夢を邪魔するな！　おれたちもおこぼれに預かるんだ！！」

「そうだ！　もうあんな……あんな悪夢は見たくない……せめて英雄のおこぼれくらい貰ったっていいだろう！！」

ハーレムに協力している仲間らしい。バーミリアスは力仕事には向いていないから、この内装をしたのは彼らだろうか。

彼らをどこかで見たようなと、セーズは首をひねった。この雰囲気、そして今にも泣き出しそうな人たち。

「あ、ビオラさんといた人たちに似てる気がする」

ビオラと兄貴。破壊力抜群のあのカップルに泣きながら苦しんでいた山賊。彼らに似ている。呟いたセーズに、男たちはびくりとした。

「な、なんでアネサンの名前を！？」

「え」

「あら、本当に関係者？」

「し、知っているならおれたちが何でここにいるかも分かるだろう！？」

どうやら、精神破壊兵器（あのカップル）から逃げ出した山賊らしい。耐えかねて

逃げ出し、そこでバーミリアスに共感したのか。イヤな縁である。
「分かるけどダメですよ、こんなことしてるバーミリアスの仲間に入っちゃ」
「アナタたちの残っていたお仲間も今は解放されて、近くの村でまじめに働いているのよ？　アナタたちもまじめに働きなさいな」
「う、うるさい！　ダンナは俺たちが守る！！」
彼らは聞く耳を持たず、山刀を構えた。おとなしく通す気はないらしい。
「よーし、そのままかかってこいよー、ふふふふふ」
イズが不穏に笑って背の大剣を抜いた。かなりフラストレーションが溜まっているようだ。獣のように吼(ほ)えて走っていく。
「……どうする？」
エリオスが指をさす。手助けするかと訊いているのだ。おそらくイズ一人では少々荷が重い。彼の実力の問題ではなくて、相手の数が少し多いからだ。
セーズやエリオスならば瞬時に蹴散らすことが出来る相手でしかないが。
「うーん、魔法の一発でもって思ったけど、イズさんもう走って行っちゃったからなぁ。危なくなる前に加勢しよう」
魔法での援護はイズも巻き込みかねない。危なくなりそうだったらセーズも走っていくつもりだ。すぐに援護できる位置にまで移動して、おのおの武器に手をかけ、いつでも行動できるようにしておく。
そのあたりはさすがに歴戦の勇者パーティー、戸惑いや乱れがない。本来ならレナと同じくらいの位置にバーミリアスがいたのだが。
セーズが覚えているバーミリアスと今の彼は、大分様子が違う。前は魔法の研究に没頭することが多く、魔王を倒してから女性のほうに行ったのか。それにしてもいきなり問答無用でセーズを女性に変化させることはないだろう。

しかも理由が『ハーレム作りたいから超美形のお前も入れ。でも俺ホモじゃないしー、じゃ、お前が女になれば解決ー、イエーイ』……である。

バーミリアスが分からない。セーズは正直にそう思った。

こんな人じゃなかったはずなのに。それとも気がついていなかっただけで元々はこういう人間だったのか。

……悩むセーズの目の前で、イズが大暴れしていた。

彼をここまで連れてきたのはちょっと可哀想だったか。でも、これ以上熱烈にアタックされても困るので、現実を見てもらうことにしたのだった。

いくら外見が少女でも、セーズは男である。男に求愛されるような趣味はない。

あきらめてください。気の毒に思いながらもセーズの答えは変わらない。バーミリアスに抱きつかれたときだって鳥肌が立って思わずはたき倒したくらいだ。

男と結ばれるくらいならジルゼに弟子入りして世捨て人の隠者になる。キッパリそこまで決意してから、セーズは剣を抜いた。そろそろイズが危なくなってきたのだ。

走りこむ。イズはちょうど一人の剣を受け、もう一人に背中を狙われていた。

身軽に斬り込んだセーズはひとつ剣を振るい、イズの背中を狙っていた男の武器を斬りおとした。熱したナイフでバターを切るかのように、硬いはずの山刀はさっくりと刃を斬りおとされた。男が目を丸くする。どう見ても華奢な少女のセーズに、そこまで出来るとは考えていなかったようだ。

セーズはちょっと苦笑して、柄の部分でもと山賊を一撃、昏倒させた。魔王を倒した勇者が、ジルゼから授かった武器で人間を斬るのは、相手にとってかなり気の毒だろう。

そこまでいじめるつもりもない。暴れるイズを上手にフォローしながらセーズは難なく山賊を昏倒させていった。エリオスとレナが

手助けすることもないくらいだ。
セーズも本気ではない。このくらいの相手に彼が本気を出すのはそれこそ気の毒だ。
最後の男をイズが斬り倒して、戦闘は終結した。八つ当たりが済んでイズはすっきりした顔をしている。
「……これで死んだら、この人たち可哀想よね、いくらなんでも」
レナは呟き、一応倒れている男たちの様子を見る。セーズが殴った男たちは問題ない。イズが切り倒した連中は、かろうじてまだ息をしている。ほぼ八つ当たりだったため、幸い急所を狙うという考えには至らなかったようだ。
レナは男たちを癒す前に、エリオスに目配せし、眠りの魔法を男たちにかけてもらう。それから、男たちが動けるくらいにはなるように軽い癒しの魔法をかけた。起きているときに癒すと背後から襲われかねないからだ。
これでこのもと山賊たちは夜までは起きないだろう。さすがにそのころにはバーミリアスとの決着がついているだろうし、彼らの身も安全のはずだ。
行こうかと、セーズが声をかけ、四人は透き通った布の奥にある階段に目を向けた。
それほど高くはないとはいえ塔だ、登るのは骨だろう。おまけに高レベルの魔導師の塔だ、どんな仕掛けがあるか分からない。
「イズさん、真ん中歩いてください」
「へ、なんで」
「バーミリアスが何か仕掛けているかもしれません。危ないですから」
階段の上からバーミリアスに魔法を一発放たれただけで、イズはあっさりこの世から別れを告げられるだろう。以前依頼を受けて来たときは入り口だけで、内部にまで入らなかったのだ。したがって塔の中の様子は分からない。案内が出来るのは塔に入るまでなのだ。中では役立たずなのである。

「お前は来るなとか言っていたしな。前を歩くと死ぬ可能性が高いぞ」
「エリオスはしんがりを。何か感じたらすぐ伝えてほしい」
「分かった」
テキパキとしたセーズの指示に、逆らう間もない。気がつくとイズはレナの隣を歩いていた。前には少女となった勇者の背中。困ったことについていくのに違和感がない。
間違いなく彼女は人々を希望に導いた勇者なのだ。今となってはイズにも納得できる。
が、感情とは別である。結婚まで考えた少女が、男。しかも世界を救った勇者。
世界最強の存在。人々の希望の礎。
高嶺の花。そういわれたことを思い出す。でも中身は男。
「……」
静かに泣くしかないイズだった。
「現実って厳しいでしょ」
レナが横から囁いてくる。半ば以上が笑っているような声だ。事情を知っている彼女からしてみれば、さぞイズやエリオスの態度は面白かったに違いない。最初にあったとき爆笑されたのは、そういうことだったのかと今更ながらに思う。
「……言ってくれれば……」
「おほほほ、素直に信じた？　本当に？」
「う」
呻いてイズは黙った。何も言えない。前を行く華奢で、でも世界最強の背中についていくだけだ。

四章・往生際の悪いヒトたち・2（後書き）

男前勇者セーズと『セーナ』に未練たっぷりのイズ。あきらめろ、イズ。実らないから（笑）

四章・往生際の悪いヒトたち・3

螺旋のような階段を上がって、二階につく。すぐに部屋に入るのかと思いきや、セーズはまず用心深く踊り場から室内を覗き込む。

……振り返った彼は苦笑していた。

「……中でミスリルゴーレムが五匹待機してる」

ぶふぅっ！　イズが吹き出した。魔法生物のゴーレムの中でも一番固いやつらしいというくらいの知識はあった。一番硬いということは、一番強いということでもあり、なまなかな魔法では作り出せないものだということでもある。イズなど話にしか聞いたことがないシロモノだ。それは彼が遭遇した魔物や怪物の中でかつてないくらいの強敵だということ。

それが、よりにもよって五匹。

「た、倒せるのか！？」

「面倒ね」

レナが言う。

「面倒だな」

エリオスが頷く。

魔王を倒したパーティーですら苦戦するような強敵なのかと、イズはゾッとしたが、

「じゃ、さっさと片付けよう。あ、耳塞いだほうがいいですよ、イズさん」

セーズはこともなげに呪文を唱えだした。

［源（みなもと）よ、万象（ばんしょう）の力よ、揺らぐ力もまた力、留まり集い、また散るがいい！」

キィンッ！！　空気に鋭い亀裂が入るような音がした。

それから、轟音。耳を塞いでおいたほうがいいとの忠告に従っていても、まだとんでもない音に聞こえたほどだ。びりびりと衝撃が肌を伝わってくる。

一体どれほどの魔法なのか、イズには見当もつかない。
振動が収まってから、セーズはまた室内を覗いた。
「ん、大丈夫。行こう」
歩いていく足取りには警戒が見えない。ついていったイズの視界に、室内の様子が入ってくる。ゴーレムがいたというはずの室内には、大量の魔法鉱物（ミスリル）が転がっていた。
一抱えでしばらく遊んで暮らせるだろう。宝の山である。ゴーレムの姿はどこにも見当たらない。この大量のミスリルは――五匹のゴーレムの残骸なのだ。
セーズの魔法一発で、最強のゴーレムは粉々。
「……倒せないんじゃなかったのか？　すごく苦戦するかと思ったんだが」
イズがレナとエリオスを見ると、二人は眉を寄せた。
「は？　面倒だって言っただけだろう。倒せないなんて誰が言った」
「ディザスターに比べたらミスリルゴーレムなんて雑魚（ざこ）よ？」
……何度も言うが、魔王を倒したパーティーである。最後の最後の強敵に比べたら、その辺で知られているような魔物や怪物はまさしく雑魚だろう。
「魔王の城にはこんなのごろごろしていたし。ねぇ？」
「そうだったな。あれも面倒だった。数が多くて」
レベルが違いすぎる。肩を落とすしかないイズだ。
「エリオス」
室内の様子を観察していたセーズがエリオスを呼んだ。すぐにエリオスは彼に駆け寄る。
「なんだ？」
「あのさ、確かミスリルって魔法の増幅できただろ？」
「ああ、ある程度の魔法なら吸収・増幅する性質があると本で読んだことがある」
いかにミスリル製でも、セーズが放った魔法は強力なために、吸収どころではなく爆散したが。

エリオスの知識の後押しを受けて、セーズは決心がついたようだ。身振り手振りでエリオスに何を考えていたか伝える。
「こういう風にこう置いて、方陣組んだら……」
「ああ、分かった！　なるほどな。それは手間が省ける。やろう」
エリオスはすぐに理解してくれたので、次にレナを呼ぶ。
「レナー、ちょっといい？」
「はぁい。何を思いついたの？」
「このまま上がっていくのはちょっと危ないと思うんだ。かなり高い塔だし、バーミリアスのところに行く前に体力が尽きてしまいそうな気がする。なんだかこの調子で各階にガーディアンでもいそうな感じだから」
一階一階に守護者がいる可能性がある。高レベルの魔導師であるバーミリアスならいくらでも魔法生物を生み出すことは可能で、下手をすると異界――魔底（まてい）から怪物を呼び出している可能性もあった。仲間の彼の力はセーズが一番よく知っている。
バーミリアスほどの高レベル魔導師になると、ある意味なんでもアリになってくるのだ。
「そうね、あいつ研究バカだったし……ここぞとばかりに召喚しているかも」
一階上るたびに強敵と戦う総当たり戦などさすがにゴメンだ。この調子で十階も上がっていったら途中で力尽きるのは簡単に予想できる。各階に一種類とは限らないし、空間を変に歪めている可能性もある。この調子ではバーミリアスが最上階にいるのはまず間違いないだろう。　複雑な迷路でも作られていたら、彼の顔を見る前にくたびれる。
バーミリアスもそれを期待しているだろう。彼とて仲間と戦うのは冗談でも望んでいないはず。ミスリルゴーレム程度でセーズたちを止められるわけがないと、バーミリアスだって理解しているのだから。
途中で帰ってくれという意味をこめて、各階に守護者を配置して

いるのだろう。
「だからね、ちょっとズルしようと思う」
いたずらっぽくセーズは笑った。

最上階で、バーミリアスはわくわくと手を合わせていた。
懐かしい仲間たちがやってくる。顔を見るのは嬉しい。セーズは超美形だし、レナは可愛い。エリオスは男だが、セーズにやったように女にすれば何も問題はない。彼も美少年だから、さぞ美しい少女になるだろう。
願っていたハーレムは思った以上に好スタートになりそうだ。幸先がいい。しかも気心の知れた仲間だ。なお嬉しい。
エリオスは何故か怒っているようだから、女にするのは難しいかもしれないが、ここまで来るだけで疲れきってしまうだろう。その隙を突いて女にしてしまえばいい。
疲れきってしまった彼らに抵抗は出来ない。なんだか知らない男も居たが、あれは美形ではなかったのでいらない。ごみ捨て場から落とせばいい。下にい、魔底から召喚した怪物(めしつかい)がちゃんと河に流してくれるだろう。別に殺したりする気もないから、男への対処はそれで充分だ。
早く来てくれないかとバーミリアスはわくわくしている。各階に置いたしかけや怪物たちは仲間たちの足止めにもならないと分かっている。だが、疲れさせるには充分。
疲れきった状態なら、エリオスを女に出来るし、とくとくと『ハーレムはいいぞう』と、説得することも出来る。根気よく話せば、分かってくれるはずだ。
何故かバーミリアスはそう確信していた。本気で心の底から信じている。
自分のハーレムに、みんな喜んで入ってくれると。
「はー、早く来ないかなー。セーズもレナもエリオスも大事にする自信はあるぞ！」

言った瞬間、後頭部に何かがぶつかってバーミリアスはつんのめった。
「ぶっ殺す。いいな、セーズ？」
「ちょっと落ち着くんだ、エリオス。僕はバーミリアスに直接訊きたい事があるから」
セーズが苦笑してエリオスを止めた。エリオスはミスリルの塊を手にしている。さっきはそれを力一杯バーミリアスに投げつけたらしい。投げつけられた方はしゃがみこんで呻いていた。ミスリルの強度はかなり高いので、たんこぶが出来たのは間違いないだろう。
「バーミリアス？　大丈夫かい？」
「くぅう～、星が散ったぞ……」
涙目でバーミリアスは立ち上がった。その様子に威厳はない。特徴もない。みんなが言うとおり、ありふれた男だ。塔の中の最後のボスという感じはまるっきりなかった。
かつての仲間を見るなり彼は驚いてこう言ったせいもある。
「何でいる！？　早すぎるだろう！？　ここまで来るのに、ゴーレムとか倒して階段上ってきたら、楽勝で半日はかかるはずなのに！！」

来るのが早すぎると文句を言う最終ボス。ありえない。

バーミリアスが予想していた時間より遥かに早く、セーズたちは最上階に到着していた。
疲れている様子もない。
「階段上っていないもの」
ケロリとレナフレアに答えられ、バーミリアスはいぶかしげな表情だ。あっさりとエリオスが種明かしをする。
「二階にミスリルゴーレムがいたからな。ミスリルの特性を利用して、転移方陣をつくってここまで転移しただけの話だ。ぼくとセーズの二人なら可能なことだろう」

ラストボスまでのショートカット。反則的な裏技である。言われてバーミリアスは頭を抱えた。壊れたゴーレムの残骸を再利用されることなど、不覚にも考えていなかったのだ。
「何してんだよ！？　普通は正々堂々と正面から上ってくるものだ！！」
「いや、そんなこと断言されても。途中で疲れちゃうと思ったから」
至極当たり前にそう返すセーズに、バーミリアスは地団太を踏む。
「勇者って呼ばれているくせに手抜きするなよ！！」
「わけの分からないことを……大体、発端はお前がセーズを女にするなんてくだらない真似をするからだろうが！！」
「くだらなくないっ！　おれはハーレムを作るんだっ！」
「心底からくだらないことは置いておいて、どうしたのよ、バーミリアス？　アナタそんなに濃いキャラじゃないでしょう」
「薄いキャラって言うなぁぁぁあっ！！」
本人も影が薄いことは気にしているらしい。絶叫している。

「「だって薄いだろう」じゃない」

仲良く声を揃えるレナとエリオスだ。仲間ゆえに遠慮もない。
「うがぁあああぁぁっ！！」
バーミリアスは怒りの叫びを上げた。じたばたしている。
「……やっぱり変だ……」
彼を見ていたセーズが呟く。バーミリアスはこんな人間ではなかった。もっと落ち着いた性格をしていた。何かおかしい。違和感がある。どうしようもない、違和感。
それはあの日思いつめた様子のバーミリアスからも感じたものだった。あの時は、新しい魔法が上手くいかなくて悩んでいるのだろうかと軽く考えていたが、もしかして。
動揺してじたばたしているバーミリアスから感じるもの。
「……ディザスター？」

ボソッと言った言葉に、魔導師の身体は大きく反応した。
魔王の名。確かに倒したはずの、魔王。バーミリアスから感じるこのかすかな違和感は、ヤツのものに似ていないか？
ゆっくりとセーズは『星砕く刃』の柄に触れる。魔王に止めを刺した双剣に。
「バーミリアス、ディザスターに何をされた？」
魔王は滅びたはずだ。もう一度何かを為せるとは思えない。だが、人間の常識で量れない存在であることもまた事実だ。滅びる間際、ヤツがバーミリアスに何かしたのか。
最後の瞬間に直接ヤツに触れていたのはセーズだ。バーミリアスはいつもと変わらず後方から援護をしてくれていた。彼に何かされたという可能性は低く思えるが、今の反応を見ると……何も無かったとも思えない。危険性で言えば直接触れていたセーズのほうがずっと何かされる可能性が高かったと思うが、何故バーミリアスなのか。
「ふふふ……さすが勇者、か。ジルゼの加護を受けているだけのことはある」
声は別のところからした。バーミリアスとは違う場所に突然気配が現れる。
現れたものの姿を目にして、イズが口をパクパクさせる。とんでもない圧迫感に声が出ない。　普通の人間がまず目にしない存在がそこにいた。
異形。そうとしか言えない存在。
「ひさしぶりだ、人間共」
言う存在に、セーズたちは見覚えがあった。旅の中で、何度か戦った魔王の腹心――――、
「レゼルドドルク……！？」
白い体のあちこちに青い瞳が張り付き、腹部に真っ赤な口がある。体が人型なので不気味度はひとしおだ。
「生きていたのか！？　魔王が滅んだというのに、何故！？」

四章・往生際の悪いヒトたち・3（後書き）

黒幕登場！（今頃）

四章・往生際の悪いヒトたち・４

「ははは、そう簡単に滅んでたまるものか。魔王様の後はこのワタシが世界を支配する番だろう？」
一度見たら夢にうなされそうな容姿の魔物は、腹部の口をにんまりと笑わせた。
「察しの通りだ、彼にはワタシが呪いをかけた。人目に付かないことを悩んでいたのでね、仲間にすら意識されていない彼に誘いをかけるのは簡単だったよ？」
「うわ、そんなくだらないことで悩んでいたのか、バーミリアス。今更悩んでも遅すぎるだろうが」
「あげく、こんな変態魔物に呪われる隙を作ったなんて……バカじゃないの？」
言いたい放題の仲間である。異形の魔物に対してイズのような恐怖心は無いようだ。
「おい、感想はそれだけか？　ワタシが出てきたことに対して勇者のように反応は無いのか！？」
「相手にすればするだけ図に乗るだろう。セーズ、構うな、こんな小物」
エリオスは言いながら腰の剣を抜いた。特殊能力なのか、刃がぼんやりと光りだす。問答無用で片付けるつもりらしい。
「ちょ、ちょっと待て！　仲間の呪いを解いてほしくないのか！？」
「呪い？　これが？　アホになる呪い？」
「誰がアホだ！！」
首をかしげたレナに、バーミリアスが言い返す。どうも、呪いをかけられたせいでここまでおかしくなったようだが、何を考えてこんな呪いをかけたのか。
「ぬぐぅ、ワタシとてここまでアホになるとは予想もしていなかったわ！！　ワタシに絶対服従するよう呪いをかけたはずなのに、何

故だ！？」
　バーミリアスがこうなったのは、レゼルドドルクにも予想外の展開だったらしい。
「勇者を暗殺してこいと命じたはずなのに、やったことと言えば女にしただけだ！　それからも何度も殺して来いと言っているのにちっとも動きやしない！！　なんだハーレムって！！　ワタシはそんなこと命じてはいないんだ！！」
　呪いをかけた当事者の魔物のくせに、今にも泣き出しそうな勢いで嘆きまくっている。
「ふはははっ、魔物程度にいいように使われるおれではない！　開眼したおれは好きなように生きるんだ！！」
　そして胸を張るバーミリアス。
　どうやら、バーミリアスが呪われているのは確かのようである。ここまで人格が豹変したのはそのせいだ。
　が、それは呪いをかけたレゼルドドルクにも予想外の作用らしい。
　仲間であったバーミリアスに勇者セーズを殺させ、同じようにレナフレアやエリオスを始末し、その後ゆっくりと世界を支配しようとして――最初の段階でこけた。
　レゼルドドルク個体の戦闘力では魔王を倒したセーズには到底かなわない。だからバーミリアスを利用しようとした、そこまでは理解できた一行だ。
「で、何でこうなっているの？」
「知るか！！」
　魔物は絶叫した。こうなったのは本心から不満らしい。レゼルドドルクは絶対服従の呪いと言ったが、どう見てもバーミリアスが魔物に従っている様子はない。
　彼は好き勝手、自分勝手に行動している。それも呪いの作用でおかしい方向に走っているが、本人は真剣なのがまた困る。
「えーっと……レナ、とりあえず解呪を頼めるかな。呪いを解いたらバーミリアスも元に戻ると思うんだ」

とりあえず、正気に戻ってもらおう。セーズの提案に、いち早く反応したのは当の本人、バーミリアスだった。
「いやだ！　おれは美形だらけのハーレムを作ると決めたんだ！！　もう影が薄いなんて誰にも言わせないぞぉぉおお！！」
叫んで腕を振ると、彼がしていた首飾りが光った。それを見たレナがあわてて腕を突き出す。同時に室内に吹雪が吹き荒れた。レナの張った防御壁に、ヒトの頭よりも大きい氷の塊が勢いよくゴツゴツぶつかる。一発当たっただけで人間の頭など簡単に潰れるだろう。
「バーミリアス！！　このアホ！！」
叫んでエリオスは剣を振った。吹雪が真っ二つに裂けて消滅する。魔法を消すのがエリオスの剣の特殊能力らしい。
「当たったら死んだぞ！？　危ないだろう！！」
「お前らなら死なない！！　おれのハーレムを理解してくれるまで続けるぞ！！」
バーミリアスは胸を張って断言した。その胸元でまた首飾りが光る。
今度は岩の塊が空中に現れ降ってきた。どれもこれもやはり人間大で、当たれば即死するのは間違いない。防ぎながらレナが叫ぶ。
「アナタ一体何種類チャージしているのよ！？」
バーミリアスの首飾りもジルゼからの授かりものだ。あらかじめ呪文を唱えておけば、任意の瞬間に発動させることが出来る便利なもの。
「はっはっはっは、でーきーるーだーけー」
「いいぞ！　やってしまえ！！」
レゼルドドルクが嬉しそうに叫んでいる。次の瞬間には降ってきた岩にぶつかって吹き飛ばされていた。この魔物も結構な間抜けである。
「バーミリアス……」
ゲンナリとセーズが呟く。
仲間だったときはこの上もなく頼りになった人物とアイテムだっ

たが、敵に回るとこれ以上ないくらい厄介だ。ましてこちらは本気で攻撃できない。相手は魔物でもなんでもなく、ただ呪われてトチ狂っているだけなのだ。
バーミリアス本人に攻撃は出来ない。だが、彼に攻撃をやめる意思は見えない。
ならば。
セーズは腰の双剣に手をかけた。
「レゼルドドルク」
部屋の端っこで岩から身を隠すようにしている（情けない）魔物に声をかける。
「バーミリアスの呪いを解け」
しゃりん。涼やかな音を立てて、魔王を倒した勇者はその愛剣を引き抜く。
「ふ、ははは、そんな離れた位置で何をするつもりだ、勇者よ？」
レゼルドドルクは嘲笑した。セーズの位置から魔物までは、一番背の高いイズの歩幅でも三十歩はあるだろう。セーズが魔法を使っても、バーミリアスの魔法に潰されてしまい、意味はなさないはずだ。
バーミリアスもそれを分かっているから、セーズやエリオスが使えないような高位の魔法ばかりを使っている。走って近寄ろうにもレナの防御壁から出ることがどれだけ危険かは見れば分かることだ。
「次ぃっ！」
バーミリアスが叫び、楽しそうに次の魔法を発動させる。今度は真っ白い炎が吹き荒れた。当たれば人間の体でも瞬時に蒸発しそうだ。
その中へ、セーズは駆け出した。
「セーズ！？」
イズが驚く。だが、彼はすぐにセーズの後姿を見失った。炎に巻き込まれたのではない。
セーズの動きが早すぎて見失ったのだ。

彼がどこに行ったのか分かったのは、ドガ！　という音がしてそっちを見てからだ。
セーズはほとんど一瞬でレゼルドドルクのもとまで移動していた。剣の柄で魔物を殴りつけ、壁に叩きつけている。魔物が避難していたそこは、魔法の範囲外だ。
「！？」
どうやってあそこまで一瞬で、声を失うイズである。
「あっちはセーズに任せましょう。エリオスはこっち。あのバカを止めて頂戴」
「分かっている」
レナとエリオスはあわててもいない。セーズの実力は彼らが一番知っている。力や魔力よりも姑息に策を練るタイプのレゼルドドルクに、彼が負けるわけがない。
現にレゼルドドルクは殴られっぱなしだ。げすごすごすごす。セーズはこれでもかと言わんばかりに剣の柄で殴っている。バーミリアスの呪いがあるため、刃で切り裂くわけにはいかないからなのだろうが、はたから見ているとある種の拷問のようにしか見えない。
見ているイズが、いっそラクにしてやってくれと言いそうになるくらいだ。セーズの身体は華奢な女の子で、相手は魔物なのに。
がすがすがすごす、ごつんがっつん。
……イジメに見える。
止めなくていいのか迷うイズの前で、エリオスが何か唱えていた。魔法はバーミリアスには敵わないはずだが、エリオスは迷わず呪文を唱え、それから剣を構えた。
光を湛える剣先を、バーミリアスが行使している魔法に向かって振りぬく。
見えない刃が魔法を切り裂き、その瞬間にエリオスは自身が唱えていた魔法を放った。

風が空気の塊となってバーミリアスの全身を殴打する。
「のわ、げ、ぐえ」
カエルが潰されるような声を上げて、バーミリアスが倒れる。ひ弱な魔導師だ、一撃で充分である。倒れた隙を逃さず、エリオスはバーミリアスに走り寄り、彼の首から首飾りを剥ぎ取った。ついでに首の後ろを一撃して昏倒させておく。
「こっちは押さえたぞ、セーズ」
バーミリアスを踏んづけて、エリオスは報告する。べきべきに魔物を殴っていたセーズがようやく手を止めた。レゼルドドルクは床に落ちて動かない。
「そ、そこまでしなくても」
思わずイズが言うと、セーズは首を振った。
「効いていないんですよ、こいつには。死んだフリしているだけです」
「へ、そ、そうなの？」
「ええ、そうよ。こうやって姑息にコソコソやって、魔王の腹心までなんとか上り詰めたヤツなの」
何度か戦って、レゼルドドルクの特性や性格を把握しているセーズたちだ。
戦ってレゼルドドルクを打ち破るたびに、死んだフリとか命乞いとか、その他もろもろの手で上手く逃げられていた。
魔王が滅んで、こいつも滅ぶか魔底に戻るかしていると思っていたのに、これだ。
「さて、レゼルドドルク？　もうその手が通用しないことくらい理解していると思うけど、もう一度訊こう。バーミリアスの呪いを解け」
……しーん。返事はない。
死んだんじゃないか。イズはそう思った。魔王が滅んで魔物は力を失った。だからこの魔物もきっと以前のような力はないのだ。やはり死んだのではないか、と。

甘かった。
「ウ！？」
身体に異変を感じたのはその瞬間だ。体が動かない。頭の中に声が響く。
『自分のものにしたいだろう？　奪え！』
視線の先にはセーズ。今は美しい少女がいる。プロポーズまでした、イズの理想の女の子。だが、彼は男で、今は体が女の子なだけだ。
『ヤツが戻ることはない。奪え！』
声に頭がぼうっとして、イズはぼんやりと背の大剣に手を伸ばした。
『自分だけのものにしろ、独り占めしろ、誰にも渡すな――殺してでも！』
引き込まれるように剣を抜いた。迷わずに振る。
「！」
セーズには届かない。イズよりも遥かに強い彼はあっさりと身をかわしてしまう。距離が離れたその隙に、レゼルドドルクは起き上がり、天井近くに逃げた。
「ははは！　意思の弱い奴を連れて歩くとはお笑いだ、人間どもよ！　油断したな！」
哄笑する魔物に、エリオスが拾い上げた岩を投げつけた。
「もぎゅ！？」
変な悲鳴を上げる魔物を、魔法で追撃する。
［烈炎よ！　神炎よ！］
叫んで剣を振る。剣先から炎が噴出した。レゼルドドルクはかわしようもなく、炎に包まれた。この程度の炎はすぐに消せると魔物は笑う。
「ははは！　ぬるい炎だ！　これしきでこのワタシを滅ぼせると」
［包み離すな！］
キッパリと言い放ち、エリオスは魔物から視線を離した。これで

延々と燃え続ける炎を相手にレゼルドドルクは逃げられない。床に落ちてじたばたしている。多少の魔力で消えるようなシロモノを、魔王相手に戦っていた連中が魔物相手に放つわけがないのだ。
人間を舐めすぎである。まして今レゼルドドルクが相手にしているのは、魔王を滅ぼしたパーティーなのだから。
「レナ、正気に戻せる？」
うつろな瞳でブンブン剣を振ってくるイズからひょいひょい身をかわしながら、セーズは困った顔をしている。ここまであっさりイズが洗脳されるとは思わなかった。
「殴っちゃえば？　アレみたいに」
のたうちまわっているレゼルドドルクを指してレナが言う。あきれ返った口調だった。
守るだのなんだの調子のいいことを言っておきながら、あっさりと魔物に操られてしまっている。心をしっかりともっていればこの程度はなんなく脱することが出来るはずだ。
「……いや、僕が殴るとイズさん死にそうだし……穏便に止めてよ」

四章・往生際の悪いヒトたち・４（後書き）

えー、最強なヒトタチなので、このくらいではうろたえておりません。哀れなのはイズですな（笑）

四章・往生際の悪いヒトたち・5

ため息をついてレナはイズを指差した。
［蕩(とろ)ける紅、解(ほど)ける紫］
彼女の指先から発せられた二色の光がイズを包む。その光が飛び散った後、イズはきょとんとして立っていた。自分が剣を握っていることに気がついて、目を丸くしている。
「あっさりと洗脳されたんだ。未熟者」
エリオスの冷たい声に、状況が分かったらしく、イズは青くなった。
「す、すまん！」
「いえ、いいですよ、大事には至らなかったので」
セーズはパタパタと手を振った。実際イズに向かってこられても、ちっともあわてていなかった。経験と技量の差である。若くてもセーズの強さはイズとは段違いなのだ。
「け、怪我しなかったか！？」
「させていたら今頃この世にはいないわよ、アナタ」
うふふ、とレナフレア。
「セーズがお前程度に怪我をさせられるわけがないだろう。うぬぼれるな」
エリオスはにべもない。
「してませんから、大丈夫ですよ、イズさん」
暖かい反応を返してくれるのはセーズだけだ。なんで男なんだろうとイズは少し悲しくなった。これで本当に女の子だったら。
残念に思いながら剣をしまう。セーズはイズが何を考えているかも知らずに、のたうちまわっている魔物のほうに目をやった。炎を浴びた直後よりはかなり暴れっぷりが弱くなってきている。そろそろ力尽きそうなのかもしれない。
「エリオス、これ、いつまで続くか指定して練ったのかい？」

「いや……そういえばしてないな。こいつが焼き尽くされるまで止まらない」
エリオスはあっさりそう答えた。とりあえずレゼルドドルクの顔をもう何度も見るのがイヤだったので、抹殺するつもりで練った魔法だ。
「解除できるけど、するか？　しても多分ろくなことにはならないぞ」
何せ相手は魔物である。人間の常識では動いていない。ここでまたこいつの逃走を許せば、次も確実にセーズたちの命を狙ってくるだろう。
この世界を牛耳るという野望があるのなら、勇者と呼ばれる人間は真っ先に邪魔になるのだから。
「でも、バーミリアスの呪いを解いてもらわないと、僕も男に戻れないだろ？」
「ああ、そうか、そうだな」
バーミリアスのあの暴走っぷりから考えて、正気に戻らない限りセーズを男には戻してくれないだろうという予想はついた。バーミリアスが昏倒している今なら、レナの解呪で元に戻るだろうとも思うが、ややこしい条件があるなら、呪いをかけたものが解くほうが確実だ。
「仕方ないか、でもその前に……レナ」
「はいはい。分かっているわ」
このまま魔法を解除しても、レゼルドドルクは逃げようとするだろう。逃げることには卑劣に長けている魔物だ。
［束縛の黄、苛（さいな）む蒼］
炎の中でぴくぴくしている魔物に二色の光がまとわりついた。光り輝く縄となって魔物を束縛する。それを目で確認してから、エリオスは何事かを呟き、炎を消した。
レゼルドドルクは動けない。黄色い光は身体を麻痺させ、青い光は魔力を封じてしまっている。

ほどよく焦げている魔物は弱々しく呻いた。今にも消えてしまいそうにも見える。
「うぅ……慈悲があるなら見逃してくれ……もう二度と人間の目の前に現れないと誓うから……」
よろよろとそう言い、許しを請う。ニコリともせずにエリオスが言い返した。
「確か三度目に遭ったときもそう言ったな。四度目のときに後ろから襲ってきたが」
「うぅ……もう二度と悪いことはしない……」
ふぅ、と息をついてレナが額を押さえ、呟く。
「最初に遭ったときそう言ってセーズに許してもらっていたわよね？　二回目のときには忘れたと叫んで襲ってきたけれど」
「うぅ……そこの優しそうな人間よ、こいつらを説得してくれないか……ワタシは魔底に戻ってこの世界からは出て行くから……」
イズに対してそう話しかける魔物に、エリオスは冷たく言葉を投げかける。
「四回目の奇襲が失敗したときにそう言って、五回目のときに一度戻ったから約束は果たしたと言って襲ってきたよな。ごろごろ配下を連れて、得意げに」
「ちなみに二回目は死んだフリして逃げたわよね」
五回目はやられている配下を見捨てて逃げ、そして、今回が六回目だ。
「うぅ……慈悲はないのか貴様ら！？」
「アナタに対してはもうないわ。品切れよ」
「セーズに毎回許してもらったり逃げたりしていて……こりろ！少しは！　五回も逃げておけば充分だろう！」
レナとエリオスはキッパリと言い切り、セーズは苦い顔だ。五回も見逃したり、逃げたりしているのに、まだこりないレゼルドドルクにあきれている。
「……バーミリアスの呪いを解いてくれるのなら、見逃してあげる

よ」
「セーズ！」
エリオスが顔をしかめる。
「ただし、次は許さない。もう一度こんなことをしたら、次は滅ぼすから。この『星砕く刃』にかけて」
セーズはレゼルドドルクの目の前に刃を突き刺した。ジルゼから授かった剣は固いはずの床をすんなりと貫く。一体どれほどの力を内包しているのか。これに貫かれたら、レゼルドドルクなどひとたまりもないだろう。
「ディザスターを滅ぼした剣……自分の身で味わいたくはないだろう？」
「ぬ、が……うぬぅ……わ、分かった」
セーズの本気を感じ取り、魔物は呻いて了承した。滅びるよりは魔底に戻って悪いことを企てたほうがいい。
「あと、妙な真似をしても滅ぼすから。こっちにはレナがいる。君じゃなくても解呪は可能だからね」
先ほどのようにイズを操られても困る。セーズは先に釘を刺した。エリオスやレナはそもそも操られるほど心が弱くないので心配は要らない。
「うぐ……分かったと言うのに……ええい、解いてやるから魔力の拘束を解いてくれ！　このままでは何もできん！」
さすがに逃げる気はなくなったようだ。この魔物が逃げるより、セーズが魔物を滅ぼすほうが遥かに早いだろうとは誰もが予想できる。
レナは仕方なく魔力のほうの拘束だけを解いた。体の麻痺はまだ解かない。飛び掛ってこられてもイヤだからだ。反射で叩き落して、その一撃でコイツを滅ぼしてしまったら目も当てられない。
ぶつくさとレゼルドドルクは何かを呟いた。魔物の言語だろうか。人間には聞き取れない。長く、意味の分からない言葉が室内を流れていく。静かに言葉が形になって、気絶しているバーミリアスを包

んでいく。魔物の力の具現だ。人間にはわけの分からない、独自の形――多分文字だろうものがバーミリアスの身体に張り付いた。

ぼふん。

「……おや？」

煙となって霧散した力に、レゼルドドルクは不審げな声を上げた。真っ先に反応したのはセーズだ。

「『おや』って？　まさか失敗したのか？　バーミリアスに何が起こったんだ！？」

じゃきっと剣を突きつけて真剣に叫ぶ。間近の銀の輝きに恐れおののきながら、レゼルドドルクはもう一度同じように言葉を流した。

ぼはん。

やはり、霧散する。

「……レゼルドドルク？」

「ちちちち、ちょっと待て！！　待て！！　その男を起こせ、何かおかしいっ！！」

「おかしいって、何が？」

返答次第では滅ぼす。明確に目がそう語っているセーズだ。大切な仲間のことなので彼は本気である。

「解けないのだ！　ワタシがかけた呪いなのに、何故解けない！？　その男が何か自分でしたのではないのか！？　いろいろ魔法をいじくるのが得意な男なのだろう！！」

「エリオス、バーミリアスを起こしてくれ」

「分かった」

セーズの言葉には素直に従うエリオスが、バーミリアスに括を入れた。呻いて呪われている魔導師は目を開ける。

「いでで……アチコチ痛い……ひどいなエリオス、仲間だろう？

手加減しろよ……」
「その仲間に思い切り高レベル魔法をぶつけてきたのは誰だ？」
忌々しげに答えて、エリオスはバーミリアスの首を無理矢理セーズのほうに向けた。
グキっという音は当然のように無視している。
「いてぇ！　エリオス、いてぇって！　……おお、セーズ！　ハーレムに入ってくれる気になったか？」
「ならないって……それよりバーミリアス、こいつにかけられた呪いに何かした？」
「あ、改良した」
即座に明確な返事が返ってきた。セーズを始めとする面々がガクリと肩を落とす。どれをどのくらい改良したのかは分からないが、それではレゼルドドルクの力で解呪できるはずもない。実力的には遥かに上のバーミリアスが呪いの上書きをしてしまって、別のものに変えてしまっているのだ。
「だってさー、そいつセーズを殺せって強制力かけてくるから。イヤだと思って、呪いかけられてから速攻で改良した！」
胸を張るバーミリアス。それでこういうハーレム馬鹿になってしまったらしい。絶対服従の呪いに負けなかったのはすごいが、より性質が悪くなってどうするのだ。
「呪いって分かっていたならどうしてあたしのところに来ないのよ！？　穏便に解呪できたのに！！」
すぐ近くに専門家――聖導師であるレナがいたのに何故自力でややこしいことをしたのか。
「いや、自力でなんとかできるかなと。ほら、おれ、ジルゼに憧れているから。聖も魔も全ての魔法が使える存在なんてジルゼだけだろう？　おれもそうなりたいんだ！」
「うん……それは知っていたけどさ……なにも一人で実行しなくても……しかも魔物にかけられた呪いで実験しなくてもいいだろ……」
セーズは頭を抱えてしまった。彼はバーミリアスともまともに仲

間付き合いをしていたので、バーミリアスが魔法の研究に意気込んでいるわけを知っていた。ほかの仲間もバーミリアスが研究熱心なのは知っている。
彼が開発した魔法にはずいぶん助けられたからだ。
が。
「この研究馬鹿……」
「……アホだな」
セーズと同じように頭を抱えるレナとエリオスである。フォローのしようがない。
「おい、ワタシはどうなる？　もはやワタシにも解呪はできんそ。別物になっているからな。貴様ら自分たちでどうにかしろ」
「あぁ……帰っていいよ。でももう悪さはしないように」
ぐったりと言いながら、セーズは釘を刺すことも忘れない。レナが開放すると、レゼルドドルクはそそくさと宙に消えた。これで懲りたかどうかは分からないが、懲りて欲しいものである。
「レナ、解呪できるかな？」
「やってみるけど……難しそうよ。魔物の力とバーミリアスの魔力が変な風に混ざっているようだから……下手をするとジルゼ様でなければ無理かもね」
言いながらもレナはバーミリアスを呪いから開放しようと試みる。
［開放の喜びを、悲しみの修復を！］
ばきん。枝が折れるような鋭い音がして、集まりかけた光が飛び散る。普通、こんな風にはならない。
「……ダメみたいね」
セーズにかけられた女体化の魔法を解呪しようとしたときと似たような現象だ。
「うわぁ……どうしよう。ねぇ、バーミリアス」
「ん？」
微妙に魔物の気配を漂わせているバーミリアスだ。それでも仲間には敵意を発してはいない。さっき攻撃してきたのも、ほとんどシ

ャレのようなものだったらしい。もっともあんな勢いで攻撃されたら、一般人なら即死しているだろうが。
「これ、解けないのか？　どういじってこうなったんだ？」
「いや、おれにもよく分からん。何度かいじってこうなったからなー、まだおれには聖魔法を扱うのは無理だったらしい」
いろいろと変化してしまっていて、もはや原形をとどめていない呪いのようだ。
「……ちょっと、バーミリアス。セーズの魔法は解けるの？　あれを解呪しようとしたときもこんな感じではじかれたのだけれど」
嫌な予感を感じてレナが問う。
「いや、解けるよ？　解かないけど」
さっくりとバーミリアスは言い返す。その首をエリオスがねじった。
「いだだだ！！　何すんだエリオス！？」
「戻せ」
「やだー、いでででででっ！！」
「じゃあぼくが戻すから方法を言え」
「い、いでででで、だだだだだっ！！」
ごきごきと首をねじねじされて、バーミリアスは悲鳴を上げた。エリオスは彼が否を言うことを許さない。応と言うまでねじねじする気満々だ。
「わ、分かった、言う、言う！セーズを男に戻す方法は――」
痛みのあまり涙目で、バーミリアスはこう告げた。
「おれを殺すことだ」

四章・往生際の悪いヒトたち・5（後書き）

次回で完結！　オチに期待はしないでください（オイコラ）

終・運命なんて認めない

崩れ行く塔を目の前に、勇者は重く息をつく。魔王と戦う前でもここまで気が重くなったことはなかった。頼もしい仲間がいたからだ。

何より頼りになる仲間がいたからだ。そのうちの二人は今も勇者の横にいる。

何よりも誰よりも信頼していた仲間だったのに。

「あぁぁあああっ！！　本当に崩すことないだろーっ！？　おれのハーレムぅぅぅぅ！！」

……背後でうるさいバーミリアスはイズに押さえ込まれている。

「うるさいよ、バーミリアス」

むっかりと不機嫌そうな表所でセーズは振り返った。その身体は女性のままだ。

「ハーレムなんて馬鹿なこと許しません！」

「なんだよー、可愛がるって言ってんのにー、あ、ヤキモチか？セーズ」

「……セーズ、やはり止めを刺して男に戻ったほうがいいんじゃないか？」

エリオスが憮然と言う。セーズが男に戻るためには、バーミリアスを殺すしかない。

バーミリアスにそう言われた一行は唖然とした。よりにもよってこの男、自分の命を触媒にセーズを女に変えたのだ。

セーズの性格をよく知った上で、彼を二度と男に戻さないために効果的な方法を使った。

仲間の命を奪ってもとの姿に戻れるようなセーズではない。

「できるわけないだろ、仲間なんだ」

バーミリアスを殺すことなど出来ないと、セーズは苦々しく答える。

「わはははは、おれの作戦勝ちだなー」
からからと笑うバーミリアスは、剣の柄に手をかけているエリオスに睨まれて笑顔のまま黙り込んだ。解呪の方法を聞くなりバーミリアスを手にかけようとしたエリオスだ。
刺激したら本当に殺されかねない。
「バーミリアス……アナタ本当にアホになったわね。手がつけられないくらい」
レナフレアもゲンナリしている。まさかこんな方法を取るとは思わなかった。心底からバーミリアスはアホになったようだ。ここまで来るとさすがに影が薄いとは言えないが、立派に変態だろう。しかも魔法の知識はそのままのため、アホを実行する手段まであるのだ。
放っておいたら本当にハーレムを作ってしまうだろう。男を女に変え、女をどこかから攫ってきてでも。
そんなアホな真似は仲間としてさせられない。
と、言うわけで、バーミリアスを強制連行し、眠りこけていたもと山賊たちを担ぎ出してから、塔を破壊した一行だ。
イズに押さえ込まれてバーミリアスは悔しそうに崩れた塔を眺めている。
「あー、せっかく作ったのに……半月掛かったんだぞー、いろいろ召喚してこきつかってやっと建てたのにー」
これだけの塔をたった半月で完成させた手腕はすごいが、目的がすごくない。
いや、ある意味ではすごいのだろうが、感心してはいけないような気がする。
「正気に戻ってから言ってよ……」
ため息をついてからセーズが呟く。自分だけでなく、バーミリアスの呪いも解かなくては。
まさか彼が魔物に呪われているとは全く予想していなかったので、驚いた。少し考えたら気がついたかもしれないが、女に変えられて

動転していたせいもあり、そこまで考えが至らなかった。
まぁ、ディザスターによる呪いではなくてまだ良かったかもしれない。魔王に呪われたのなら、こんな些細なことにはなっていないだろうから。
「なぁ、これからどうするんだ？」
ぐすんと鼻をすするバーミリアスを抑えながら、イズが問う。
バーミリアスの呪いも、セーズにかけられた魔法も、高レベルの聖導師・レナフレアでさえ解呪できないものだという。
ならば、この世界のどの聖導師でも解呪はできまい。セーズにかけられた魔法はバーミリアスを殺せば解けるが、まずそれは出来ない。バーミリアスにかけられた呪いは変な風に変化してしまっており、普通の方法では解けない。
「セーズ、ずっと女で生きるのか？」
「いやです」
ちょっと期待してそう問いかけたイズに、セーズは即答した。
「僕は男ですから、女の子のままで生きるつもりはありません」
「そうね、女の子になるなら改名しなくちゃならないし。うふふ、セーナちゃん？」
『セーズ』は男名前だ。女として生きるのならやはり『セレスティータ』だろうかとレナはにんまり。セーズはゲンナリ。
「レナ……」
「女の子も楽しいわよ？　妹も欲しかったのよね、あたし」
「……僕は男だよ」
「セーズ！　おれが可愛がってやるって！！」
「却下だ」
声を上げるバーミリアスに、エリオスが即座に言い放つ。
「いや、でもどうするんだよ？　実際もとには戻れないだろ？　バーミリアスを殺せないなら」
「戻ります！」
どうあっても元に戻るとセーズは言い切った。このまま女の子で

いると、バーミリアスに言い寄られ、イズにまたプロポーズされるかもしれない。それは心底からイヤだった。
心は男なのだ。男に言い寄られるなどまっぴらである。
「「どーやって」」
バーミリアスとイズは心ならずも声を揃えた。このまま女の子でいて欲しいなぁという思いは二人とも一緒らしい。言い寄られるかもというセーズの懸念は当たっている。
「最後の手段があるので」
硬く言い放つセーズに、バーミリアスは少し考え、
「最後……あ！」
しまった、その手があったかと悔しそうに顔を歪めた。レナとエリオスにも分かったらしく、ああ、といいながら頷いている。
「え、なに、解けるのか、呪い」
イズ一人だけ分からない。
「解けると思いますよ、ジルゼ様なら」
あ、とイズにもようやく分かった。
この世界創世のときから世界とともに生きている森の賢者・ジルゼ。
全ての魔法を扱える多大な力の持ち主。このアズトリーリア唯一の賢者。その力は聖天の王も魔底の王も軽くしのぐといわれている。ジルゼ一人が魔底の王を押さえているという言い伝えもあった。魔王ディザスターを遥かにしのぐ力を持つ魔底の王、それが地上に現れたら、世界はたやすく滅びるという。そんな存在を一人で抑えているジルゼ。
そんな存在ならばバーミリアスの呪いも、セーズの魔法もたやすく解いてくれるのではないか。
「……会えたらの話だろ」
バーミリアスはまだあきらめていない。
「ジルゼは気難しいから、もう一度会えるかどうかも分からない。困っている人には惜しみない力を与えてくれるって話で、実際、お

れたちに力を貸してくれたけど、もう一度会ってくれるかなー？」
　現実に、ジルゼに会ったのはセーズ一人だ。ほかの仲間は何故か森の中で迷ってしまい、ジルゼの姿も見ていない。森自体に魔力があったらしく、ジルゼが選んだ人間しか彼の存在に会うことは許されないようだった。
「きっと無理だって。あきらめろ、セーズ。お前が女になったのは運命だ、宿命だ、必然だ。おれと一緒にハーレムで暮らそう。可愛がってやるからさー」
「どう考えても人災だッ！！　都合のいい解釈をするな！　張本人！！」
　エリオスに怒られ、バーミリアスは首を縮めた。
「おれは本気だぞー」
「永遠に黙りたいのか？　そうしたいなら喜んで協力するぞ」
　セーズも元に戻るしな、言いながらエリオスは不穏な笑みを浮かべている。かなり本気で言っているのは間違いない。
「あっちは放っておいて……セーズ、確かにジルゼ様なら解呪出来ると思うわ。人間にはどうしても限界があるけれど、ジルゼ様の扱うものには際限がないはずでしょうし」
　人間が扱う魔法は聖か魔のどちらかしかない。それも言葉を媒介にするものだけだ。
　だが、ジルゼならそういう際限がない。セーズが会ったとき、ジルゼは何もない宙から一行に与えた装備を作り出していた。宙に光り輝く文字を描いて。
　おそらくアレは太古に失われた魔術のひとつだ。そのあと、仲間のもとへセーズを送ってくれたのだが、それは普通の口頭で行使する魔法だった。
　ただし、人間が使う場合、転移魔法にはどうやっても方陣が必要で、ある程度の魔力を持つ人数も必要だ。ジルゼは方陣など全く使わずに、一人きりで魔法を行使していた。普通の魔法でも、ジルゼが使うと桁が違う。

それだけの力がある存在だ、セーズとバーミリアスを元に戻せる可能性は高い。
「でも、バーミリアスの言うとおり、会えるかどうかが問題よね……ディザスターは倒してしまったから、今度は会ってもらえるかしら」
セーズは言葉に詰まった。彼の大きな目標だった、魔王ディザスターを倒すという旅の目的は達成したのだ。あまりにも困難な旅だったので、見かねたジルゼが手を貸してくれたというのは分かる。ディザスターには多くの人が苦しめられていたのだし。
が、今度は呪いを解いてほしいというものだ。困っているのはごくわずかの人間で、世界の危機も絡んでいない。
はたして気難しいと言われているジルゼが、再び会ってくれるかどうか。
「だーから、あきらめろって」
バーミリアスがうきうきと言う。
「無理無理ー、絶対無理。そう何度も都合よく出てきてくれるわけないない」
「行ってみれば分かる！」
セーズは浮かれるバーミリアスを遮るように拳を握って力一杯叫んだ。
「ジルゼ様がいる果ての森へ行けば分かる！　もう一度力を貸してくださいって頭を下げるさ！」
やる前からあきらめていたら何も出来ない。セーズはそう言い切った。そういう彼だからこそ、魔王を倒すことが出来たのだろう。不可能かもしれないとあきらめるのは簡単だ。けれど、それではいつも後悔するだろう。
「女としての自分を受け入れろよー。運命だって！」
「うるさいよバーミリアス。そんなもの僕が信じていないって知っているだろ。受け入れていたらディザスターを倒そうなんて思っていないよ」

セーズはキッパリと言い切った。変えられないものなんてない。
止まることは簡単で、何も考えずに受け入れることはとても楽だ。
でも。
立ち向かえば後悔はしないだろう。
自分の心を誇って生きていけるだろう。
誰かに勇気を与えることが出来るだろう。
希望が生まれることを知っている。
歩いてでも、這ってでも、どれだけゆっくりでもいいから、前へ進め。
それが力になることを、誰よりセーズは知っている。
だから彼は――勇者は断言する。
「（これが）運命なんて信じない！！」

終・運命なんて認めない（後書き）

はい、こんなオチ。これにて「運命なんて信じない」は終了です。アホ話にお付き合いありがとうございました。本当にアホな話ですいません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7120d/

運命なんて信じない

2010年10月8日13時42分発行